



江戸名所圖會
三

初
冊
二
三
ハ

ル 4
5105
3



門ル
號5105
卷 3



三

縁山増上寺 廣度院と魏闡東浄家の徳本寺十八檀林の
冠首して盛大の佛域より百一代 後小松院の御願に

開山ハ大蓮社西譽上人中興也普光觀智國師なり

十八檀林ハ武徳常野宮ニ存在也阿彌陀佛六八本願の中第十八を

以て最勝とす不因也 御當家 御稱号 松平氏の松也 我願を願望し

能雪霜はあつたれを又君子の操ありと 太夫の封を受く其字や

木公は後入細はわのときハ十八公なり 依り是を弥陀の十八願より

説けり 精舎十八區を建てる梅檀林と 多く英才と有る法運無窮の操

盛慮は從ひ兩家の御代と浄家の白旗流義より 御代が代まき守護し

本堂本尊阿彌陀如来 惠心僧都の作中座像長四尺

額 三縁山 廓山上人真蹟 上人ハ當寺第三世なり 甲州の産なり

御經藏 本堂の前左の方辨の中ニあり 或人云こは納所の一代藏經也

後秀玖九共衛尉 台余と奉 當山はつとをたり 菊岡祐涼云昔ハ方丈

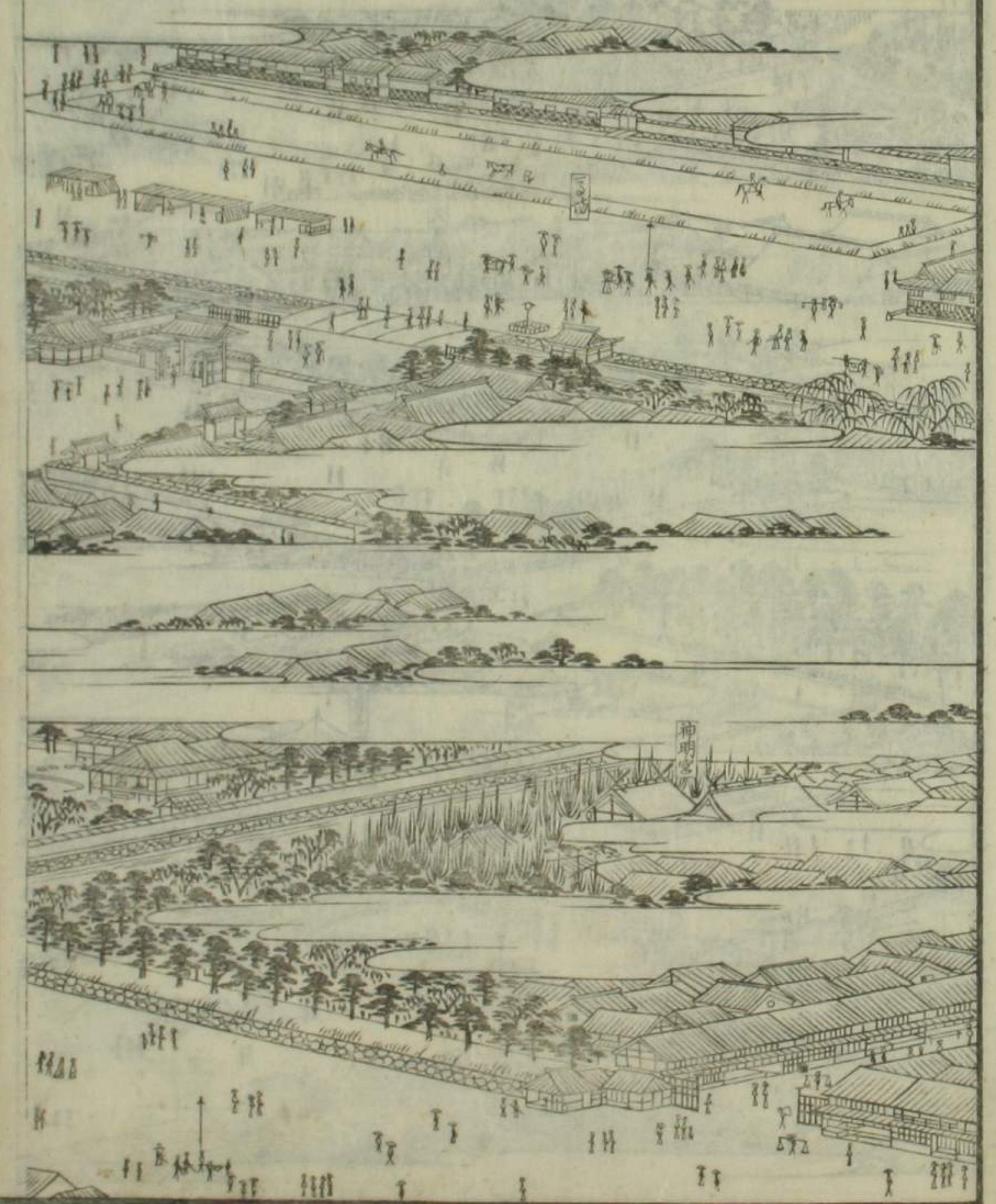
官造と列せ 寛永九年照譽上人子字大和尚 經藏と創立しとたり 今也

開山堂 同所左ニあり 當寺開山以下累世大僧云の

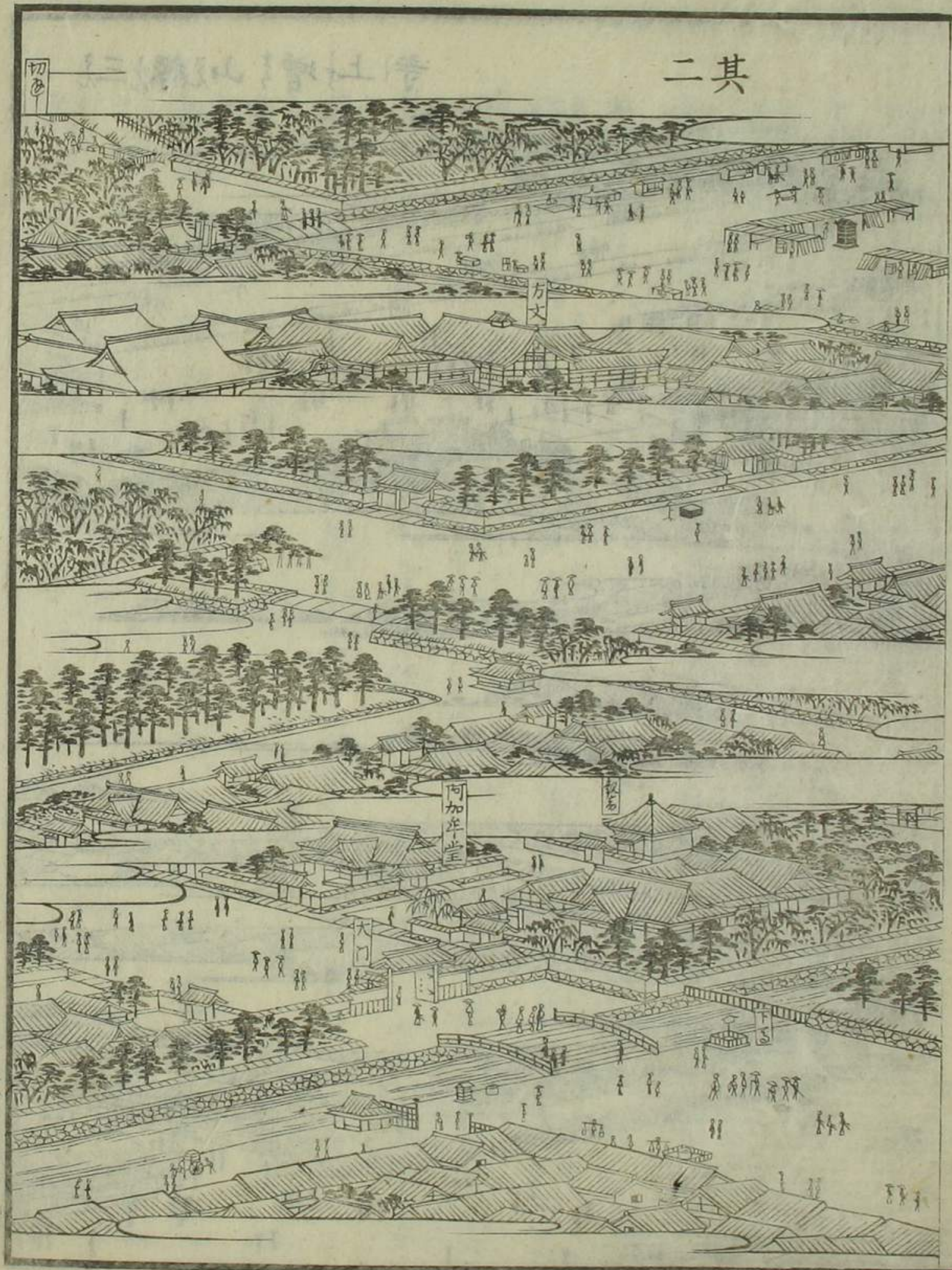
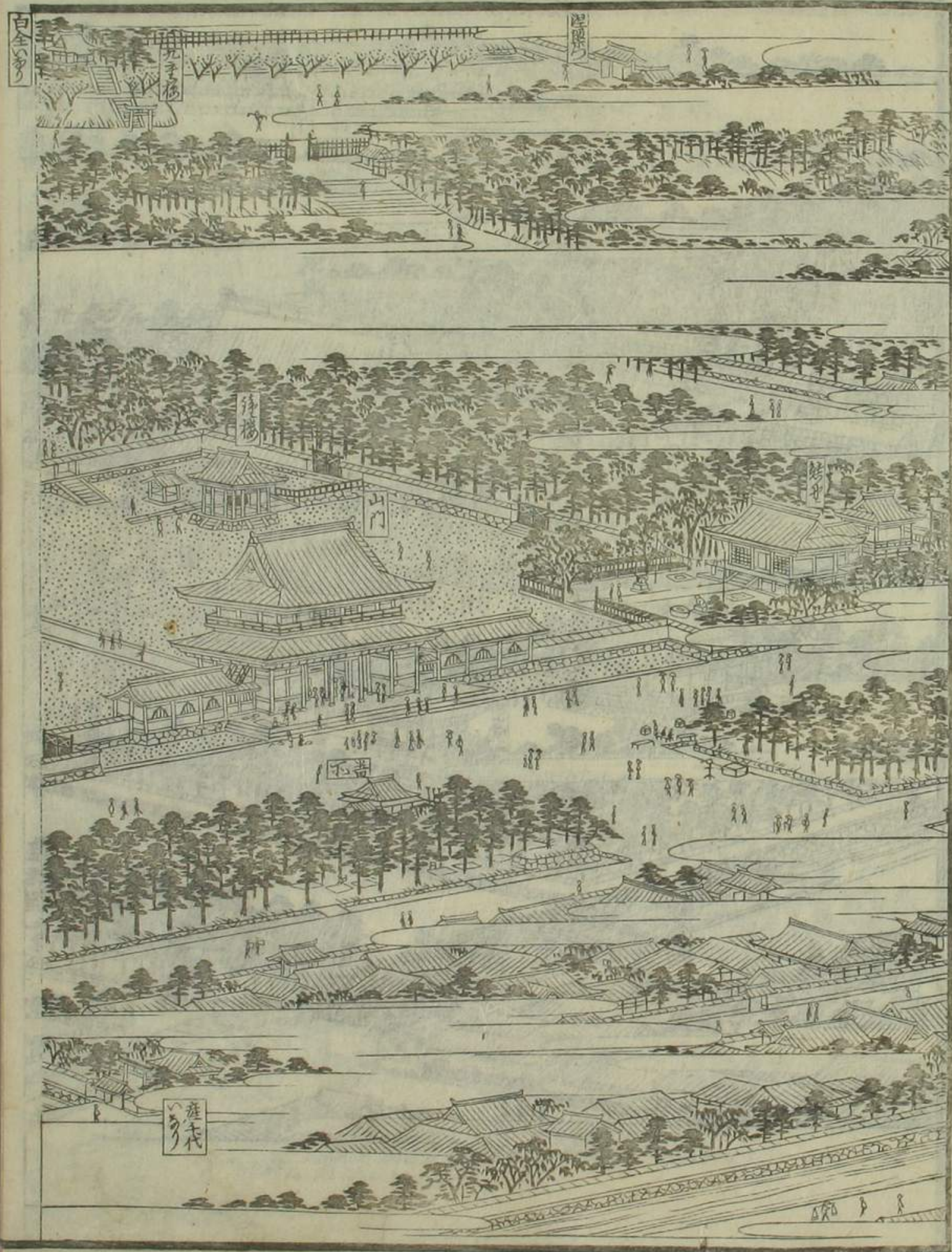
遺像等ハ靈障等と置きと

昭和41年12月20日寄
原安三郎氏贈

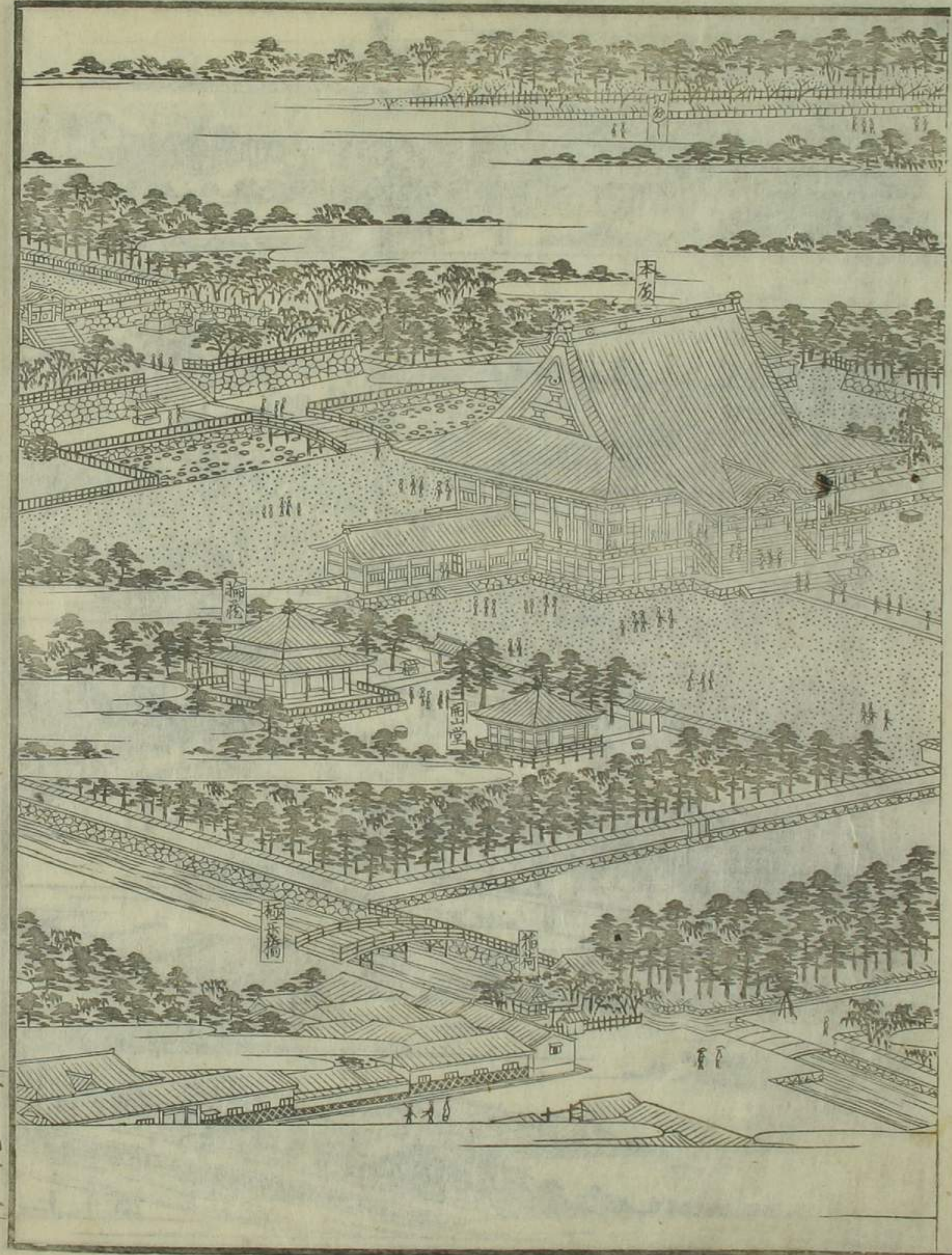
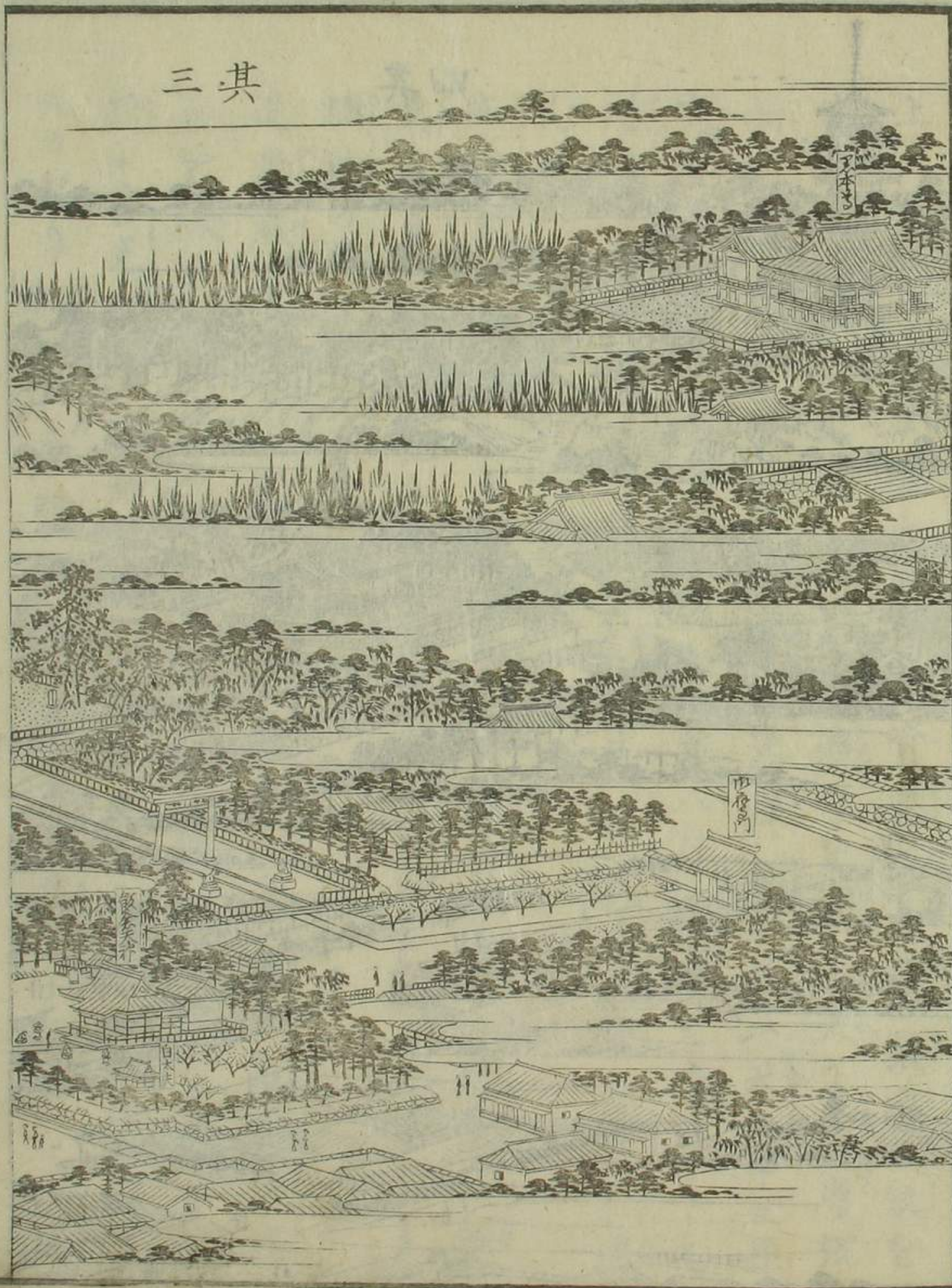
寺上増山縁三



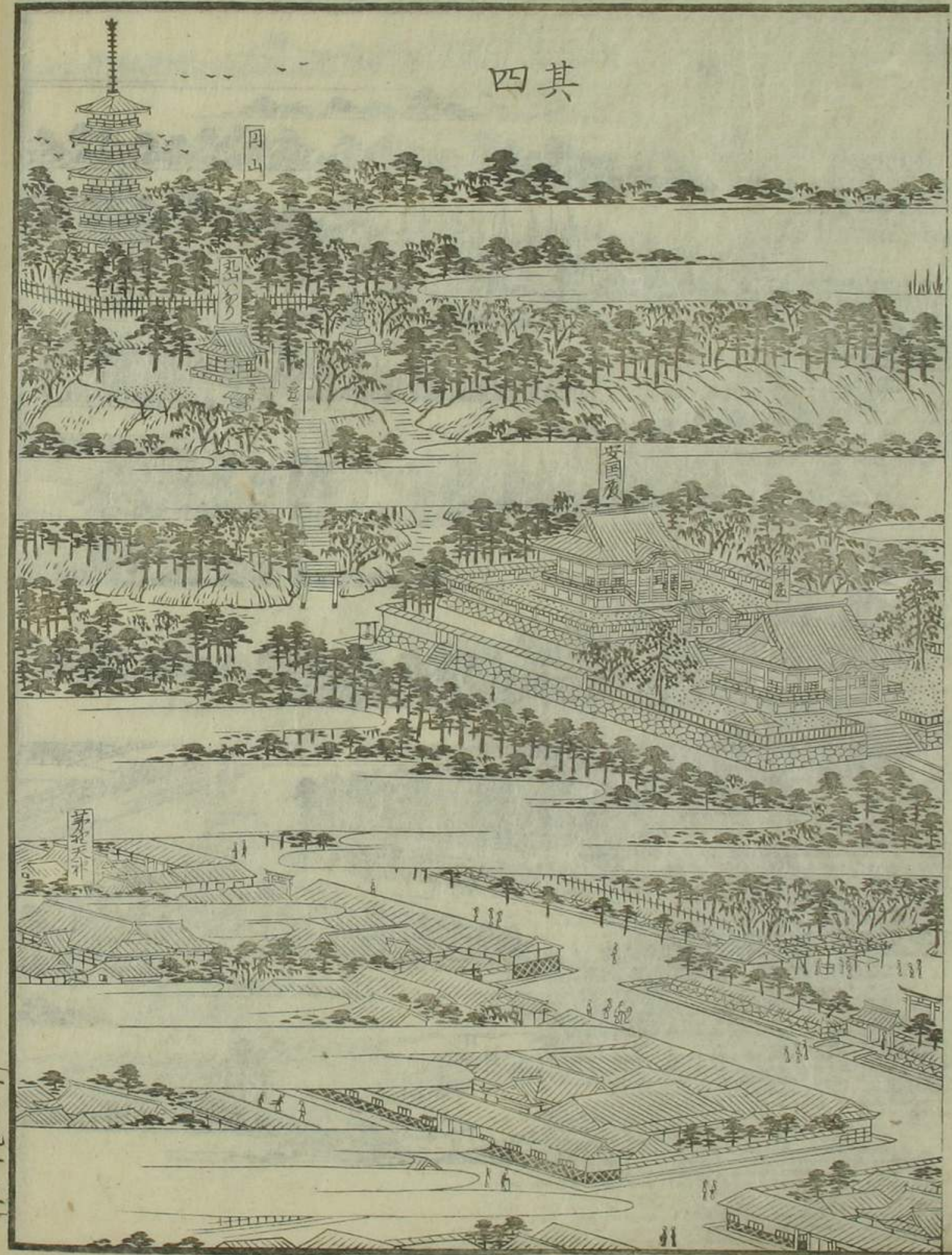
開山百誓上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス 鎮西三統弟 貞治五年
 七月十日 千葉系圖貞治二年 北總の千葉に 八世の祖とす 父ハ千葉陸奥守
 氏胤母ハ新田氏ありと童名を德壽丸と云 十代とあり 徳加冠して
 胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳中々々遂に同國
 千葉寺に入り落飾し初々密教を學び後同公に投歸して淨
 宗に入り智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に
 住せし 今の増上寺是なり 江戸名勝志云増上寺の 此寺始ハ真言瑜伽の
 道場なり一々竟に光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗
 風を轉し淨業の精舎とす 永享十二年庚申七月十八日
 寂し歳七十五臘六十七 東國高僧傳ハ應永二十四年 中興開山
 勅賜普光觀智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誓上人
 と号す 平山左衛門尉季重の後裔なり傳燈 天文十三年 獲國篇
 武州由木に生る 始衣を片山の宝臺寺に樞ひ十八歳感誓



三其



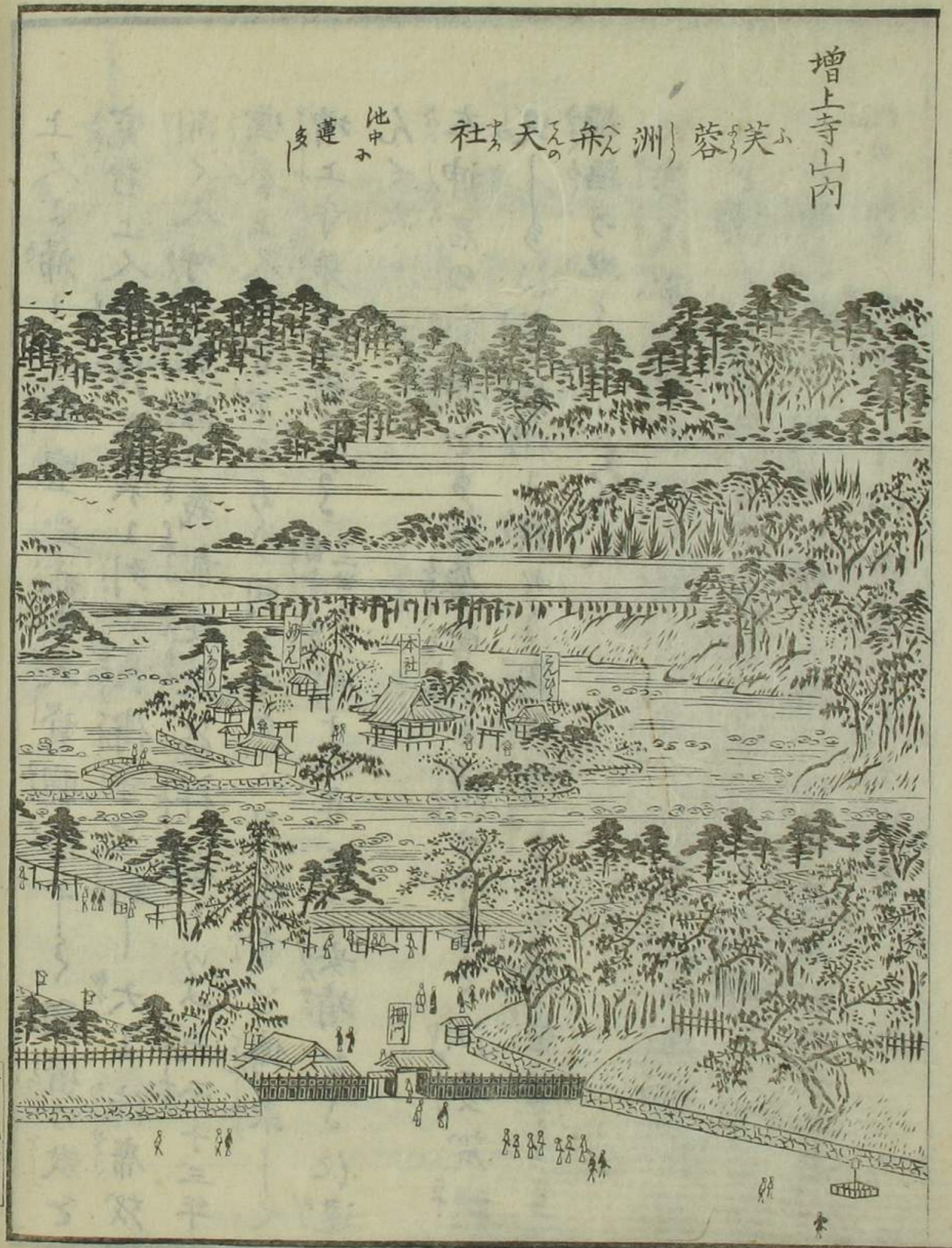
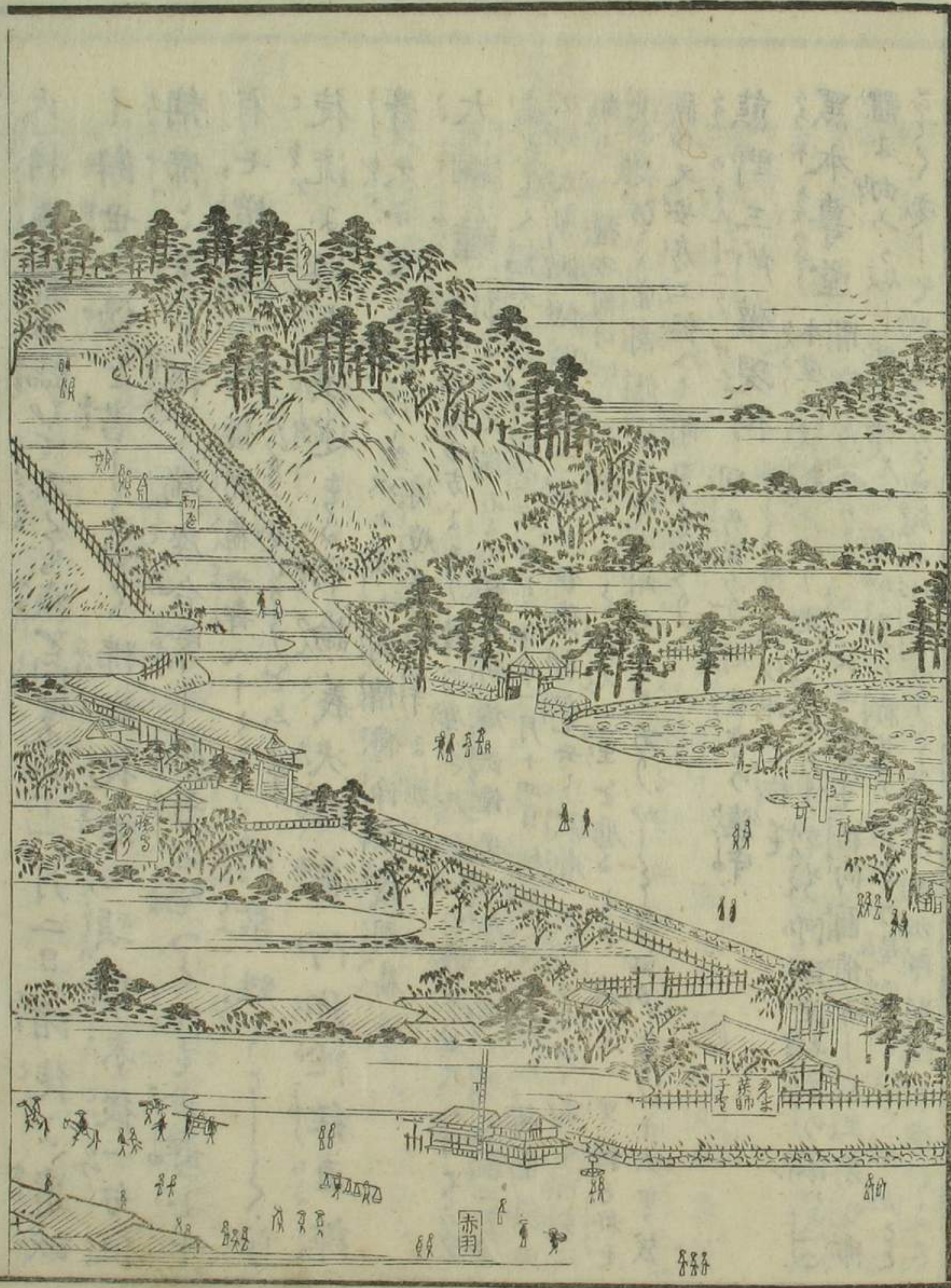
其四



上人の帰し登壇受戒を天資聰悟より顯密の教を
究む上人没後上叢に到る長傳寺を創し大に法席を
開く人呼て教海の義龍蓮苑は祥鳳といふ天正十三年
雲譽上人の會下よりあり同十七年八月塵書を傳兼して
増上寺第十二世となる當寺第十二世より同十八年天下安靖なるに速
んで大よ

大神君の眷顧を多し屢宮中へ請せしむる法要茂聴
受し多し崇信他より異なり竟に増上寺と修營せしむる
植福の地と稱しあり又

後陽成帝師を宮内へ徵し道と問ふ盛に淨教に深
旨を陳せ獻感ありく褒章を加へ新に宸翰を添多し
特に普光觀智國師の號を賜ふ時は慶長十五年七月十
九日なり元和六年師微恙をふも嗣君



大將軍親ら臨じて忝くも疾と向せり十一月二日諸徒は遺誠
辭世の偈を書し曰く佛話提撕心頭塵未後一句但
稱佛と筆を抛く端座合掌一佛号と唱へく化を世壽七十
有七僧臘六十護國篇世壽八十あり門葉姓くくく学
徒流は浴を撰述する而論義決擇集阿弥陀經直譯
等大おせり行る傳燈系圖等より其の
大銅鐘 本堂の右の方あり鐘の厚さ尺余口の度り五尺八寸をとり
森蒼上人歷天大和尚建宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田
次郎太郎源祇寛鑄工推名伊豫吉寛云く其聲洪大中一遠く百里に
聞ゆ一鐘の間の響尤長く一里を度るとく遠く一里鐘と称せ
隔つ又安房上総へも聞ゆるあり

熊野三所權現祠 同所あり則當寺の鎮守
黒本尊堂 本堂の後蓮池より興のたまりあり阿弥陀如来の像ハ惠心
體は向ふく世に呼んで黒本尊と稱せり多くの星霜と磨く金泥を
りく変りて黒色となるは此稱ありとも或ハ源九郎義経が持する不

故は九郎の意なりと始參州桑子の明眼寺ありと某の邑の
調を以て寺産不充此靈像と云ひく常々持佛とありの意ハ當
新く室帳五座構飾精巧と極む以上浄宗獲國篇は載る毎歳正月
十六日四月八日同十七日諸人々々々

參詣 元和九年癸亥所建立或云八年なりと樓上は釋迦文殊普賢
の彼岸の中又二月十五日四月
八日登樓とゆふ

安國殿 本堂構の外南の方あり四月十七日八所祭礼あり參拜と許さず不詣者
人多く來由ハ其障ありて是故略す別當を安立院と号す

五層塔 同所佛殿の北倉林の中あり涅槃石 同所あり佛彫物師
酒井雅樂侯の建立なりと云ふ涅槃石 吉岡豊前作なりと

曼茶羅石 同所あり後藤祐乘得來の鷹門 同所あり

極樂橋 同所前の溝に架せり

宗廟 同所當家の御靈屋なり

常念佛堂 同所佛殿の北あり惠照律師と号す浄土律中當山の
茶下は詳あり當院は上人真筆の涅槃像の印板あり有信の輩は授与せ

性壽庵 同所後の方にあり尾州清須城主松平隆摩守忠吉の靈牌と
置故は俗に薩摩堂と云ふを側は小笠原監物を始とく死

五人の石塔あり柳の井とつちを同所

飯倉天満宮 天神谷あり當山の地主神なり昔飯倉の神明也此地あり

別當 茅野天満宮 同所南の方松林院あり

圓座松 同所圓山同所辨財天祠 赤羽門の内蓮池の中島あり

子聖權現社 清林院別當 産千代稻荷 觀智院あり昔ハ普光院

大門 東下馬札を建らし 御成門 北の方馬場を相對す此所

淫繁門 切通の上あり惠照院 柵門 山下谷より赤羽へゆる

當寺旧古と貝塚の地あり光明寺と號せし 真言

瑜伽の密場中々 後小松院の御願に依り草創ありし

古刹なり至徳二年酉春上人移り住するの後竟り了誓

上人 傳通院三月の徳化に歸し寺を改め三縁山増上寺と

號し宗風を轉し浄刹とす 事跡合考あり三縁山歴代系

今荒町邊中項移り此谷邊後慶長初移り此谷より芝へ

移りハ慶長三年戊戌八月なり武徳編年集成は慶長三年戊戌去る

天正十八年辛卯平川口へ移され増上寺を芝の地よりつちあり 平川口

比谷古地と接を混しつちあり

東照大神君 天正十八年始り江戸の大城に入りしを死州民

鼓腹し老幼相携り道路を拜迎し奉る幸は寺門の前路と

通所ありあり 觀智國師も是を拜せんといひ寺前より

あり 是則此谷の時師の道貌雄毅尋常なりと見え

そはしひ其名を問せし乃寺に入りて懇々其後當

寺を以て植福の地となりし永く師檀の所契約あり

所崇敬あり是を親王に比せしと師を衆興し殿階を昇るを

得代に侍成この榮をうけし時寺境隘狭中々あり

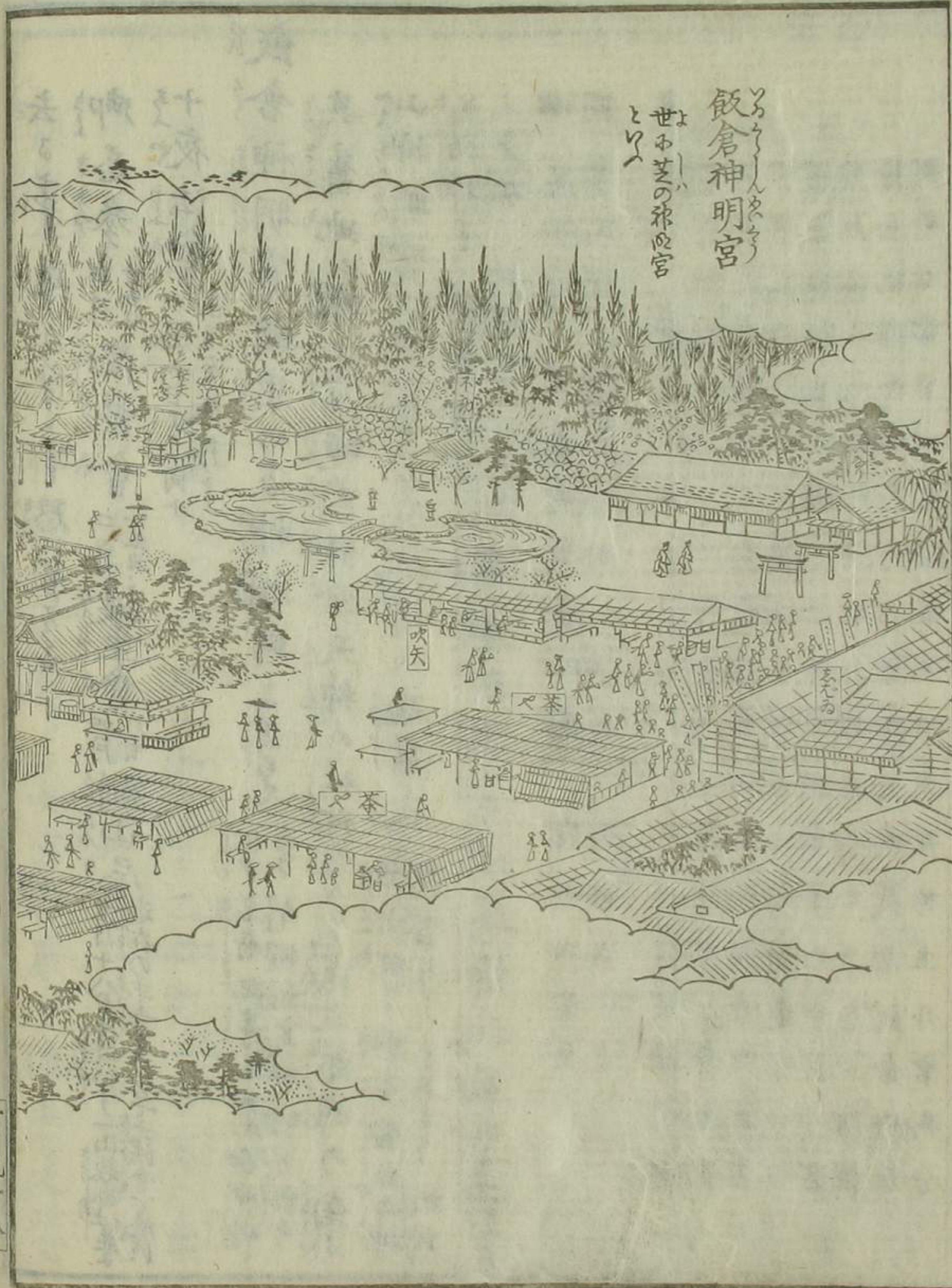
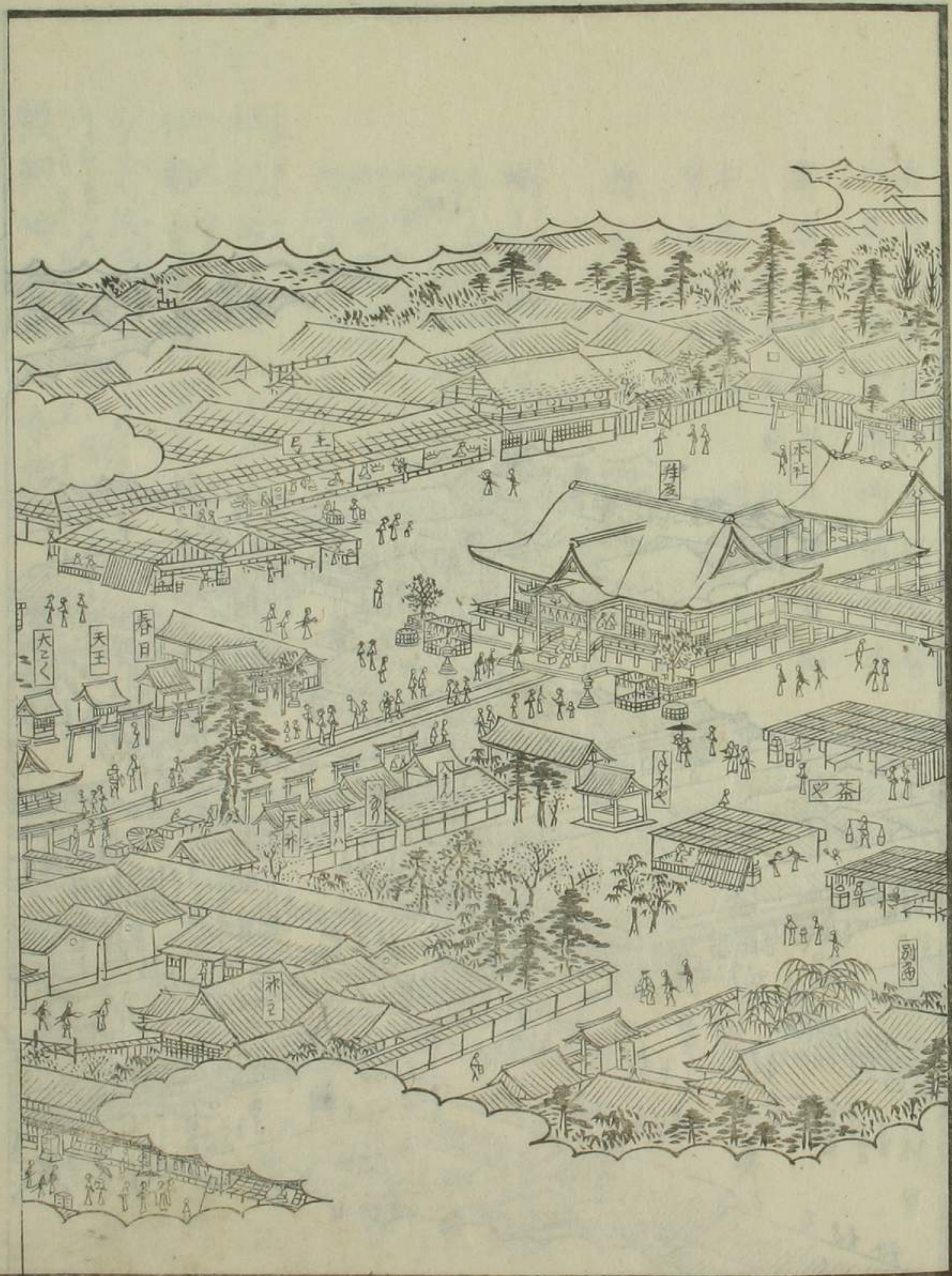
大城は接近せし是乃此の谷に依る今の地に移さる大資財を
喜捨し殿堂房室に至るまで悉く營建し最宏壯の大梵
刹と名する事跡合考は慶長十年己巳本堂於此浄家の宗教一時
勃興し念佛の聲天下に洋々たる一朝江前の老翁師は謂て予
今夜祥夢を感て師微笑く予其夢を驚け吾買んとい有銅二十
疋を解ふ既ちて翁云く増上寺軒端の南本繁るん師曰く吉徴あり慎て
人は信じてなると果しと翌日伽藍營復の命ありと竟に宏構鉅材天正
此觀となり由浄土高僧傳に記す
抑當山ハ關東浄刹の冠首中々龍象の聚る所實に靈山
會上布金紺園あは比まへん數百戸の学寮ハ疊々として
軒端を輾り支院ハ三十餘宇靡くとして一毫を連るる三千
餘の大衆ハ常にあふ集る中おも能化ハ一代の法蔵を胸間
貯へ所化ハ十二の教文を眼裡に晒せし三心即一の窓の前
より五念四修の月を弄ひ事理俱頓の林花中々実報受
用の花を詠す佛閣の莊麗る七宝莊嚴の浄土も又此と

去る事遠くを思はるる
御忌参 正月 涅槃會 二月 誕生會 四月 開山忌
十夜法會 十月六日より同十 五日迄修りす
江戸名所記等には此谷神明とあり今俗間芝神明と稱せ

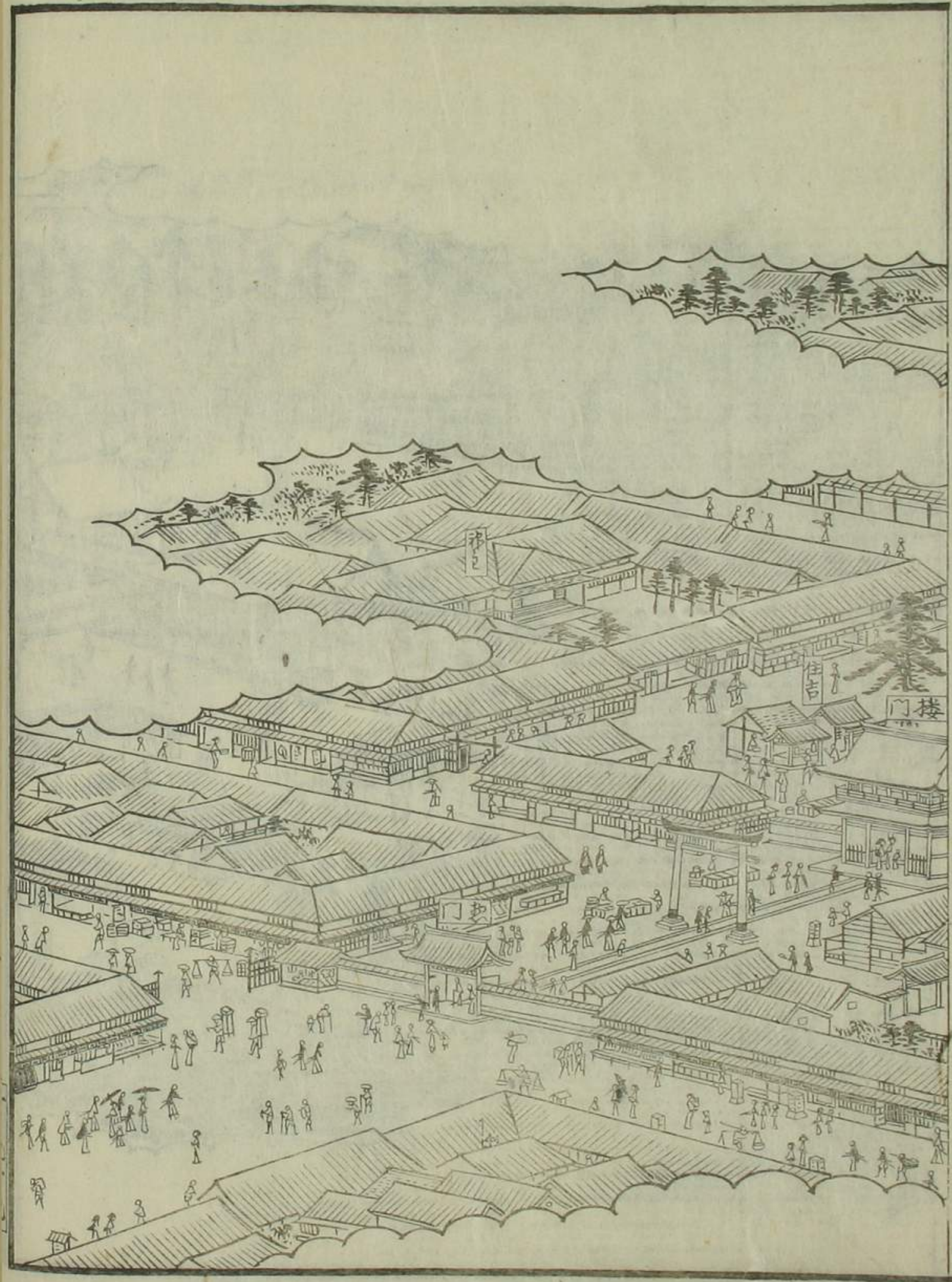
飯倉神明宮 同東の方神明町にあり
其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社なり或云赤羽の南川
山神明宮の地なりとも社司ハ西東氏名所記に往古當社の神
足柄郡より齊藤氏なるへつ別當ハ金剛院と号し其餘社家巫女あり
人を招く神主とすと云

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 長日 御幣 四貫文
同書又曰 飯倉御厨 長日 御幣 五十丁
東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉

寄附 兩村於二所大御所 依仰 異社 然者
京之 列感 靈夢 之後 當宮 事御 信仰 他社 然者
平家 黨類 等在 伊勢 之國 由依 觸令 聞遣 軍士 之
時着 縱難 為可 亂入 神之 明御 鎮座 之由 於祠 宮
無左 右不 可亂 入神 明御 鎮座 之由 於祠 宮
仰舍 也謂 兩所 宜荒 木田 成長 神主 外宮 御厨
被仰 付當 官一 禰宜 荒木 田成 長神 主外 宮御 厨分



飯倉神明宮
世々芝の森の宮
といふ



安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣而通御寄進狀下畧

寄進 伊勢皇太神宮御厨壹處

右志 在武藏國飯倉 爲成就私願珠抽忠丹

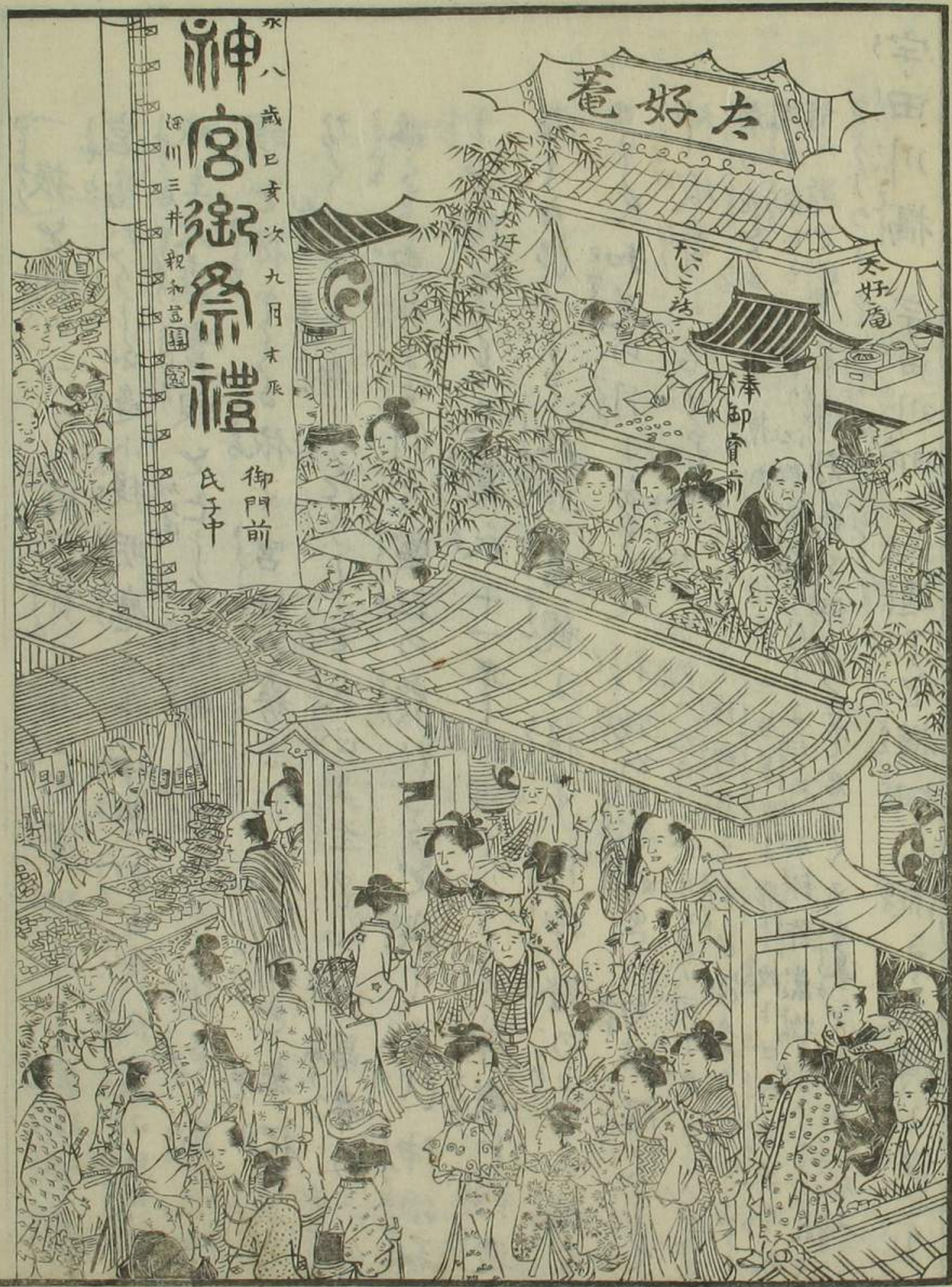
寄進 狀如件

壽永三年五月三日

正四位下前右兵衛佐源朝臣

按 當社を飯倉神明宮と稱し、其の地は、
 此の地は、伊勢太神宮の御厨あり、
 武藏國大河土の所厨を豊受太神宮の御厨と稱し、
 内、あし、ろ、め、と、あ、り、な、る、

社記云人皇六十六代 一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
 伊勢皇太神宮を鎮座なり奉る
 其時神幣と大牙一枚此の地
 天降り又此地の童女を神燈
 其後建久四年癸丑若大将
 頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍



神宮御祭禮

御門前
氏子中

大好寺

天好庵

九月十六日
飯倉神明宮祭礼

世小やちり
まのりといふ
十日の世日迄
多傷秘集凡



御門前
氏子中

屋

千客
萬来

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附あり其項繁昌の
 宮居たりし後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北
 城主大森實頼と亡く後威を逞うせ頃是より為に神
 領を掠せし依宮社の霧は朽風を破き奉祀の人も
 なく大に荒廢したりしを天正に至り四海昌平の時
 忝も台命より當社の廢れしを興し多し神領若
 干と附せし又寛永十一年甲戌より神殿を修造
 たりありし社頭舊觀を復す依神燈の光を赫々
 としく和光の月をあそべし利物の花ぬきハ白く深くして
 神威青く倍せし
當社の祭ハ九月十六日なり同日ハ
 至るの参詣集を商ひ物繁き中あり
 藤の花を画きし繪割籠のハ土生薑珠の
 生薑祭とも唱へり江ノ名町ハ生薑珠の
 竹ハ野と鬻りし繪割籠を俗ハちきと名つくと又生薑を賣りハ丸久し

宇田川橋 宇田川町の大通りと横切く流る小溝に架せり



日比谷
 稲荷社
 毎年初午祭ハ二日
 以てより御助町に
 三丁目の横にあり
 仮を補理ハ作興
 此辺の番昌
 あり

鳥森
稻荷社



今ハ上よ土を覆ふ橋の形を先ぞ

宇田或ハ
宇多ハ作

小田原北條

家の臣宇多川和泉守とて人架せと云傳

小田原北條
四年以樹修理美

朝興北條氏徳は賁らと品川表を戦ふと云傳下は氏総朝興と云傳首と

実驗ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともふ中つけ普清後

ころは以法とあり東海道驛路鈴長禄元年丁丑四月八日大田道灌江

うら其後宇多川和泉守長清ハ品川の館に任とあり又元禄開校の江戸鹿子と

つる草紙は昔此所へ宇田といふ乃と墮つるなふ此名ありといふ也燈ともふ

日比谷稻荷祠芝口三丁目西の裏通よりあり

本山方比修験寂静院別當より萬治の頃藍屋五兵衛と

つる者託宣は依て花洛藤森の稻荷を勧清なせしや

鳥森稻荷社幸橋より二丁斗南の方酒井下野彦郎の北比

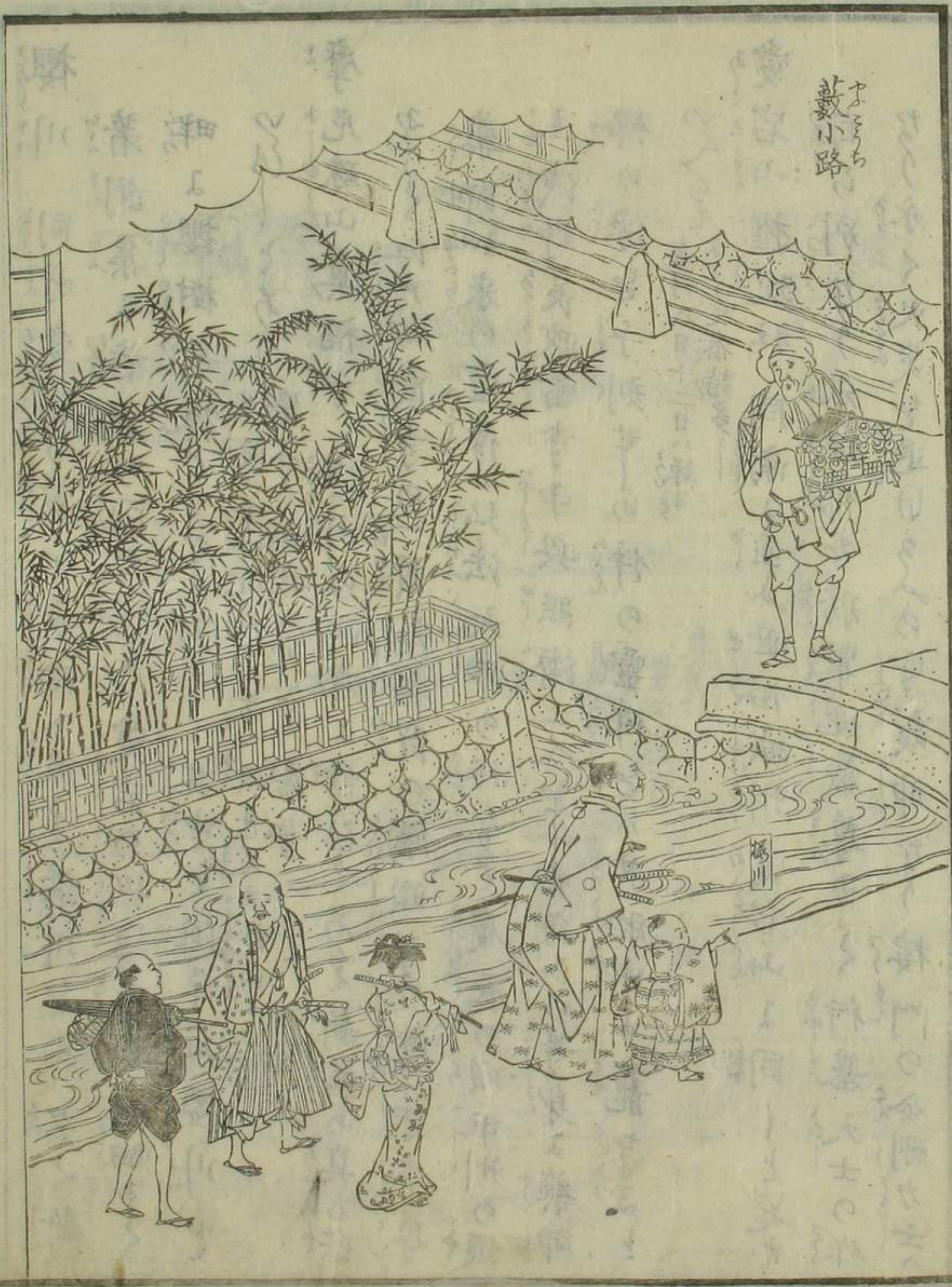
横通よりあり往古よりの鎮座といふと年歴来由共は詳

なす元禄開校の江戸鹿子といふ草紙は天慶年間藤原

あるありて當社の神宝は古き鯛口一口を納む

又如何

元甲辰年



藪小路

正月 河辺 司行平 建立と 彫りてあり 江戸 名所を 記し 日比谷 箱荷の 條下に 云く
 此の宮地ハ 借地ナリ あり 一ノ 既ハ 前絶ト あり 箱荷の 神宮守ト 告て 古來 此
 燈 地ナリト 懸 口 切ト あり 与ヘリ 宮守ト あり 此 燈ト あり 宮居ト あり 其後 社の 延
 當社の 事を 記す 一ノ 宮守ト あり 明曆の 四年 奇瑞 あり 一ノ 宮居ト あり 其後 社の 延
 際地ト 社司 山田氏ト 柳營 御連 歌の 御連 衆ト 別當ハ 快長院ト
 号シ 本山 方の 修驗 なる 祭禮 毎年 二月初 午ニ 執行 幸橋 御門ニ 假屋
 移以 參詣 群集 して 賑々 たり

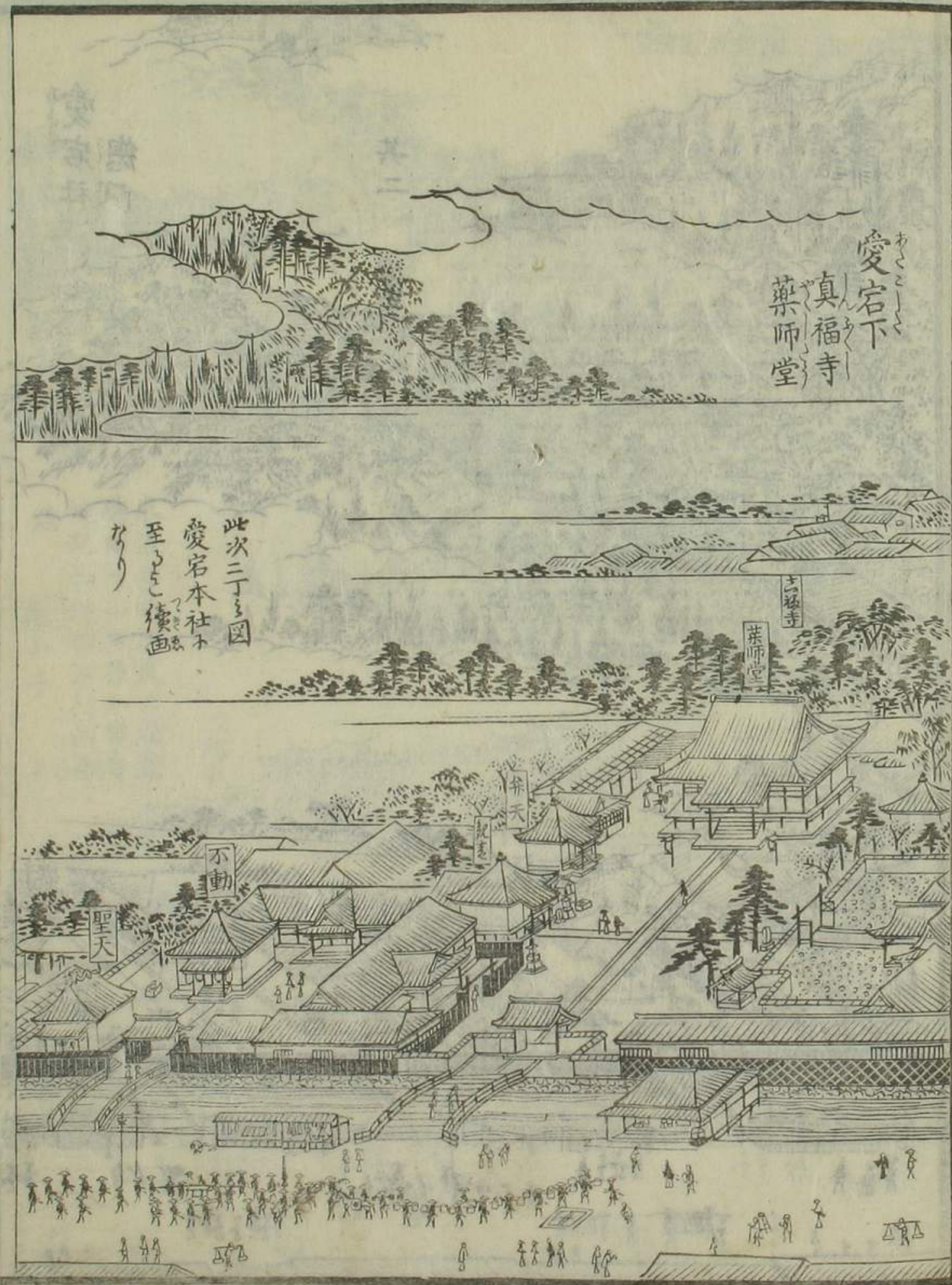
古河 御所
 足利 成氏 願書 一通 當社ニ 載す

稻 荷 大明 神 願書 事
 今度 發向 所 願 悉 於 成就 者 當社 可 遂 修造 願書
 之 狀 如 件
 亨德 四年 正月 五日
 左兵衛 督源 朝臣
 成氏 判

藪 小路 愛宕 の 下 通り 加藤 侯 の 邸 の 北 の 通 里 と 云 同 所 良

の 限 裏 門 の 傍 に 少 し 竹 叢 あり 故 に あり といふ 慶長 より 寛永 の
 其 来 由 詳 ならず 傳 説 あり とも 燈 と あり とも 項 至 是 細 小

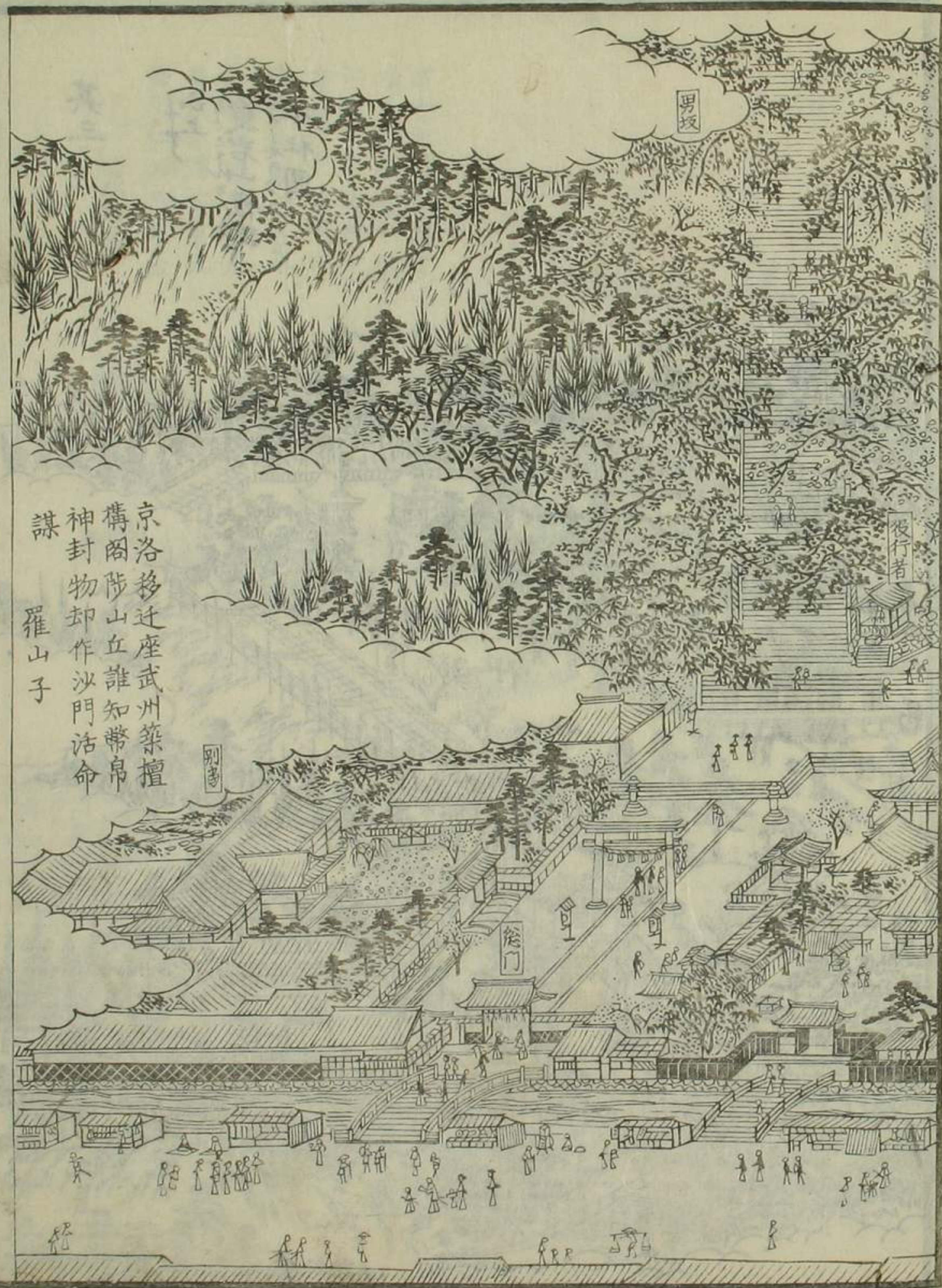
三 糸 侯 此 地 住 せ といふ 庭 中 の



愛宕山下
真福寺
薬師堂

此三丁と因
愛宕本社不
至るは後画
なり

櫻川 同所愛宕の麓を東南へ流る。溝川とあり名く新
 著聞集は昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑あり
 畔は櫻樹幾株ともなくあり。其中を流るは櫻川也
 下流は宇田川橋の方へ流る。又三保山は
 傍に金杉の川も流る。又三保山は
 摩尼珠山真福寺 櫻川の西岸は傍にあり新義の真言宗
 中江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり。當寺本尊
 薬師如来の靈像は弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領
 主浅野長政當寺中興照海上人として自らの等身は薬師
 佛の像を手刻せしめ件の靈佛を其胎中は籠むると
 毎月八日十二日八縁日
 愛宕山権現社 同南に並ぶ世俗城州愛宕山は同一と之を
 自ら別かり本地佛を勝軍地藏尊あり。行基大士の作
 なり。永く火災を退けしめの守護神なり。樓門の金剛力士ハ



京洛移遷座武州築檀
 構岡陟山丘誰知帶帛
 神封物却作沙門活命
 謀
 羅山子

男坂

夜行者

別當

總門

其二

女坂

本地堂

愛宕社
 總門



宕山高倚勝軍宮
 晴日登臨積水東
 江樹千里連關下
 海雲一半傍城中
 祇憐精衛仍含木
 誰識鸚鵡忽擊風
 羞殺魚鹽都會地
 治生無似陶朱公

服元喬



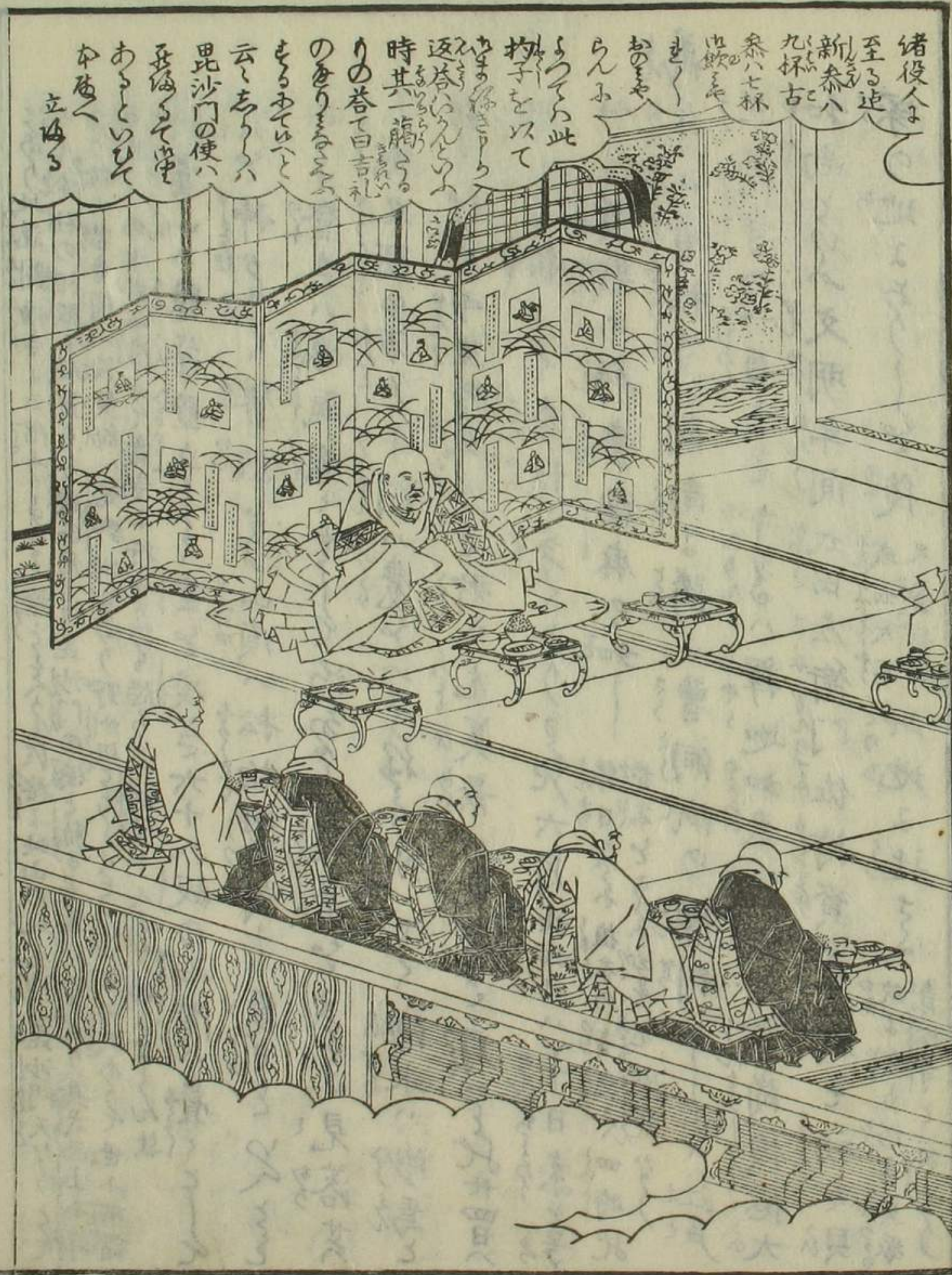
其三

山上
 愛宕山權現
 本社園



運慶の作同二階の軒は掲一愛宕山の三字ハ智積院推
大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下あり新義の
真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と
號も二世俊賀上人と云々四箇寺ハ湯島根生院本所彌勒寺
當所真福寺並み當寺と云々
神證上人字を春音といひ後ありて下野の人なりて姓を
盛谷氏母ハ皆川氏なり元和五年 釣糸ハ依り金剛院ハ退居をせり
天和を後ハ春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院
滿藏院鏡照院壽桂院等も六院あり俊賀上人字ハ圓精と号す野州
西が邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱ハ俊賀父ハ伊勢守近律神
同ハ前ハ彦其始下妻の圓福寺ハ住を然るも其項下從結城の元壽上州
松井田秀第等一世の豪俊なり俊賀上人とあはせし新義の三傑と稱せし
元和五年俊賀上人愛宕權現の別當ハ余せし其圓福寺の号を以て一字と
關ハめハ永く大法幢と樹大法鼓と擊夏冬廢るも其後ハ檀林職と
カハ學徒對ハと云々雲の如く屯て川のや起る實ハ江城檀林の權輿多
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺行化の時當
社の本地將軍地藏尊の像を彫刻しあひ後安部内親王ハ
奉_{弟四十六代 孝謙}親王則彼地ハ宝祠を營々是と安置か
其_{天皇の御子なり}然るも天正十年壬午の夏 台棋泉州を

發しあひ大和路よと宇治を經く江州信樂ハ入せ賜ふ此時
多羅尾四郎右衛門といふ者の宅ハ舎らせらるる頃あり
此像を齋を多羅尾家譜ハ左京進光俊初く多羅尾と号す
光郷江州信樂を領す云々多羅尾ハ四郎左衛門ハ其節同國磯尾村の
あはれハ四郎兵衛光郷入道道賀のりなり
沙門神證といふを供せし此靈像を持して東國ハ赴ゆ
爾より 御出陣毎ハ神證と云々此勝軍地藏尊と祈念
せしあはれ遂ハ慶長八年癸卯の夏 台命ハよめり同庚
子年石川六郎左衛門尉當山を關き假ハ堂宇と造建し
あひ其後同十五年庚戌本社と始悉く御建立元和三年
丁巳同國豊島郡王子邑ハ於て百石の社領を附しあひ
と云々 惣鹿子といふ冊子ハ此地ハ元櫻田の村ハ内藤六郎といふ人の
修せし地ハ山後ハ心代ありハ春音慶長庚子の御出陣ハ勝軍の法を
慶長八年九月廿四日貴賤の恭詣を許さるるあり江戶名勝志同名所あり
又爰ハ安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といふ人の勸誘あり



諸役人
 至る迄
 新奈八
 九杯古
 参ハ七林
 出飲
 出飲
 おのま
 らん小
 ろつて此
 物子を以て
 返答
 時其一膳
 りの答て白言
 のをり
 云々
 毘沙門の使ハ
 兵衛
 あつて
 本殿へ
 立ぬ

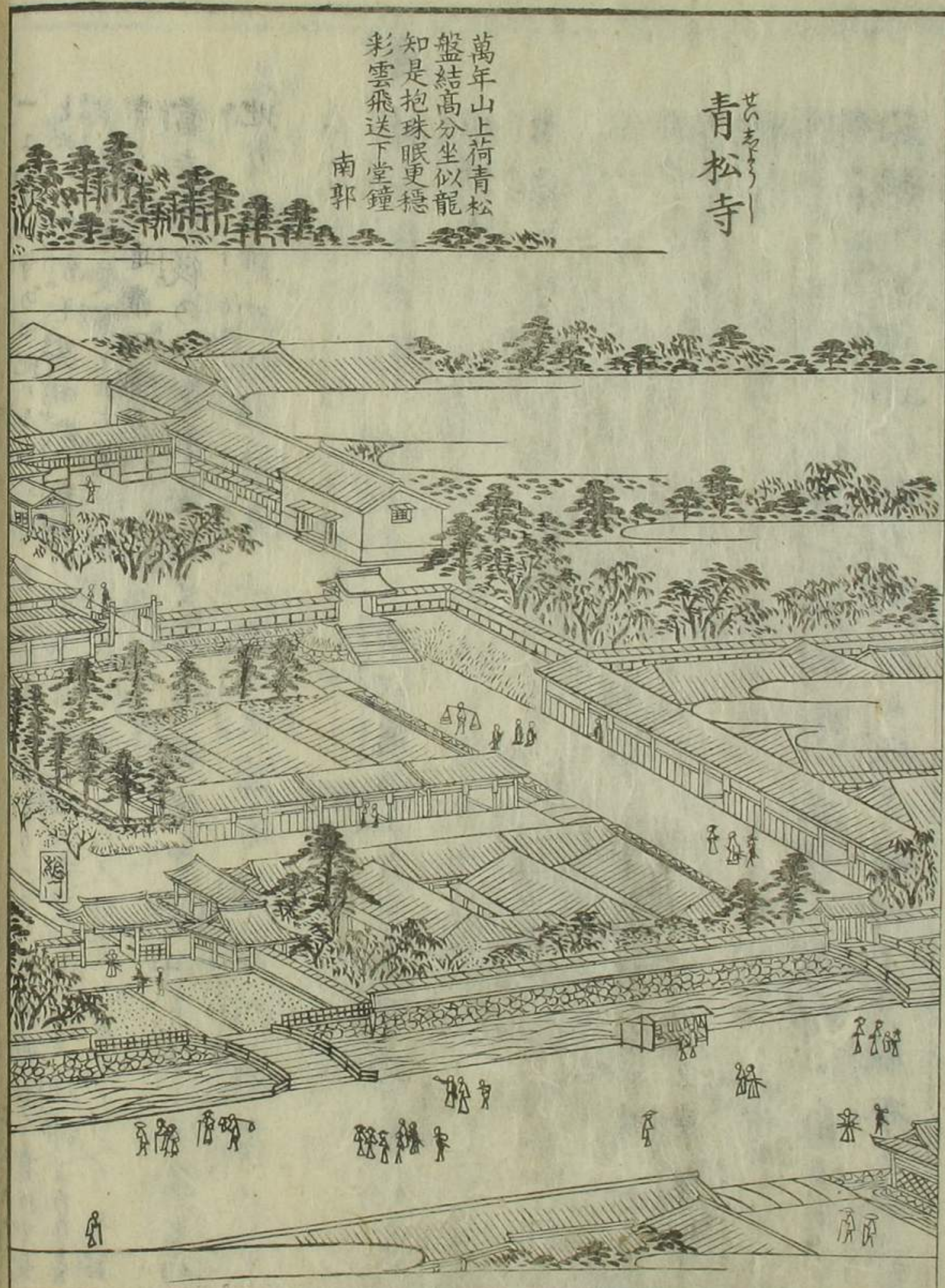
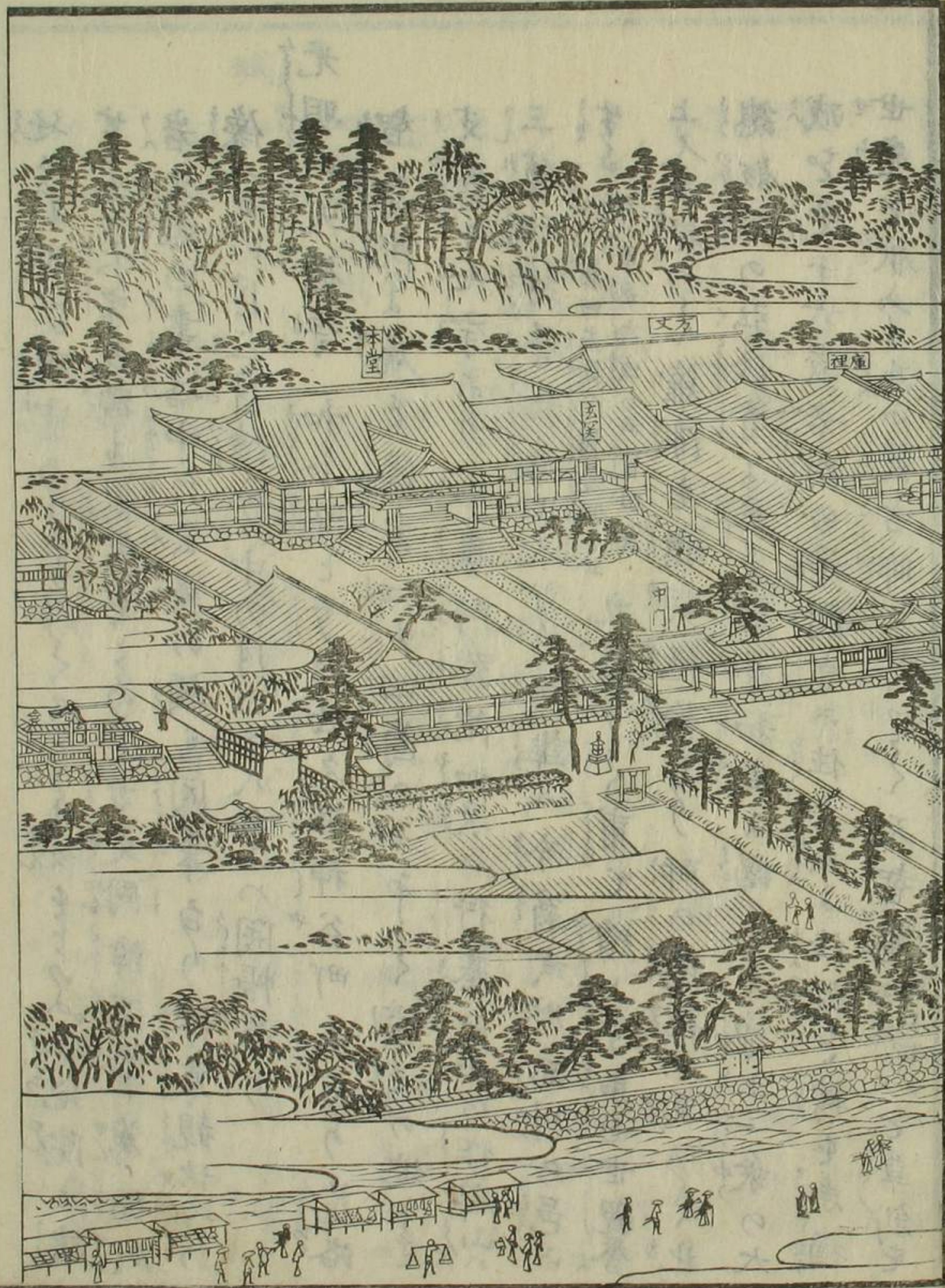


愛宕山福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
 三日小修行女坂の上愛宕やとつて
 若肆のあり一白例はこれを勤む
 この日寺主と始と一支院ありも
 出頭して其次第あり座を備け
 強飯を發せ半小至る頃此毘沙門
 の使と称する者麻上下と著し
 長き太刀と佩雷槌を差添又
 大なる飯の杖を杖突初春の
 飾り物あて舟と造り是を冠
 相隨ふりの三人共本殿より
 男坂を下り福寺
 小入て此席小至り
 粗机ありて行
 飯をとりて三度
 魚板をつき
 して日
 まりりか
 者ハ毘沙門天の
 出使院家後者
 をしや寺中の
 面長屋の
 所化も勝手

此説福寺云は... 按此山の地主神ハ毘沙門天なり... 今此山の相殿ハ安置を毎歳正月三日毘沙門の徳と稱する舊社の式あり其式画上下詳... 日光の古式ハ准少僧寺ハ行少のの恐らくハ俊賢上人より始るなり歟
抑當山ハ懸岸壁立し空を凌ぎ六十八級の石階ハ疊くとて
雲と挿ぐめく聳然り山頂ハ松柏鬱茂し夏日とて
あま登るとハ涼風凜々しく何れも炎暑をよそ見落せ
三條九陌の万戸千門ハ覺とつてゆる所せく海水ハ剛焉と
切けく千里の風光と貯へ尤美景の地なり月を此廿四日
縁日と稱し参詣多くとり六月廿四日ハ千日集と号
けく貴賤の群參指麻の如し縁日ハ植木の挿立は四時此
萬年山青松寺 同南隣る曹洞派の禪刹也江戶
三箇寺の一員なり本寺ハ釋迦如来閑山と雲崗俊徳大
和尚より文明年間太田左衛門佐持資草創を初を具
塚の地よりしを後或云天正此地は迂る故今も俗は貝塚
青松寺と稱せり

一ハ青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐
と云人草創を其旧跡ハ花町の貝塚當時玉虫八左衛門と云る屋鋪よりあり
彼墓と甲斐塚と云と菊岡治涼ハ青松宮内と云人の建立なりと云り又當
寺ハ太田道灌の塚ありと云詳なり
當寺の後の山を合海山と号く眺望愛宕山より望みく美景の
地なり惣門の額万年山の三大字を閩沙門道霈の筆

勝林山金地院 増上寺の西切通の上にあはる京師南禪寺の
塔頭中々南禪寺は宿寺なり五山の僧録と稱を本寺ハ
唐佛の聖觀世音菩薩なり 或人云宋人陳和卿が作なりとのみ
閑山を大業和尚と云其頃碩学なりこれハ五山の僧録同命せし
都留の毛衣と云草紙ハ古ハ寺社裁許のり金地院境内ハ青葉楓と
稱する古木あり今ハ燒七ひくかりやりの
項の物より後此地へ閻魔王ハ石像ハ塔中ニ玄庵の前にあはる
宝永の頃南部の領主靈尔ハ依る彼地より麻布の別荘ハ



青松寺

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭

延され再び威靈あるより又ふ安をそのみ金地院と書
せし三大字の額を水雲写しあり方丈同津溟筆薦福殿
岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆あり本尊觀世音の
像ハ大の月三月續々中の月の十八日ふの開帳あり

光明山天徳寺 和合院と号し西久保神谷町あり花洛

智恩院は属し浄家江戸四箇の一なり紫衣の地を

支院十七字あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ

三蓮社縁譽称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑小

生る父藤田左衛門尉道昭と云母富福氏或ハ云富田氏九歳より甫て増上寺弟七世親譽

上人は従つて難深を聰明絶倫なり師の遷化は及び北

總飯沼の弘経寺に至り鎮譽和尚は謁し浄土一乘の大

戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉し志猶

世塵を厭ふ後古郷に歸り天智庵或ハ又と草創也

今の天徳寺是なり天徳二年の草創といふ先師親譽を以て開山祖といふ

師弥道世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひく洛の知恩院に

至り傍に一精舎を建てる住し是を一心院と号し一心院ハ念佛三昧の本寺也

昼夜不退し常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製

し永世の標準とす今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩

とす花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院挂の極樂寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創せり

の念場とす天文廿三年の秋一心院に寂を實し七月十九日

化壽四十一とす今世間用中所の二連數珠ハ師の製せり

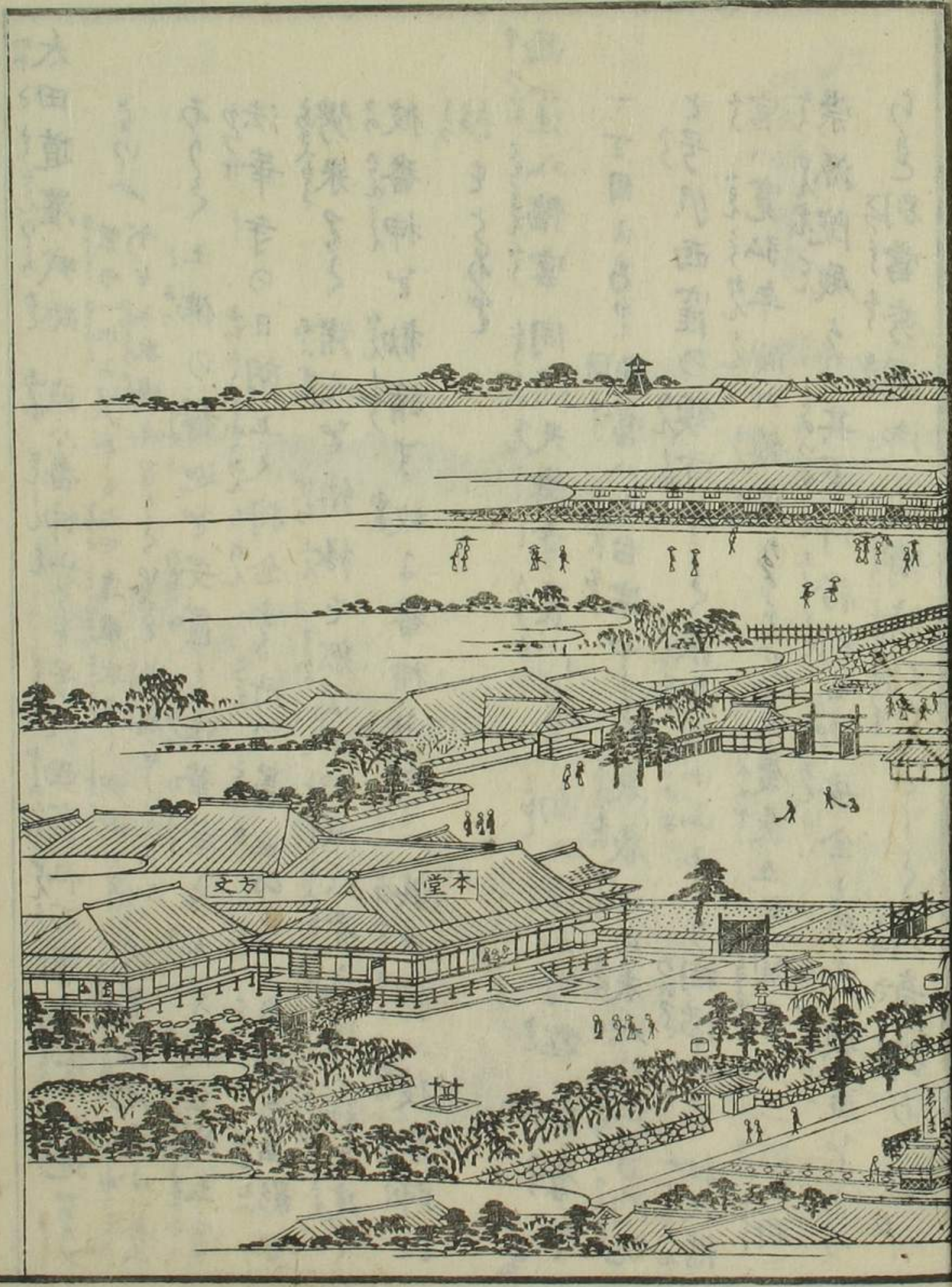
此念珠を用ひ佛号と唱るの後

城山西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の

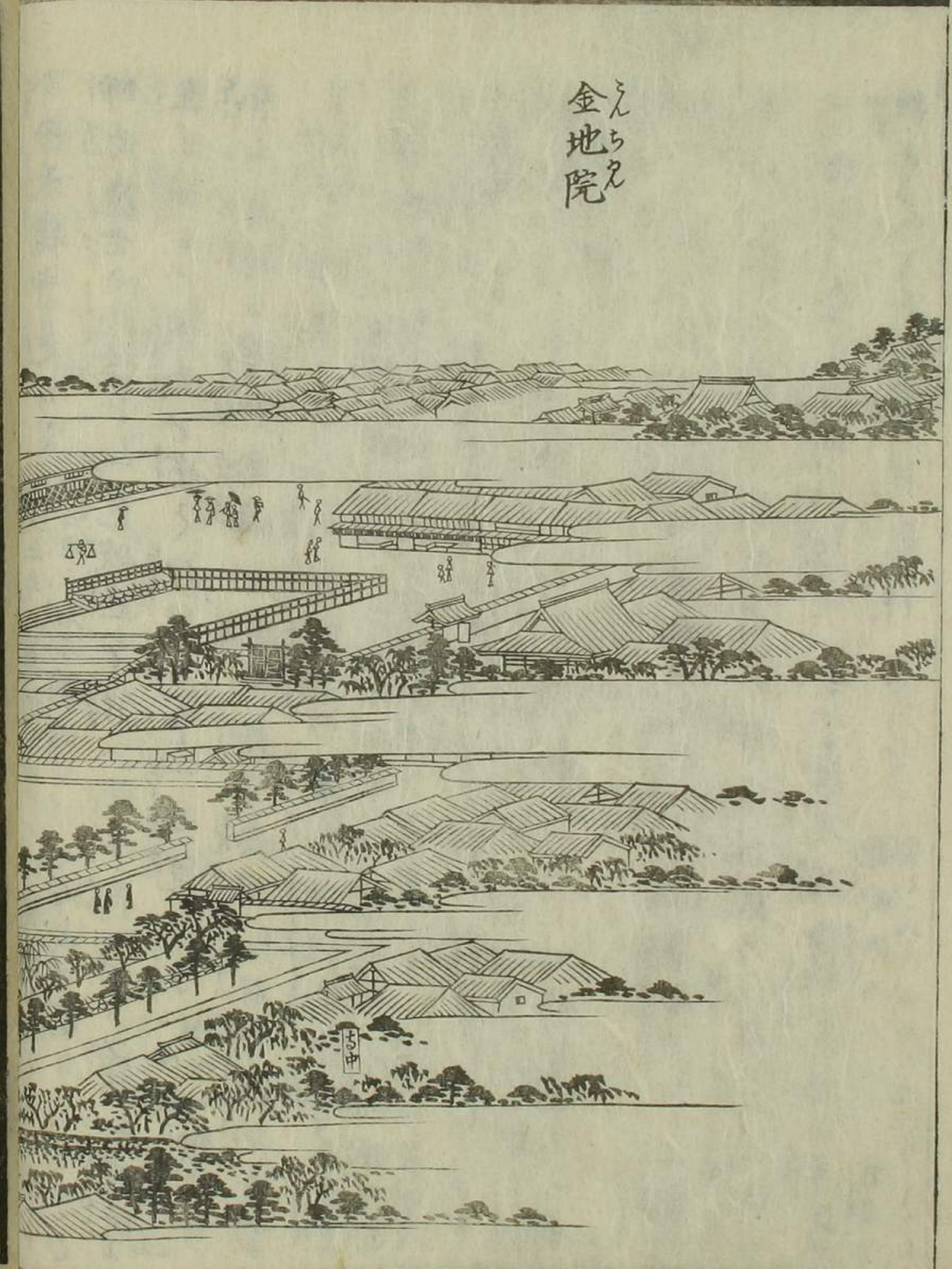
城跡といひ傳ふるを誤らるる昔熊谷氏の人此居宅杯を

地ならん同所神谷町に於る所の石橋を熊谷橋と号す

故あらんれと今傳説詳ならず岡治京云此所ハ昔麻布殿とりの出丸の地ありと云



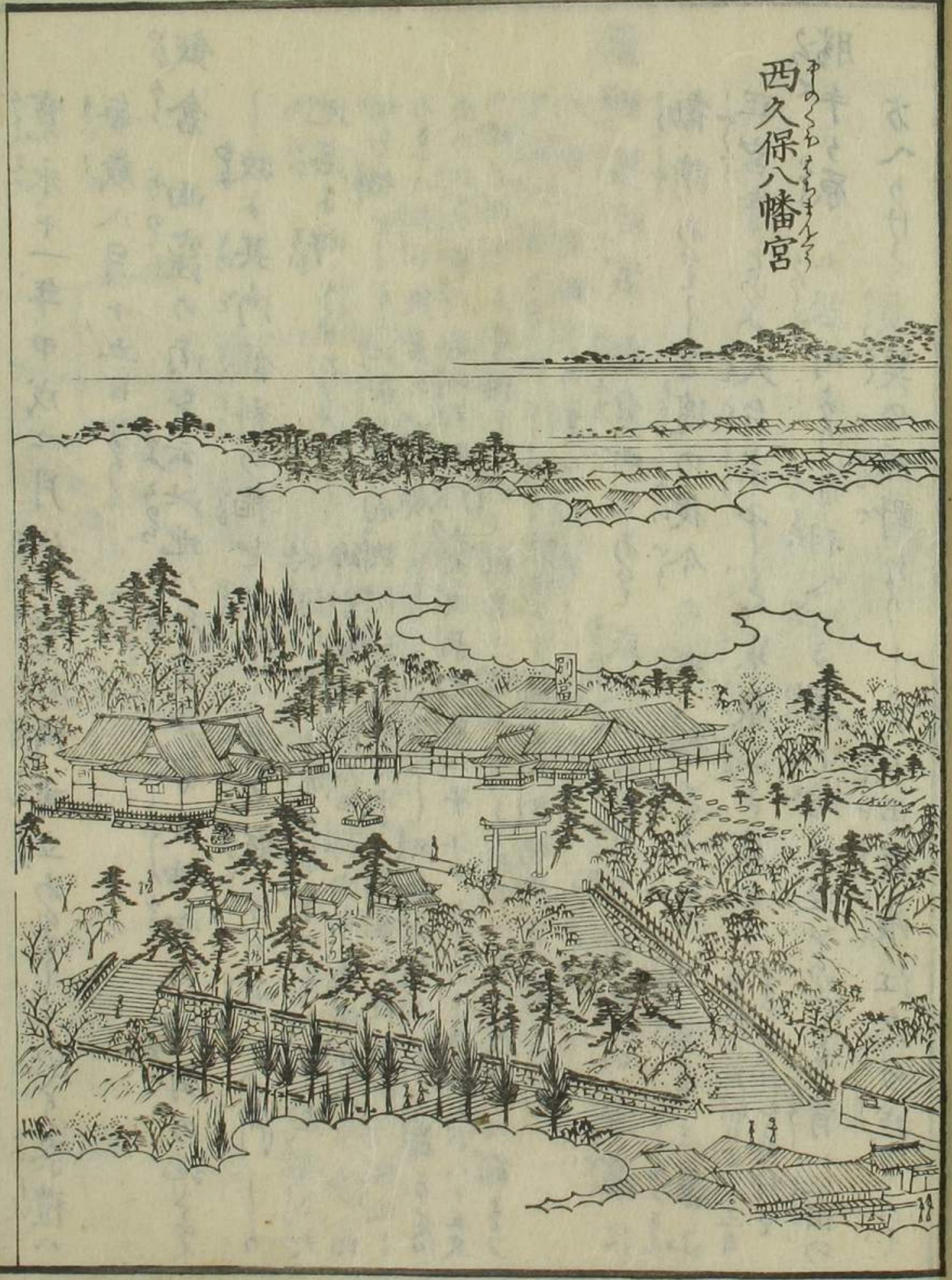
金地院
えんちん



太田道灌城跡 或ハ番神山と号シ西窪仙石家弟宅の地なり
茶の一本より 今土取場なりと云ク又昔此地小堂
 あり土佛の釋迦を安置シ法華堂と号ク後豆州玉澤
 法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影と
 携来スあまきき 楮人と结缘けつえん せ然しか 小田原北条氏後のち 社を建た 建た
 彼番神と勸請くわんじゆ 故ニ番神山と号シ其画像ハ後京師に
 移うつ せとあり

西窪八幡宮 同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町
 一丁目あり別當ハ天台宗中々東叡山の末八幡山普門院
 と号シ西窪の鎮守中々故所ハ小山あり相傳ハ當社八幡
 宮ハ寛弘年間かんこうねんかん の鎮座なりと云ク慶長五年けichoごねん 関原一戦の時
 崇源院殿すうげんいん あり其軍師勝利かちり と御安全ごあんぜん との御願書ごがんしょ とあり
 別當秀圓べつどうしゆゑん 御祈禱ごきとう 修行しゆぎやう せと云ク其奇特きせき あり

西久保八幡宮



寛永十一年甲戌二月終り宮社御建立ありしとり祭禮ハ
毎歲八月十五日なり

飯倉 西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地とり

故り其所饌料の稻を収め倉を飯倉と唱へり

地名を呼ぶるは永祿の頃小田原北条家の臣大草左近大夫

地と領せしり北条家の所領を懐くしり又り同書に飯倉の内櫻田と

所の北条家人遠山を衛門大夫政景元龜二年江戸あり五十五貫六百八十五文

の地を彼寺に寄附せしり飯倉の地名あり此中三貫三百文ハ以前より

箕輪大藏を寄附せしり地なりとり又り鶴前の芝神明宮の茶下也

熊野権現宮 飯倉町あり或人云養老年間芝の海濱に

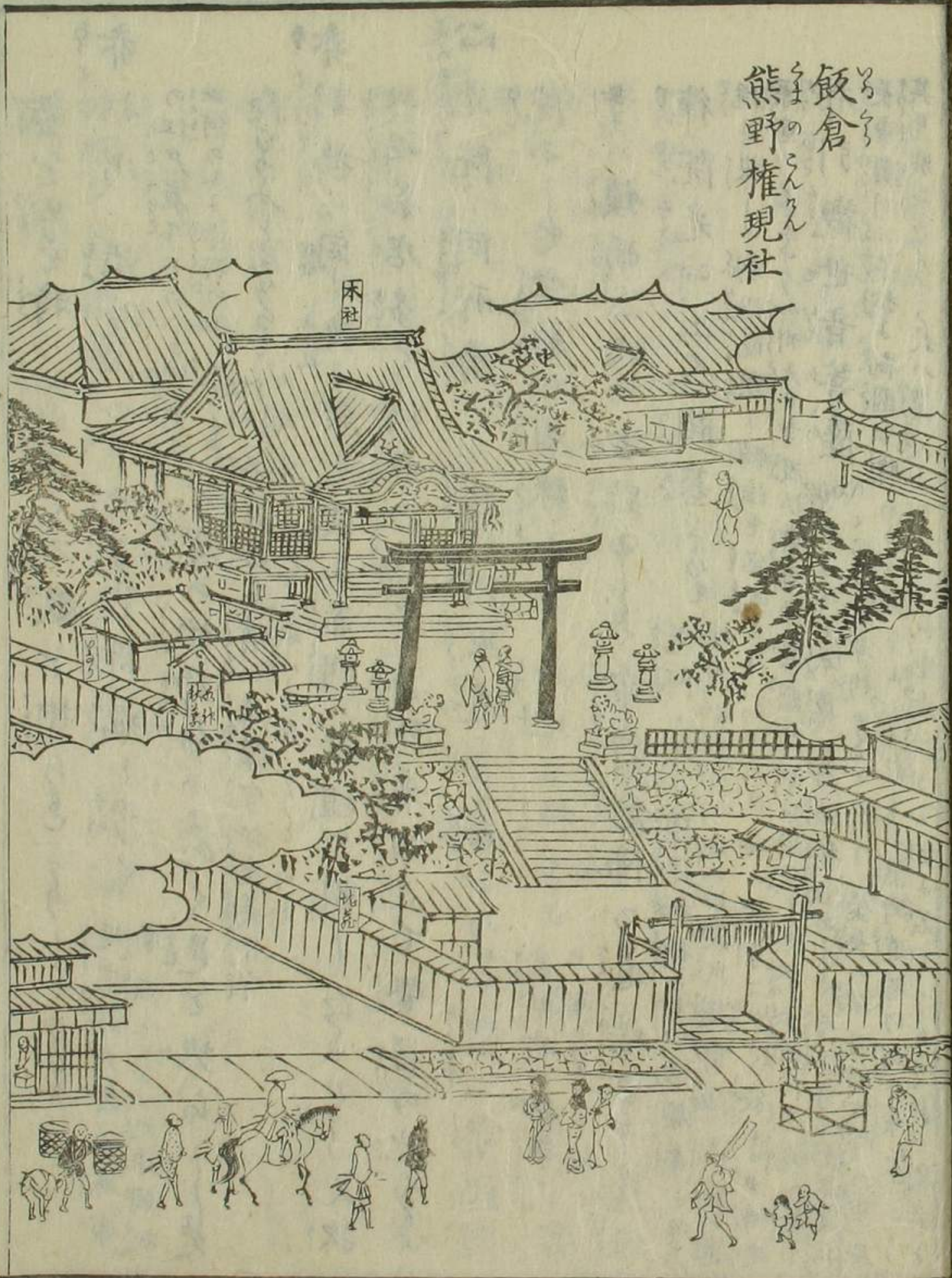
勸請ありしと遙の後今の地に移さるとり別當ハ三集山

正宮寺といふ天台宗ゆく東叡山に属せり 毎年六月朔日より三日

勝手原 土器町より赤羽へゆる廣小路の辺といふと昔ハ三田の

方へりけく廣寛の原野なりハ太田道灌江戸の城より

飯倉
熊野権現社



勢を出し時ハ此所より人数を揃らしめり
赤羽川 渋谷川の下流なる新堀と号く
延宝江戸國は麻布
新堀とあり元禄開拓
此河の上赤羽の池と云ふ
元禄の始釣命のよき
是と堀らしめり

赤羽橋 同一流に架を按ふ赤羽ハ赤埴の轉したるなり人歎
此迎茶店多く河原の北や毎朝肴市立て繁昌の地あり

心光院 同所橋より北の河原道より右ふあを増上寺此別
院小く宝曆の頃塚山より此地に移る
其旧地ハ涅槃門當

寺ハ鎮西上人の古跡あり常行念佛の道場なり惠照
律院光阿上人問基
光阿上人ハ横連社
前淨光院の隨

布引觀世音菩薩
長重興州二本松在國の時
其野道者の馬に乗
其野道者の馬に乗

道者ト唱ふ終ハ大將軍家へ献せしめられ
布引と命せられ
其後又

竹女水盤 新著聞集云江戸大傳馬町佐久間勘解由
氏仕の下女たけハ
天性仁慈の志深く朝夕の飯米己ら分ハ馬人ハ施其身ハ

水盤ハ今増上寺念佛堂心光院の門の天井に掛あり
其件の水盤より光
明を放ちしりハ當寺の像起の中洋なり

芝浦 本芝町の東の海濱をり芝口新橋より南田町の邊迄ハ
惣名を上古ハ芝と竹柴の郷といひ後世上略して柴

この呼来し又文字も芝子書改よりせ
更級日記ハ竹柴の
郷といふなり

猶三田海寺の茶下詳なり南向亭云芝といハ彼地の古老の流ハ海岸
近き所ハ柴と趣海苔のわらわら
あふ木の枝を柴といハり地名ハよハ

此地と雜魚場と号け漁獵の地なり此海より産しと芝
肴と稱し都下賞せり

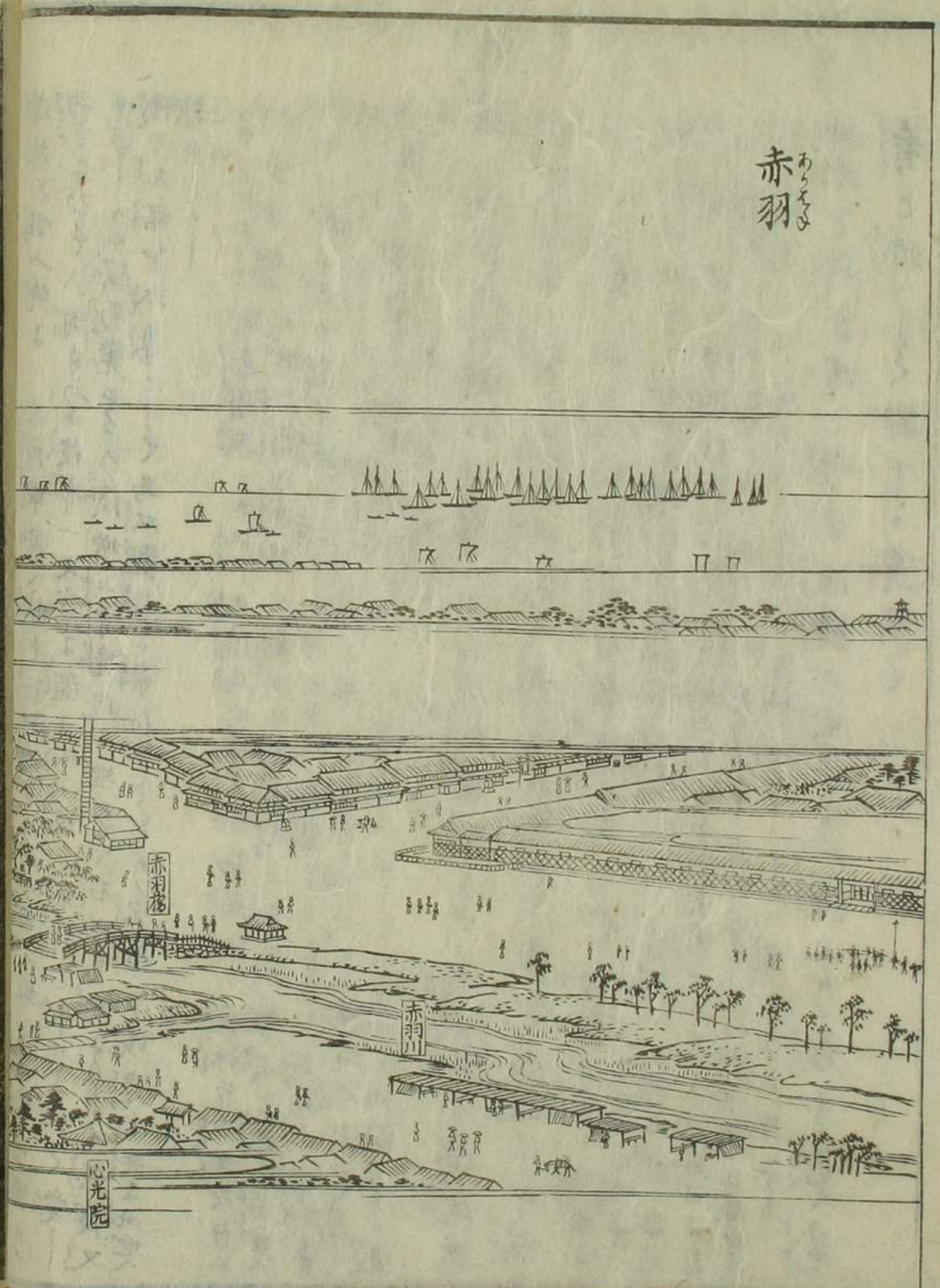
後芝ハ改作されと云く按此説是なり
海苔をとり元茂草の垣の
わらわらハ今ハ品川ハなるなり

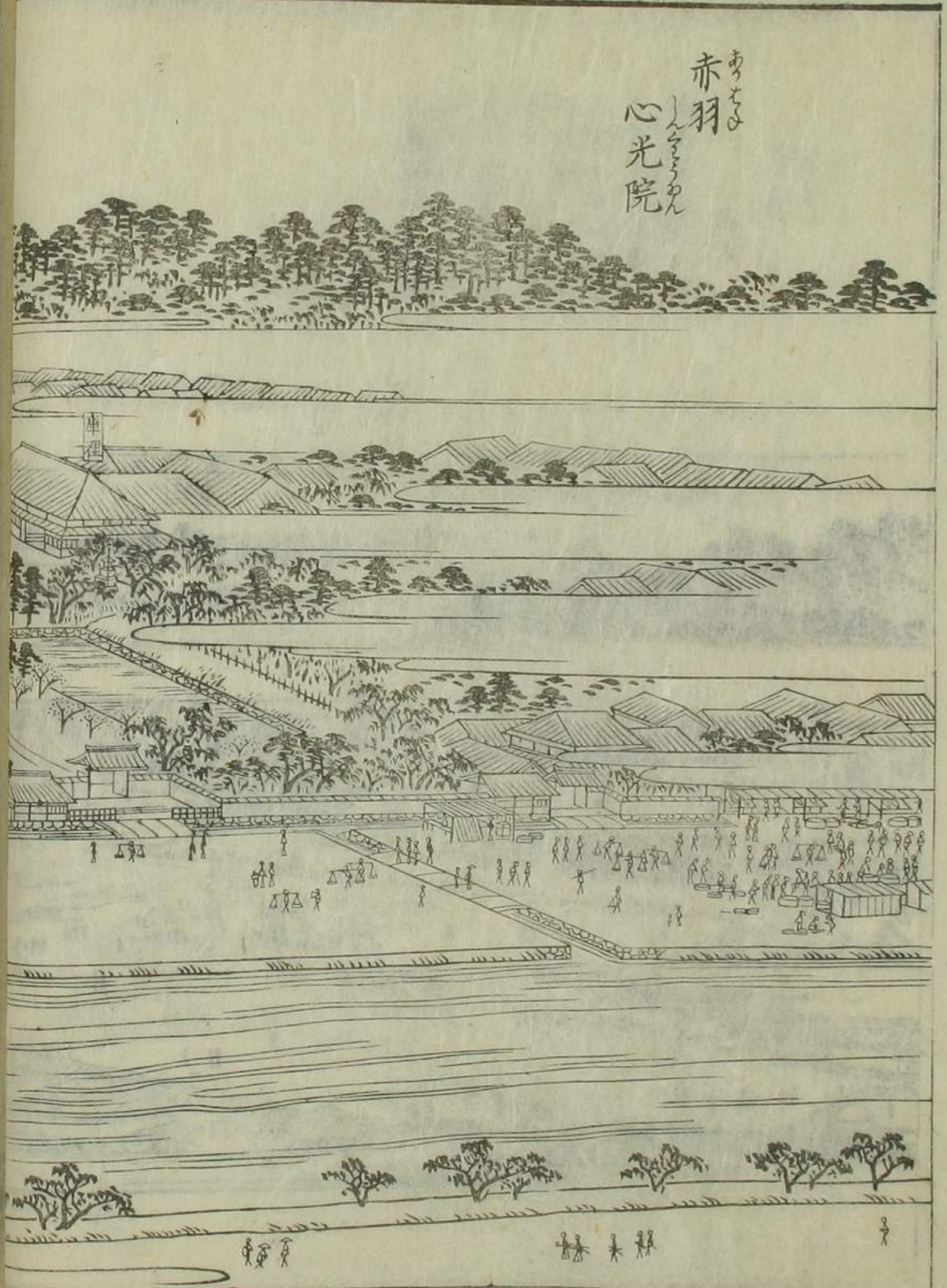
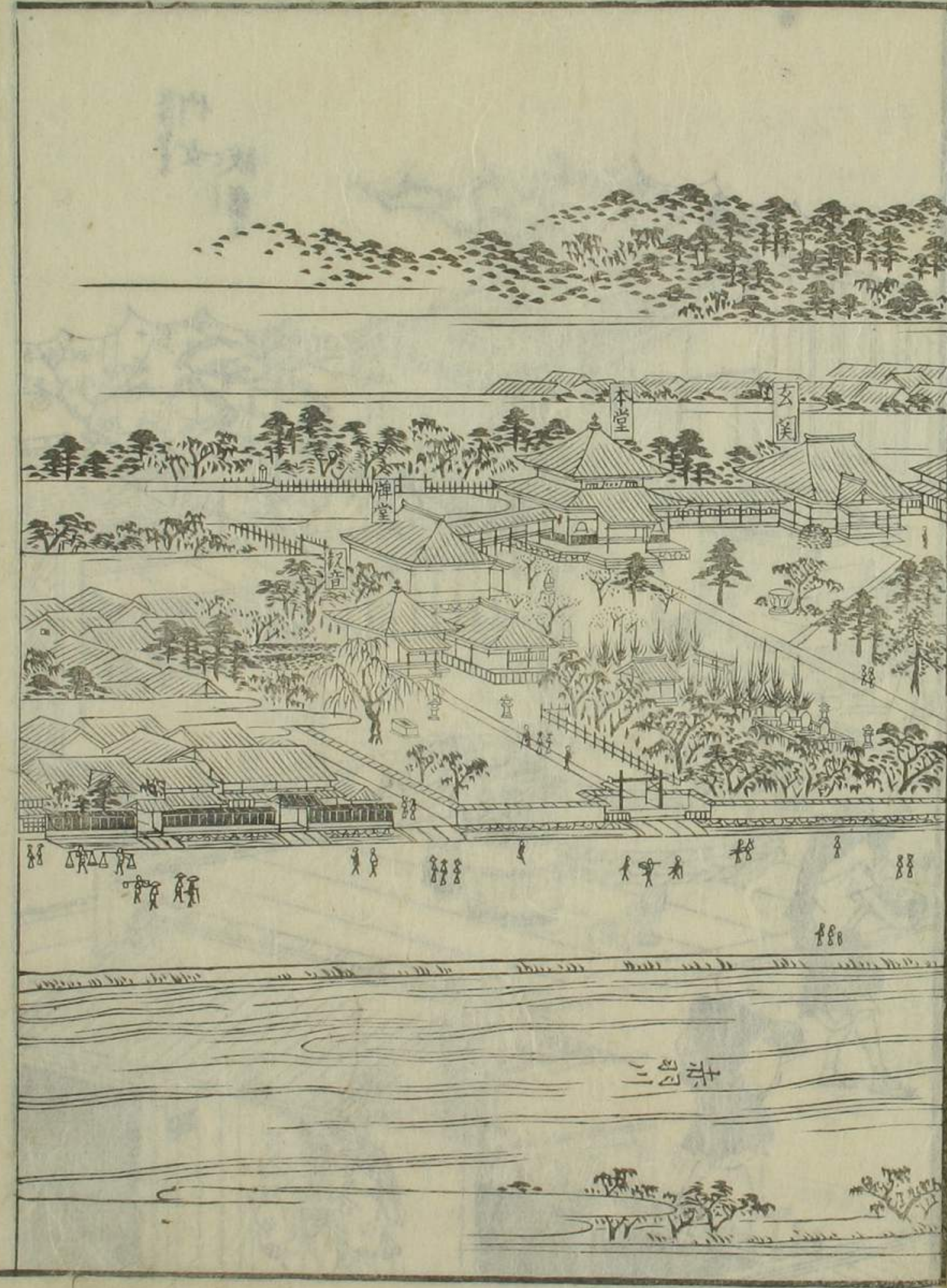
丹鳳城南赤羽濱
 郊天晴近五雲新
 芝山樹擁銀臺色
 麻谷流侵碧海春
 客裡攜家羞白髮
 人間卜地避紅塵
 少年車馬休相汚
 沐罷聊裁頭上巾

南郭



赤羽





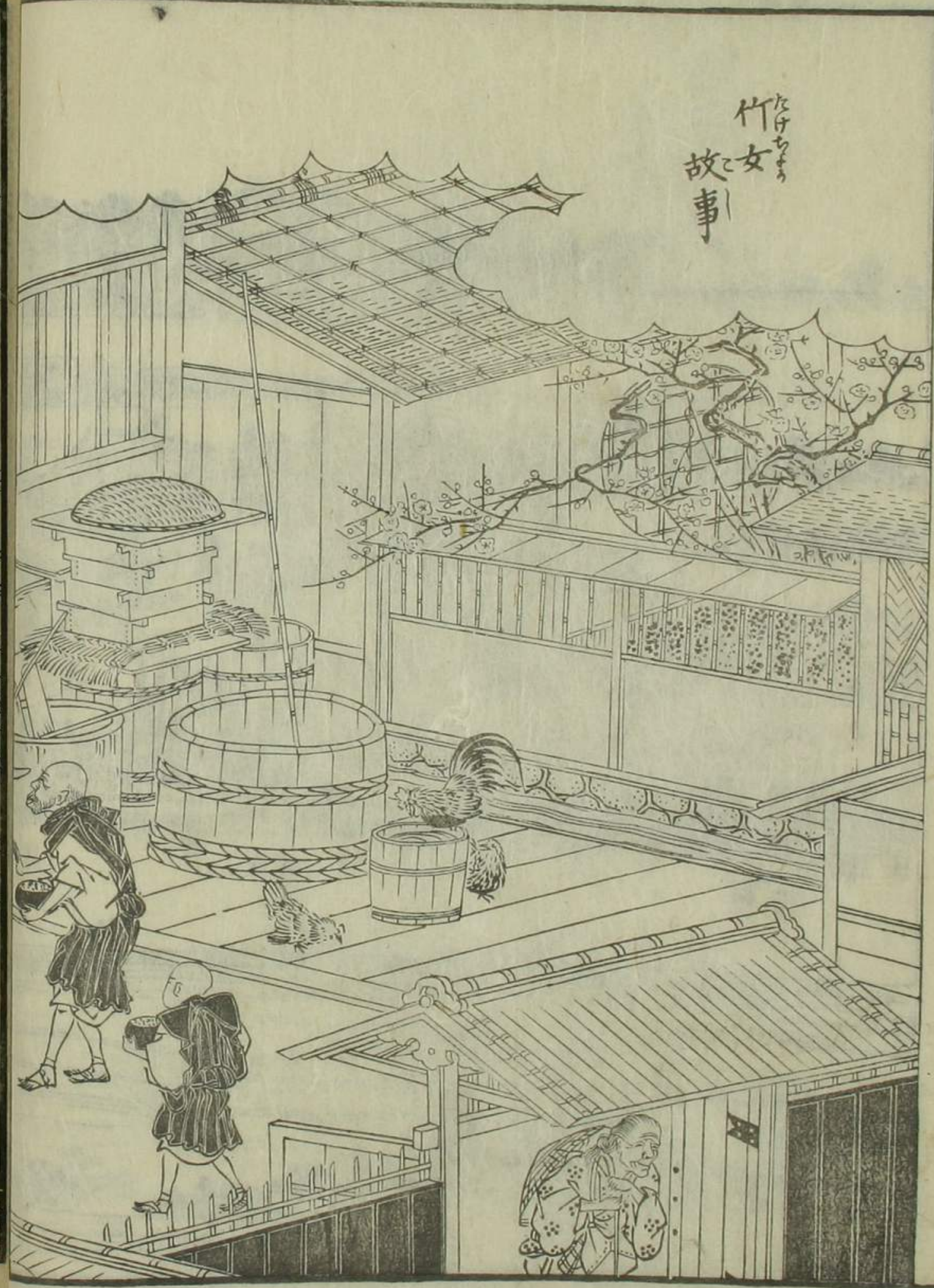
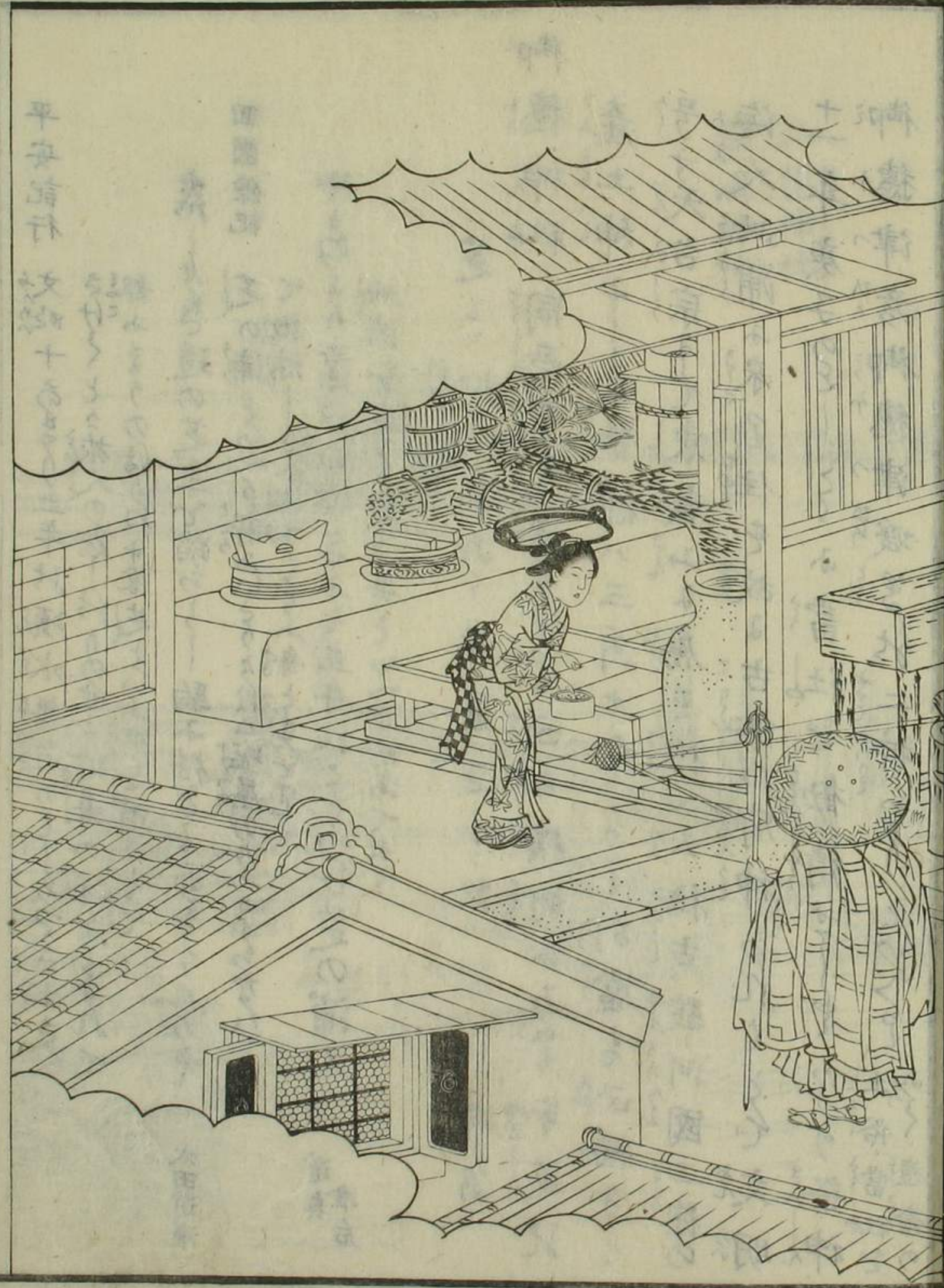
赤羽
心光院

三山寺

東山

西山

南



平安記行 文政十あまり二年は頃水無月のもつりつゝ土さく
さけくとう旅人の名はりのせし避暑の床をさるれて
都あまうのほりね中畧芝といふ所を過るとて

露一りき道の芝生と踏ちりし駒ふ任まらぬあきくれの夜 太田道灌

田園雜記

芝の浦といふ所ありけり塩屋のりりちあひま
て物淋しきふ塩木を舟とりのを見て

やうねり藻汐の煙名みを立舟にこりつひ芝の浦人

道真
准后

此浦を過るとあり井といふ所ありて云々

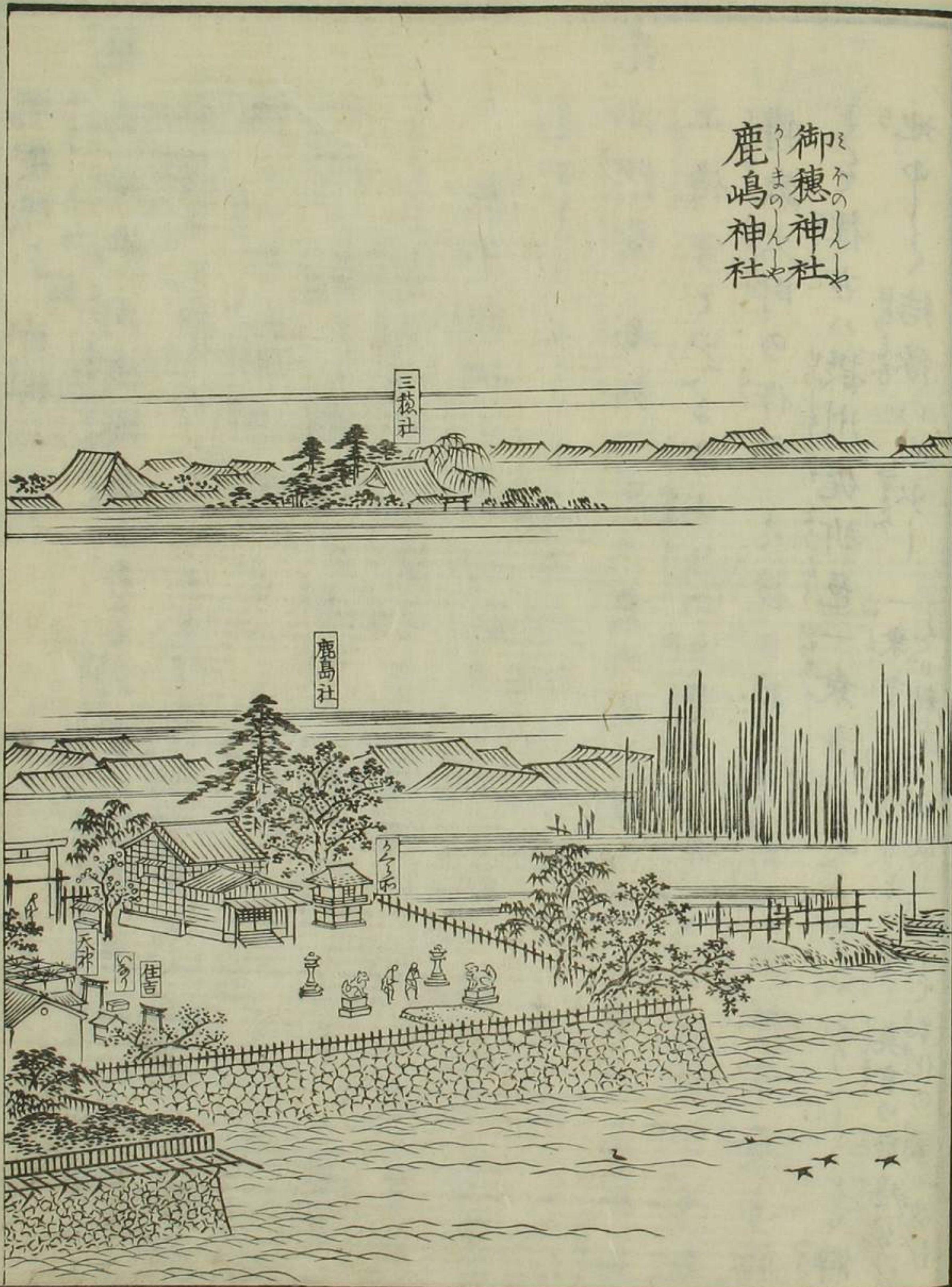
江戸ありて

芝といふもの候夏さし記

梅翁

御穂神社 同所并芝通りより西の横町あり本芝此
産土神やま祭禮ハ三月十五日なり別當を正福寺と
号す天台宗にて東巖山は屬を傳へ云往古駿河國三穂の
海人此浦ふ来り住む故は古郷の御神あれとて文明
十一年庚子のとこふ當社を勧請せしむる祭神
御穂津彦御穂津媛等此二神なりといふ

土俗當社を
痘瘡の



御穂神社
鹿嶋神社

守護神と祈願

鹿島神社 同所海濱あり別當ハ御穂神社に相同一

祭禮も又同く三月十五日なり土人傳へ云寛永年間此

浦一の小祠漂流して汀に止るあり漁人こまを揚る其

本所を尋るる常州鹿島大神宮の社地あり一祠あり

又其頃十一面観音の木像同く海汀に流るる一

ハ鹿島明神も十一面観音を以て本地佛とせしあれハ

是れ小祠のきく當社の御神を勧請せしなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路あり松林山

正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境あり本寺を

傳教大師の作ゆへ後日親上人再び點眼供養せし

とそ往古ハ揚州掘折邑一乗寺といへる寺あり一りとも僻

地ゆへ縁の人少く一乗寺ハ金仙寺といひ真言の密場なり

毎月寅の日
貴賤職集
して賑ひ茶
々あり

金杉
毘沙門堂



奉獻毘沙門天王

華川寺北

依る寛文の頃衆生化益の爲日栄上人より移しなると云ふ
靈験感應の著しき寺記に詳なり故に恭詣の貴賤日々
多く寅日を殊に群集せり正月朔の寅日恭詣の人大方ハ芝の神明
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月朔の寅日詣りて燧石をもちて掃く事あり
燧石を買ひて家土産と爲るを奉りてこれに準ずるといふ日親堂日親上人の
像を安んずる

田中山西應寺 金杉の通より西の裏あり門前と西應
寺町といふ浄土

宗中三縁山に属す支院三字あり本尊阿弥陀如来

の像ハ慧心僧都の作なりと云傳ハ應安紀元戊申の年明賢

上人草創を明賢上人ハ應永五年戊寅黃鐘
十日遷化を年八十六歳といふ天正の頃 大將軍家

當寺に駕を枉せられ寺領御寄附ありしハ学徒朝夕

の助寛ゆる々々学道盛なり又當寺十六世存問和尚一

宗に碩学ゆる々々當時法門の龍象学道の麟鶴なり

これハ 大將軍家深く崇敬よりくるあり 台命に

依る一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧ハ宗風の法意を
示す念佛三昧他力往生のを日々大弘する
三田 或ハ御田及び其多より作ると古神領に寄りて地を御田
と書る由古卷の説なり

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云
武藏國風土記殘篇云 荏原郡御田郷或其多
公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵□
等亦有諸禽允大膳或木工察云云

按此地を以渡辺の綱より居住を三田家譜より三田三河守其子駿河守
田領中三田氏累世に居住を三田家譜より三田三河守其子駿河守
綱勝武州三田に傳を代々綱より字を名と依りて後人渡辺の綱
混交へて誤る致と云く渡辺系図ハ云源次充武蔵國足立郡其田
郷に配せらるるあり三田と云ふなり三田其田同訓なる故に混雜
てかる附會の流をハまはすなり綱より字を名と依りて後人渡辺の綱
記と号するものあり此地を渡辺綱より字を名と依りて後人渡辺の綱
永祿二年小田原北条家の所領後綱より大田新六郎知行の内三田内寺
樂寺分同其御寺屋分又島津郡七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門
知修三田高福寺分本任坊寺領は同所より惣領分の地等を配せると見

綱坂 同所松平隱岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮



下る坂と号く惣鹿子渡辺とあり菊岡沿涼云又同所有馬
 家の藩邸北南の坂と綱う此所其田武藏守の居城跡なりと号く綱う産湯水
 と云ハ同所肥後彦の園中綱う駒繫松と称するハ隠岐彦の
 藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内あり

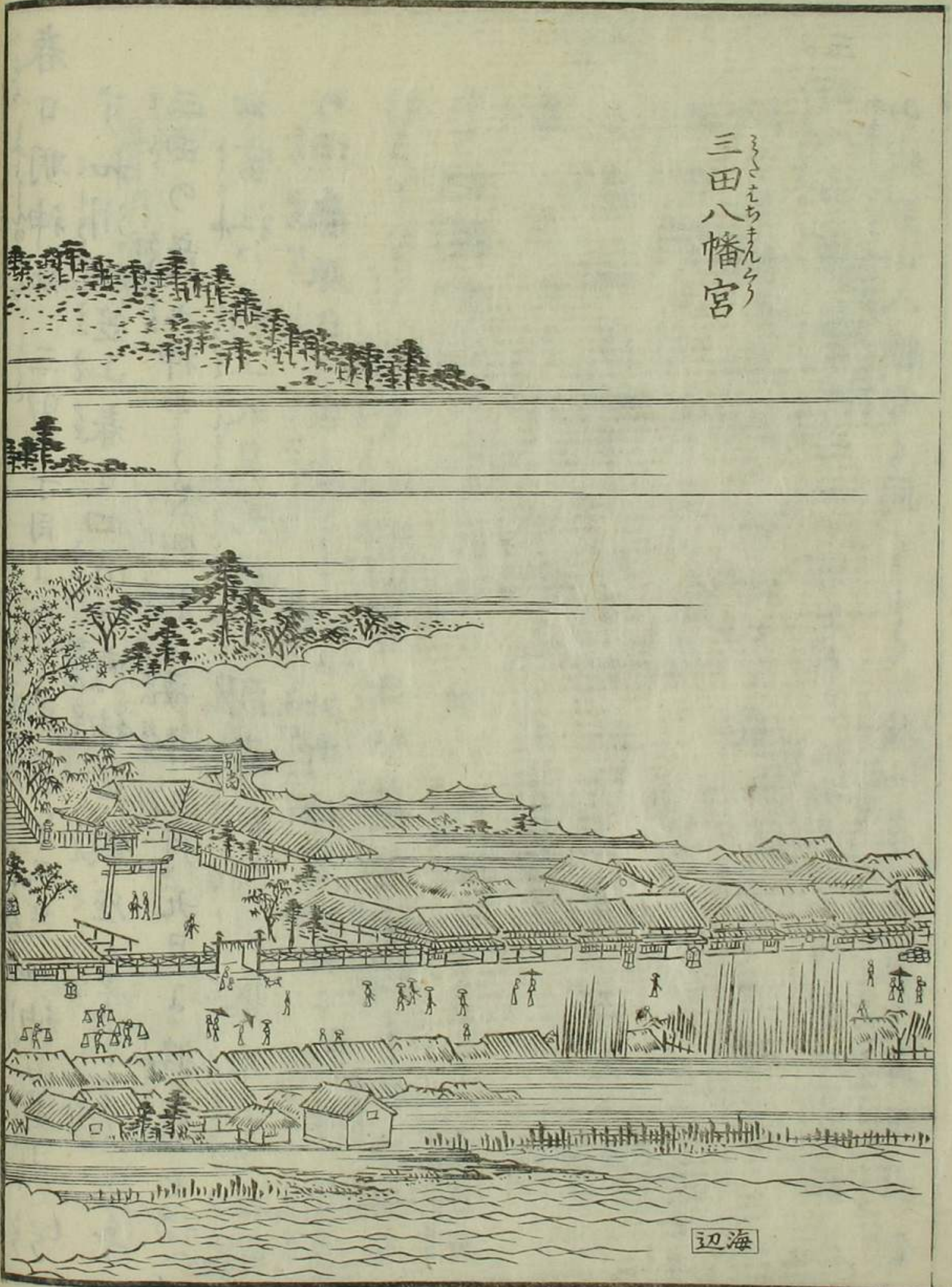
按三窪三田綱生山當光寺と号く一向派の寺あり渡辺の綱う出生の地
 なるとのひ又三田八幡宮の神神津家別荘も綱う守護神あり
 せりて塚上の松と懐古松と号けり會津家の別荘も綱う塚と稱するもの
 ありて塚上の松と懐古松と号けり會津家の別荘も綱う塚と稱するもの
 其畧云く武藏國在原郡渋谷莊其田邑ハ源綱う陳跡なり綱う塚
 任と久し此所は終るまうより已来教百の星霜と歴とつと其塚
 存を塚上は松を栽く遺蹟と標を則是壯氣の賜ハ別荘と千歳の餘情
 あるとのう明曆四戊戌の夏會津源公此地を賜ハ別荘と千歳の餘情
 塚と存するものハ蓋その勢を取り古の士を尚く入後と云かくの
 照合せしむる

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり
 神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号ハ此所を
 飯倉神明宮の舊地と号するハ誤なり

三田
春日明神社

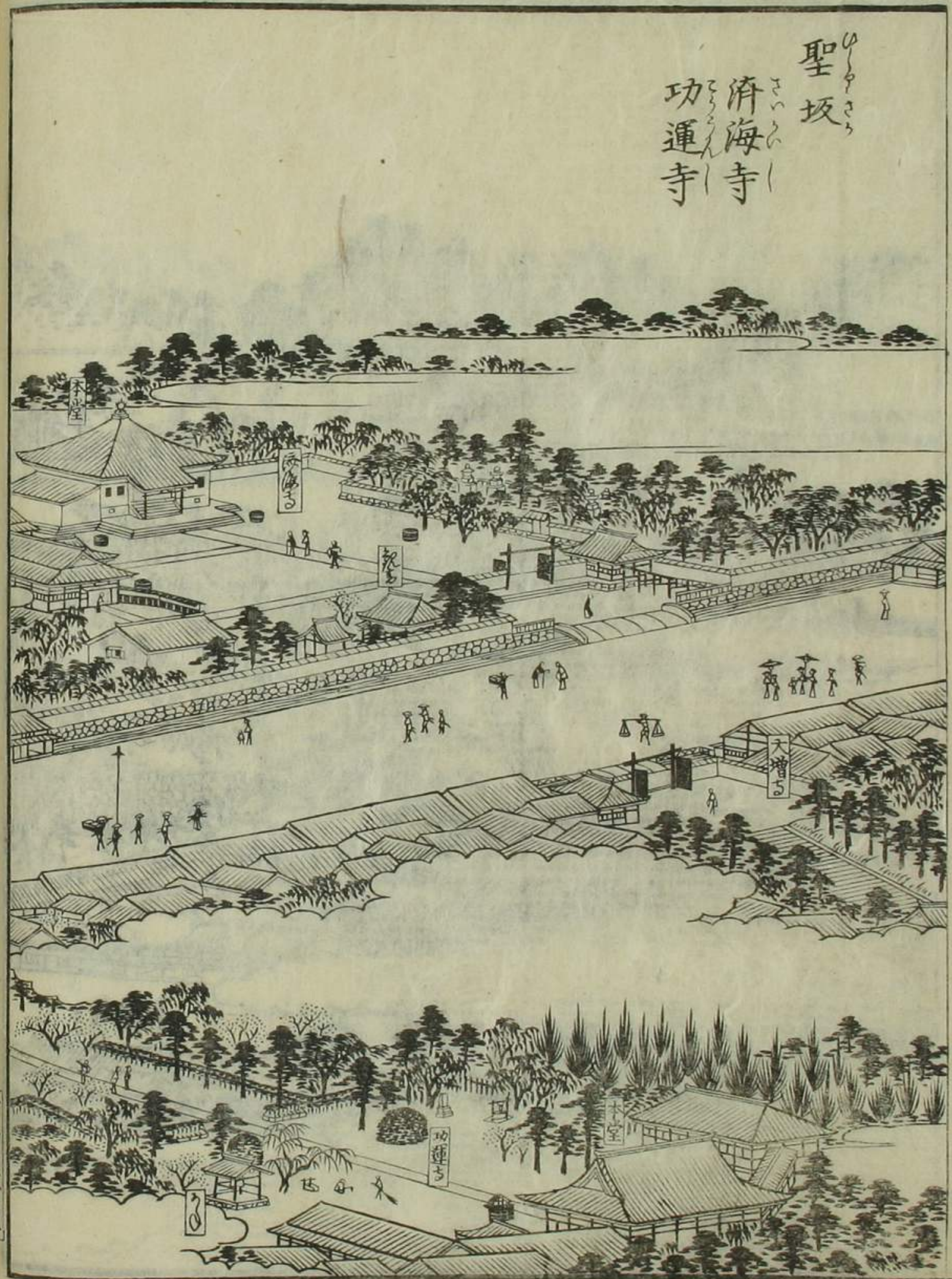
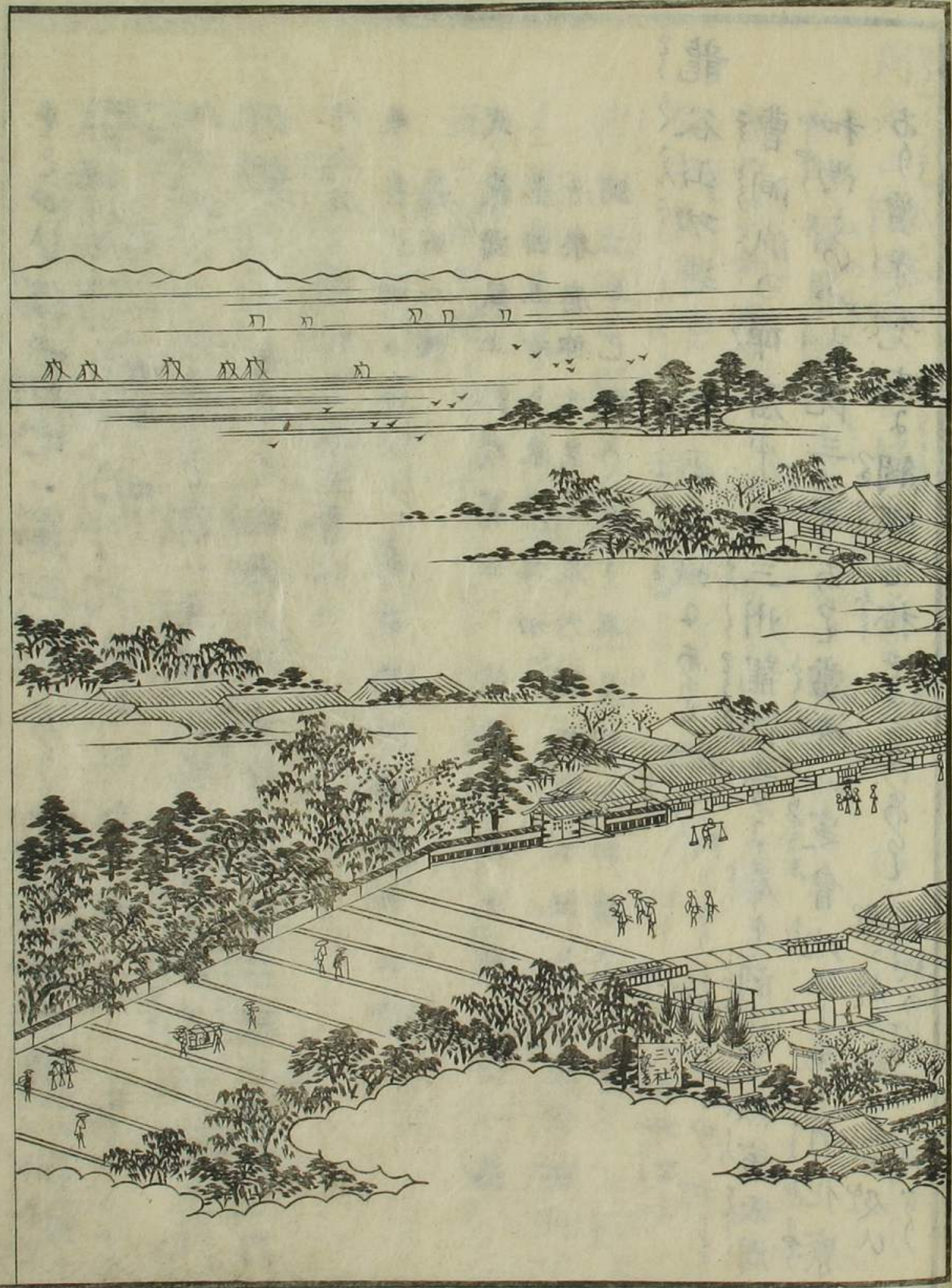


春日明神社 三田一丁目ありて別當を三笠山神宮寺と号す
 和州三笠山春日四所の御神を鎮座なり
 三田の産土神なり例祭ハ毎年九月九日ニ修禊を侍へ
 云當社ハ村上天皇天徳年間武蔵國司藤原正房任國
 の頃藤原氏の宗廟たる於此御神を此地ニ勸清せし
 むるとりて其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を
 十一面觀世音なり弘法大師の彫造なりとて慶賢瑞
 夢よりりて感得の靈佛なりといひ傳ふ
 月波樓 同所松平主殿侯別荘の看樓の号なり此地此
 眺望實ニ洞庭の風景を縮する如く岳陽の大觀を摸し
 似しと依りて城南の勝地とを羅山先生の東明集ニ
 三田八幡宮 芝田町七丁目ありて三田の惣鎮守なり祭事不
 山城男山八幡宮と同く
 後一條帝寛仁年間草創



三田八幡宮

辺海



聖坂
濟海寺
功運寺

まことひ侍の旧地ハ窪三田ニあり
土人云當社ハ延喜式の神名記及ヒ武蔵國風土記等の書ハ載リ
此の地後ハ山林ゆゑ前ハ東海ニ臨む故風光秀美なり
別當ハ天台宗ゆゑ眺海山無量院と号シ祭禮ハ隔年八月十五日ニ修行ニ放生會あり
延喜式神名帳云 武蔵國荏原郡御田郷 蕨田八幡

武蔵國風土記殘篇云 荏原郡御田郷 蕨田八幡

圭田五十八東三字田 荏原郡御田郷 蕨田八幡
所祭應神天皇也武内宿禰荒木田襲津彦等也和銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺 同所聖坂ニあり
聖坂ハむらこの地ニ高野聖多ク住み開きより坂ありハかく云と

曹洞派の禪窟ゆゑ三州龍門寺ニ屬シ関山を黙室天周和尚との支院ニケ寺あり當寺ハ定會地ニあり所化察あり當寺境内ニ綱塚と稱するものあり
綱塚ハ前の三田及ヒ細塚の祭下ニ詳なり

周光山濟海寺 聖坂の上道より左側ニあり浄土宗に

京師智恩院ノ屬ニ上古ハ竹柴寺と号シて魏々たる真言の古刹なり
中古荒廢ニ建ぶ依り法譽上人念無和尚中興ニ
當寺庭中の眺望ハ實ニ絶景なり
房總の群山眼下あり

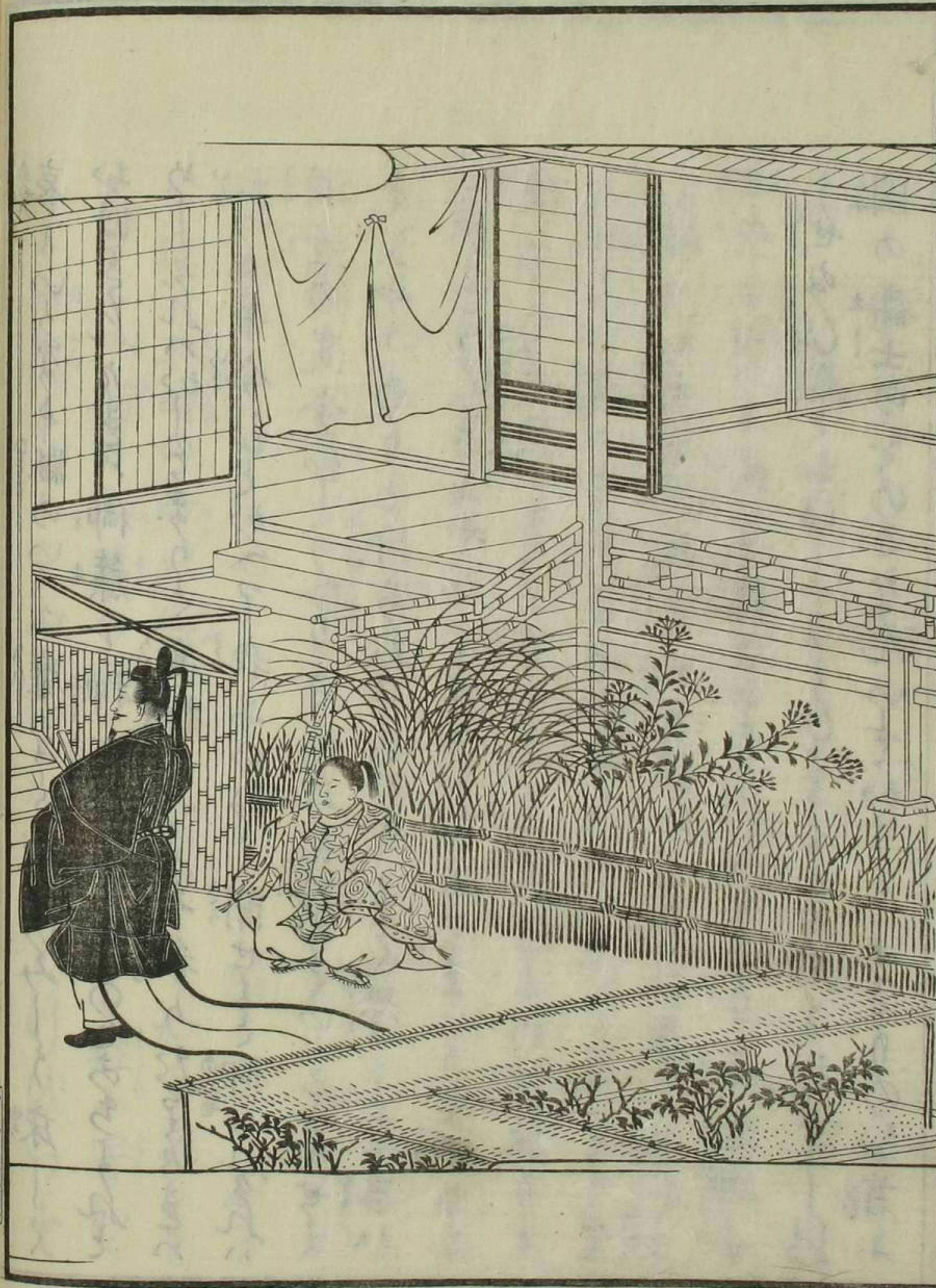
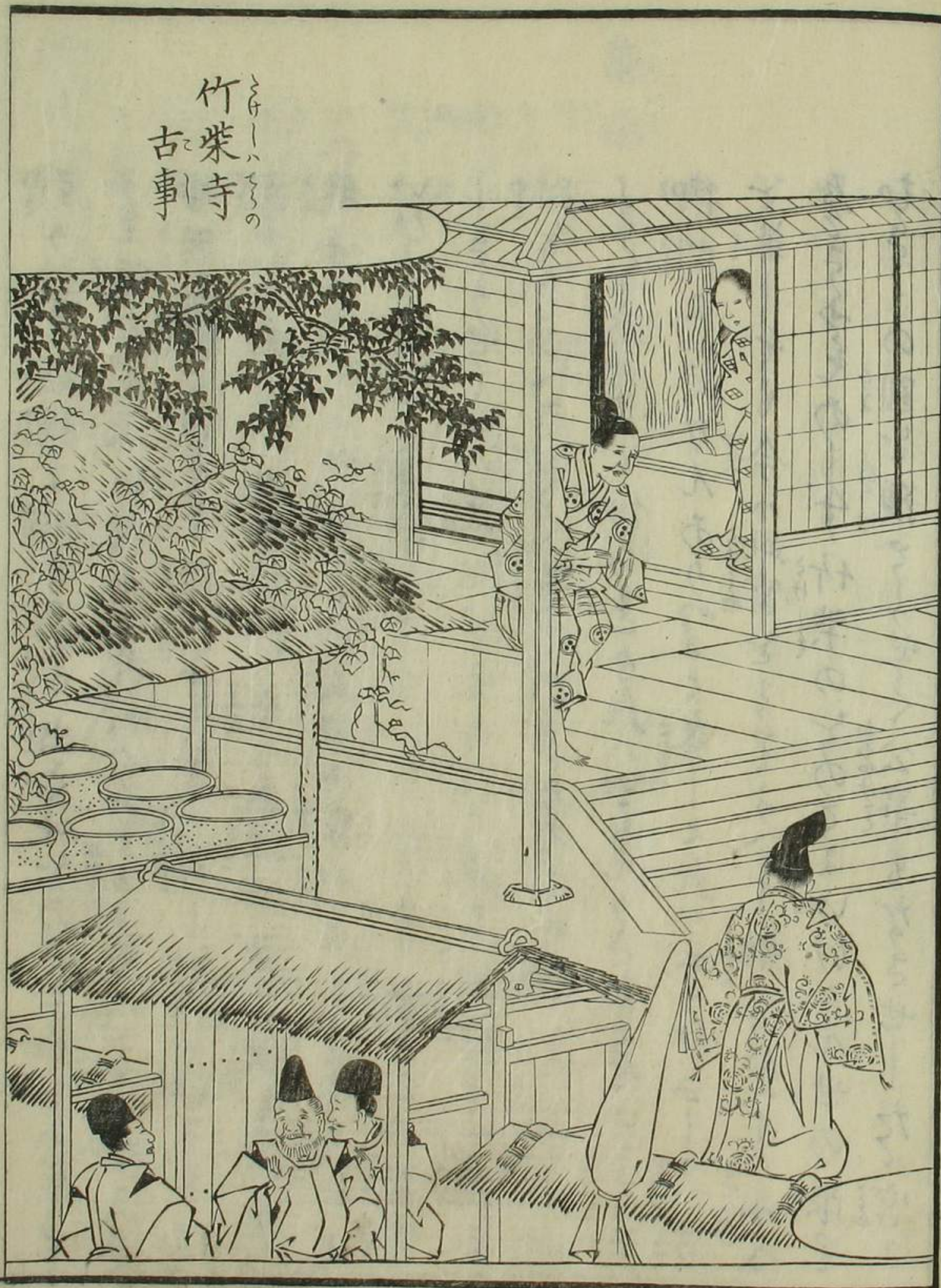
漁火波を燒くも疑はる羣芳發して緑陰深く風露爽小
一勝地なり月の岬とのめ此辺の惣名なり

竹柴寺舊址 濟海寺と同隣の土岐侯の邸ニ地其舊跡あり
といひ侍ハ 山岡明河云按今之地ハ海邊あり岡の上ハ更級日記後小の記あり
更級日記云 今武蔵國となりぬ殊々とうきりしを

白く波もななくさひらの様も紫生と聞野も蘆荻の
高く生て馬小乗く弓も末見えぬ高く生茂りて
中を分行ふ竹葉といふ寺ありて遙よりさうりや
所は樓の跡礎なとありて問は是といふ
竹葉といふさうなり國の人ありて火焚家乃火
焚衛士よさ奉りたるに御前の庭を掃と
あやや苦しきをみよと我國ふ七川三つ造り
居る酒壺おし渡りてふの歌の南風吹ハ
北は靡さ北風吹ハ南はなひさ西吹ハ東は靡さ東
吹ハ西はあひくを見かくあると獨ちつふ
ははと其時の帝は御ひき免いみか
をまの只獨り御簾の際に立出ぬひく柱お寄か
ま御覽さるふはをのこかく獨りけりせ

哀よいつなる歌のつふ靡たるといみしう床く
おほされくまの御簾と押明くあのをのこあちよれと
めくはれかこまりと高欄のつふお参りたるは
云つる事今むとかへ我ふひき聞せと仰られぬは
酒壺の更今むとへり申されは我ぬききて見せよ
さのみやありと仰られぬはかこく恐しや思ひ
なれとさへさあや阿まらんおひあてまつりて下るふ
便なく人追來らんと思ひく其夜勢多の橋はりと
は此宮を居てまつりて瀬田の橋をひとまをうら
こほちと夫を飛越く此宮はかきおひ奉りて七日
七夜といふ武藏國よいつしきまたり帝后御子
うせぬおほまといふとあやうむさし
國の衛士のをのこなんいせかうとさりのを首ふ

竹柴寺
古事



引うけく飛様は逃ると申出く此をのこを尋ふなるを
々々論なく本の國ふこを行らわと公よを使下りて追ふふ
勢田の橋は海まき得行申す三月といふはむさしは
國あつきて此をのこを尋ふ此御子公使をわし
我さうへきあやありらん此男の家ゆりてわく行と
いひらぬわく來りてわくわくわくわくわくわくわく
しきうせしんハ我をいつてあれと是も前世は此國は
跡をさるへきまきくせとありなわをや歸く公り此
を奏せよと仰らまされんハいんくわくわくのわり
御門はかくなんありつると奏しんハ云うひるハ其男
を罪しても今ハ此宮をとるハ都はかく奉る
るさあをわす竹柴のものをいけらん世の限は
むさしの國を預りてせく公事もなさせした宮は

其國あつて奉らせ賜ふは宣旨下りんハ此家
内裡のことく造りて住せまてまらりなる家を宮なと
うせむひふらんハ寺あなを竹柴寺といふ
かの云々

龜塚

濟海寺の北に隣りて隱岐家の別荘の地はあり
昔ハ竹柴寺の境内なりて和國の頃地を割りて隱岐家の別荘
多し此時龜塚ハ隱岐家の内に入りて其塚のくわは其主の
建られし龜塚の相傳は往古竹柴の衛士の宅地は酒壺
碑と稱するあり
其ともやふ一つの靈龜栖居後土人崇めく神は祀ま
りの頃あやまらん或時夜もさう風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石は化せりと云又文明中大田道灌此地ハ
斥候を置其龜の靈あをを河圖と号す
とつて

祖徠先生墓

三田寺町長松寺といふ浄家の境内にあり

濟海寺の山号を昔ハ龜塚山と唱へり



魚きりん監らん
觀くわん音おん堂どう



碑文ハ倚蘭侯撰也

嗚呼魯博究物生理立言之墓也嗚呼先生復學於古歸道
 呼魯博究物生理立言之墓也嗚呼先生復學於古歸道
 焉嗚呼實出如生日之升也乃影及無所不照其子
 識矣享保戊申正月十日也其有三人卒其行狀部茂
 卿以字行銘曰洋洋聖世用惑久天降文運斯人
 云受乃化弘微猷維厚大業已成日新富有瑕其人
 不壽夭棄斯人匪猷維維業司列辰禧我小信瑕能
 享神盛德不朽永于牖民有司列辰禧我小信瑕能

先生ハ菽生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字ハ行一號ハ護園
 通稱ハ惣右衛門ト云父ハ方庵ト号一官醫トシ先生父ハ後南總
 任五歳中々文字ヲ識十五歳ハ文ヲ屬ト家極ク貧ク東都ニ出ク
 力學ニ業成ク柳澤侯ノ奉ニ遇ヒ食祿五百石ヲ賜リ編修惣裁トシ
 享保十三年戊申正月十九日卒ト著述ノ書八十餘部トシ

魚籃觀音堂 同所淨閑寺トシ淨刹ニ安置以本尊ハ木像

中々六寸計あり面相唐女ノ姿トシ右ノ所ニ魚籃ヲ
 緣起曰唐元和年間憲宗の御宇ハ天衣ヲ持シ地ハ一人ノ美婦ノ
 籃ヲ持シ魚ヲ鬻クアリ見ル人其容貌ノ麗シク競ム

女の云く我性佛性を悦み若夫は通世び人ありハ夫とせん

云其中ハ馬氏なる人あり是トシク依此女トシテ程

なく死せし馬氏悲し堪む日を経て後異僧来り馬氏ト

共ニ塚トシテ靈骨トシテ金鎖ヤリ光ト放つ是あり

其國トシテ三寶ト崇め奉り

爰ニ當寺ヲ開山稱誉上人自の師法譽上人肥州長崎ニ遊化の

頃一老婦より此靈像を感得し元和三年丁巳豊前國中

津とりの地ニ假し淨舎を營み御座を構へる魚籃院ト号ス

竟ニ寛永七年庚午三田の地ニ奉安せし稱誉上人其地の

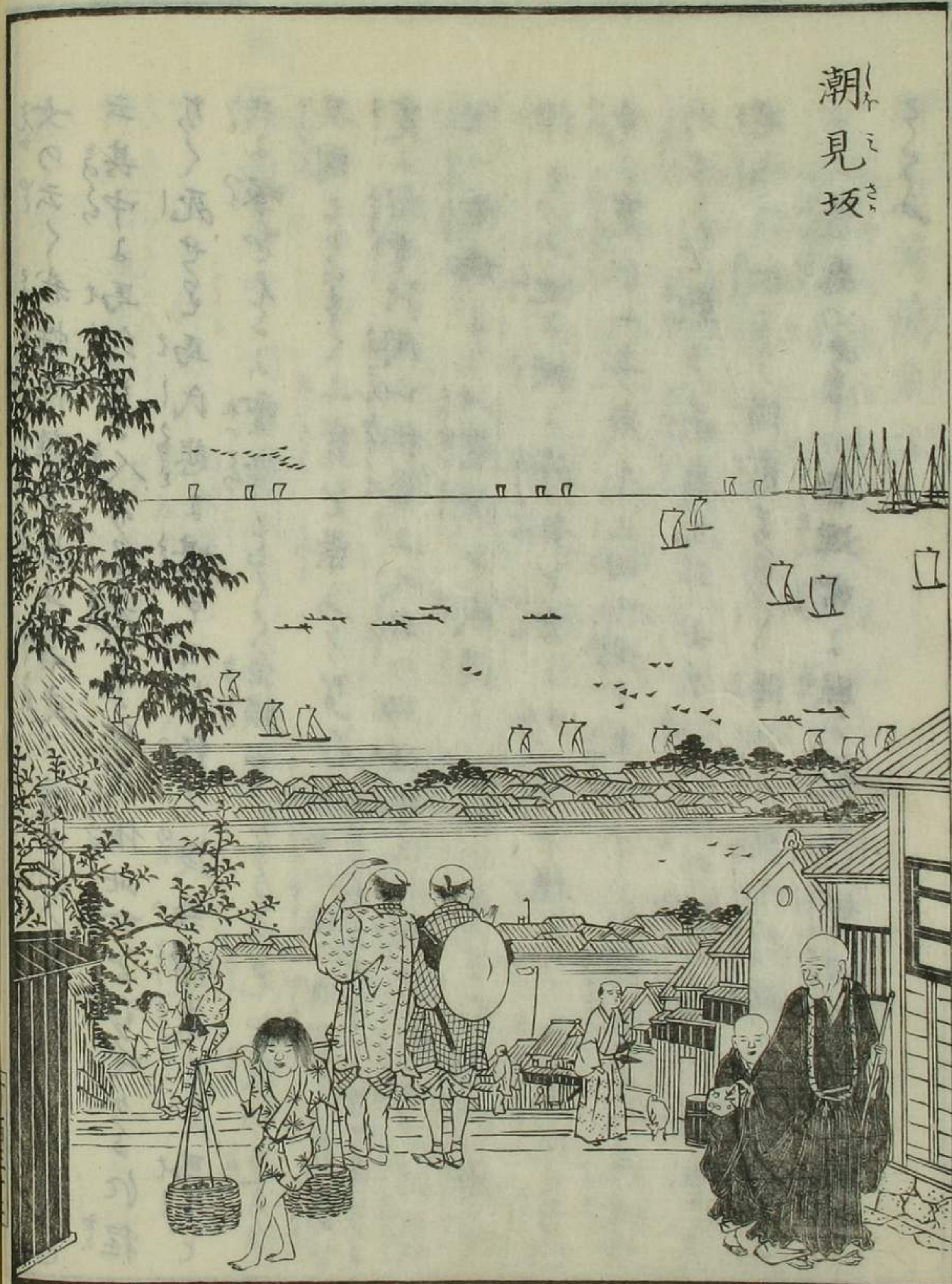
所せしを歎き兼應元年壬辰正ニ今の地ニ移し當寺ヲ

建立す爾より緇素ありて渴仰し衆人打群く歩を運ぶ

ゆき靈應ありて香煙常ニ風ニ靡き梵唄ありて林あり

こゝ

潮見坂



潮見坂

聖坂の南伊四子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ
 或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼ぶ古ハ長南崎長南崎是等と
 合せ七崎

伊四子薬師堂

潮見坂より高輪へ下る坂の左側ニあり寺を醫
 王山福昌寺と号す天台宗琳本尊薬師佛の像ハ智證大

師の作中々右大将頼朝卿の念持佛なりと云を往古相州

鎌倉の佐介谷より薬師堂といふ其の騷乱の時住僧護

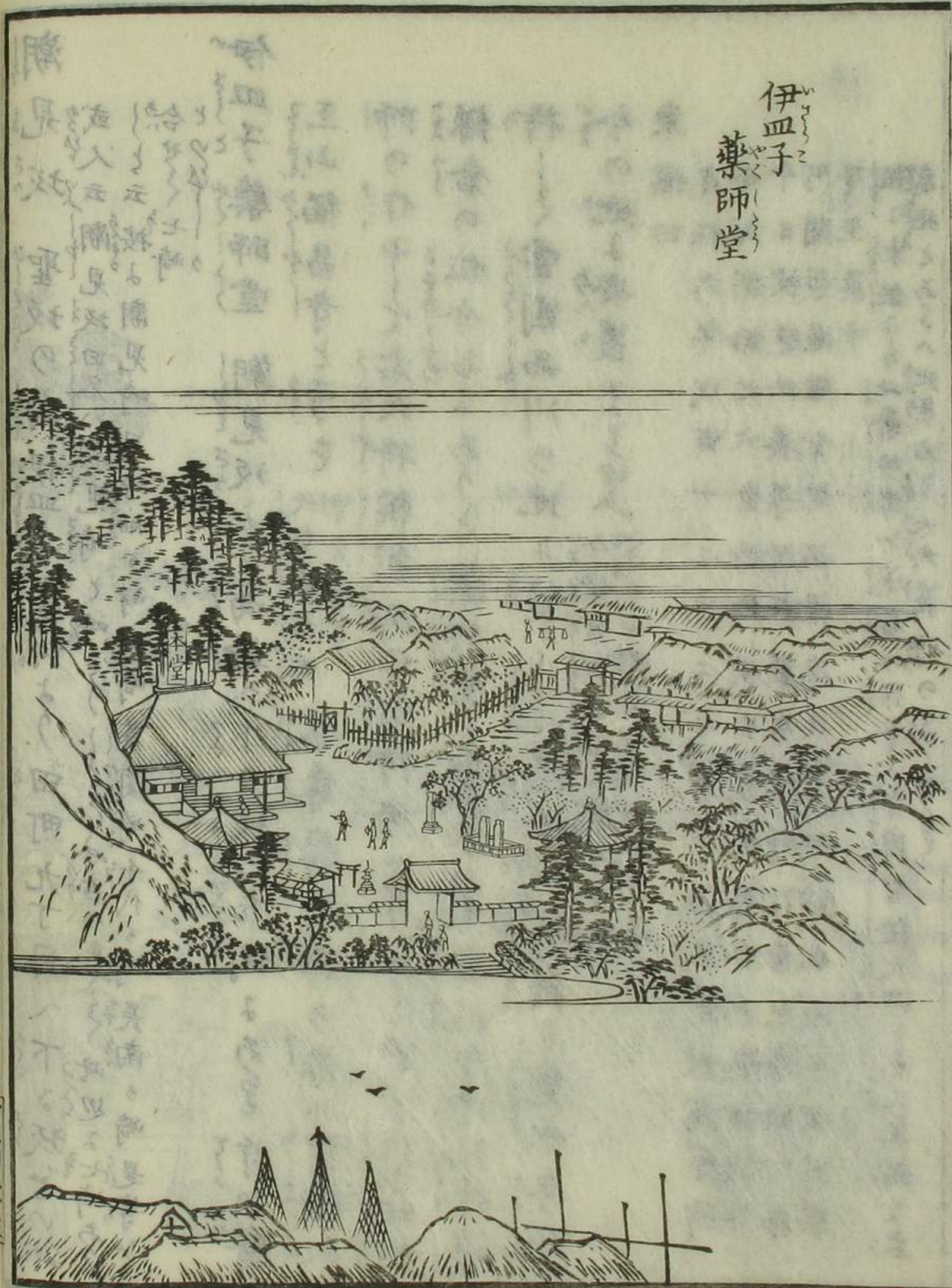
持し當國品川の地に移しなるの地なり終ニ寛永年間

今此地ニ安置せしむ今鎌倉佐介谷ニ薬師堂跡と

東鑑曰

建保六年戊寅十二月二日庚子右京北依靈夢所
 令草創給之大倉新御堂安置薬師如来像造之奉
 今日被遂供養導師莊嚴房良喜僧也施主並室家
 阿闍梨遍曜堂達頰覺房良喜僧也施主並室家
 等坐簾中此薬師佛運慶の作と寺傳智證大師と又東鑑ニ右
 京北とあるハ北条右京大夫義時の子と云

伊四子
薬師堂



牛小屋

牛町はあり

延宝江戸圓此地を
牛の所と云とあり

牛を畜する家多く牛の數

一千疋は餘り

養入の牛

額小く其角後

は靡きうろを敷

覆と号け

上品なる

都々牛ハ

行事正しく殊は早一形婉

精氣撓す

力量勝た

不転を

か多重を乗せ遠きに

運入人の用を助

其功誠

必く

古ハ淀鳥羽の

あり

都の外

牛車

あり

あり

江府

是を用

り

唯此

三ヶ所

は限

り

高輪大木戸

宝永七年

庚寅新

海道の左右

高札場

と

あり

此地

江戸の

喉口

あり

此地

拜海亭

を

あり

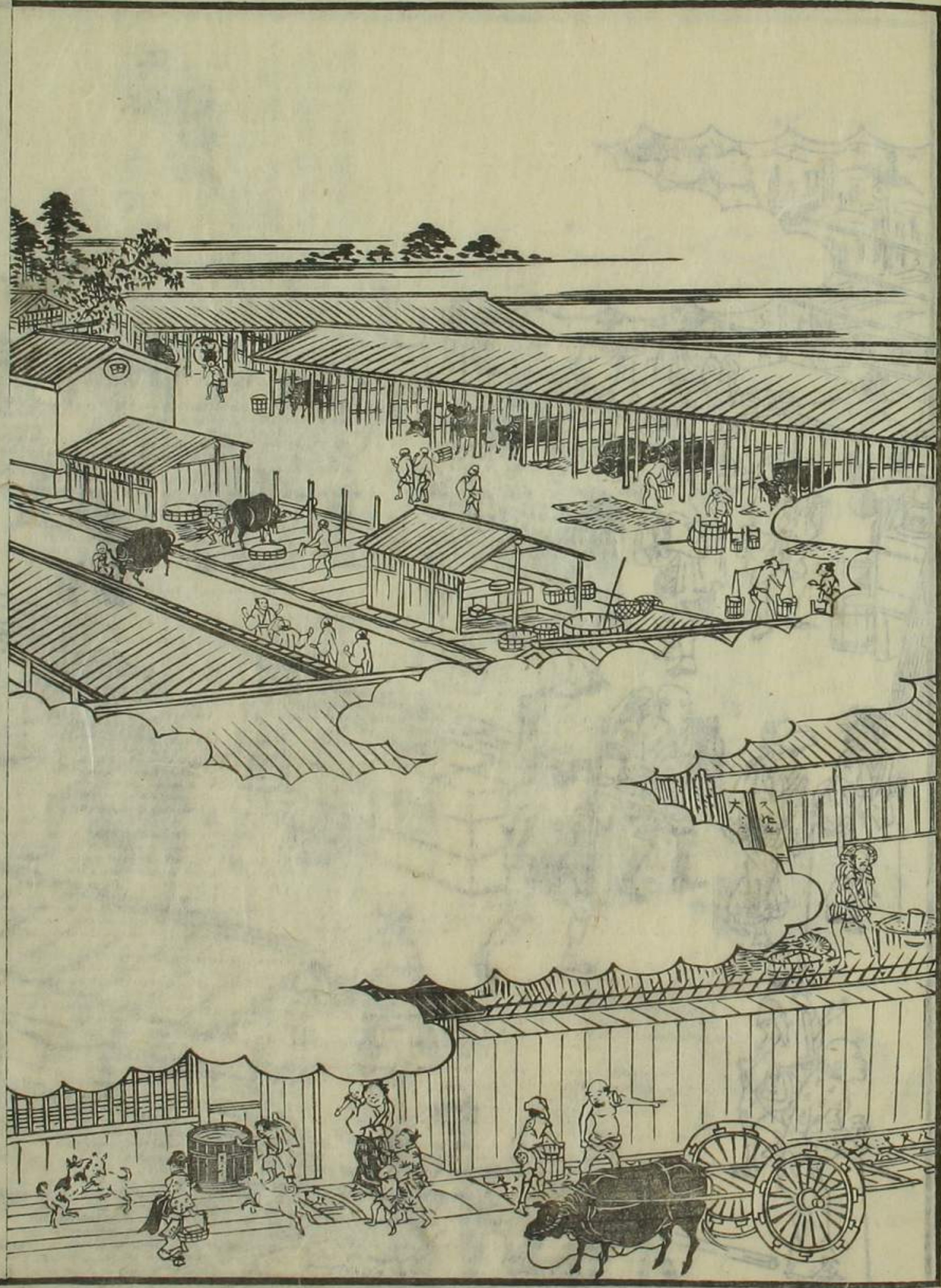
此地

人を

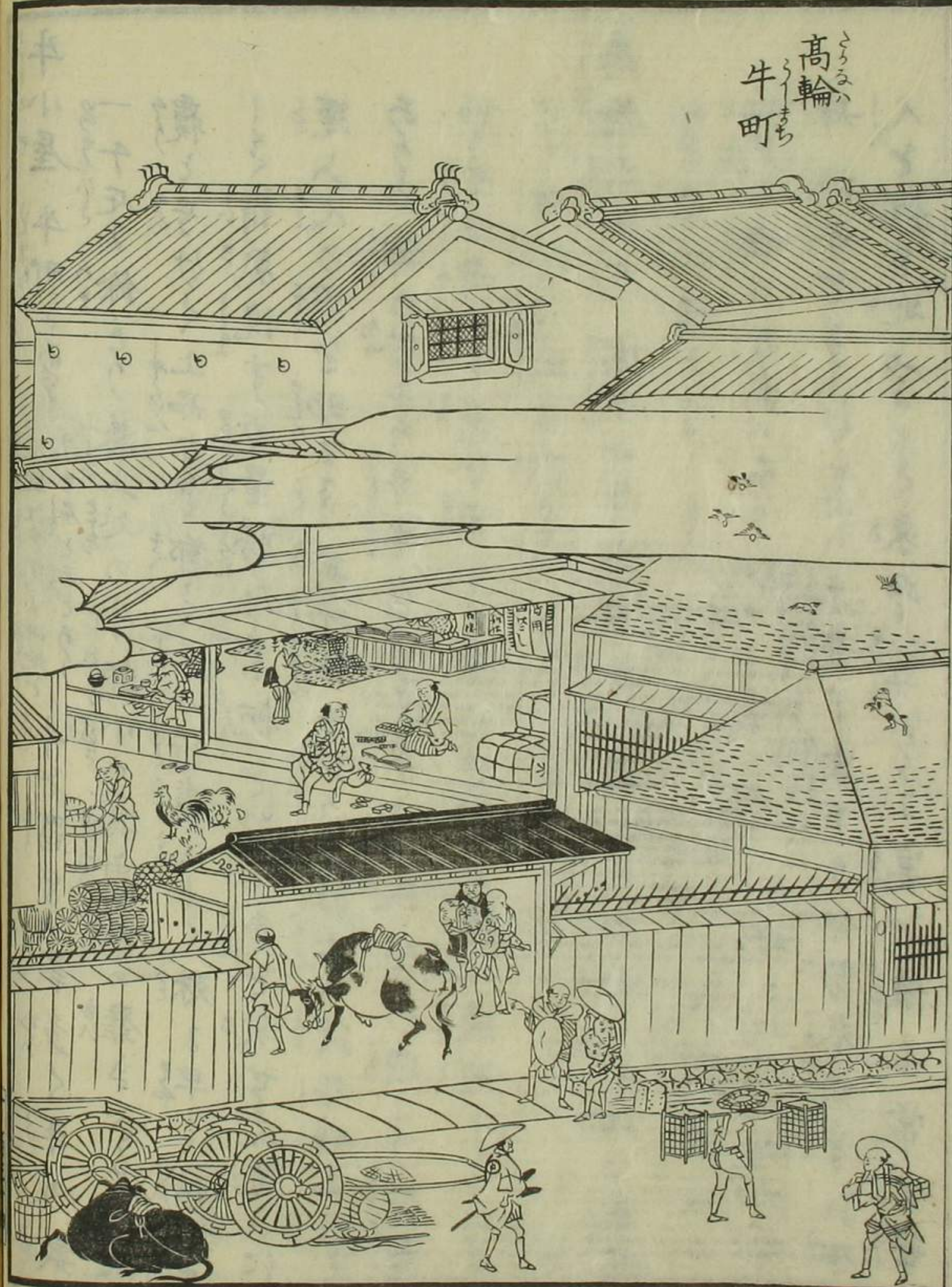
銭

を

此地



高輪
牛町

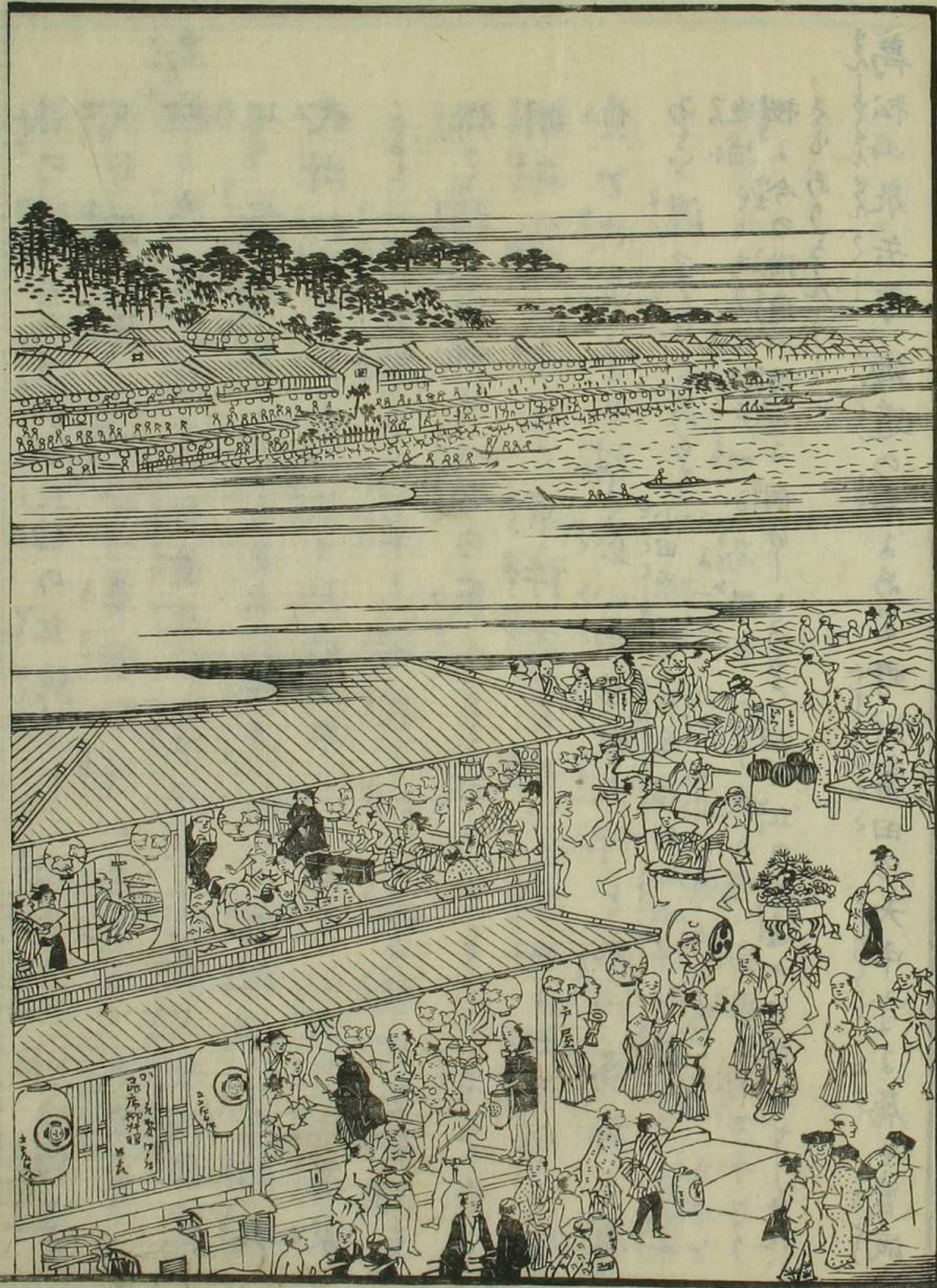


綠海旌郊關高岸
 上路間早朝平吐
 日殘霧半含山遠
 近征帆出東西驛
 馬班長安從此去
 萬里幾人還
 南郭

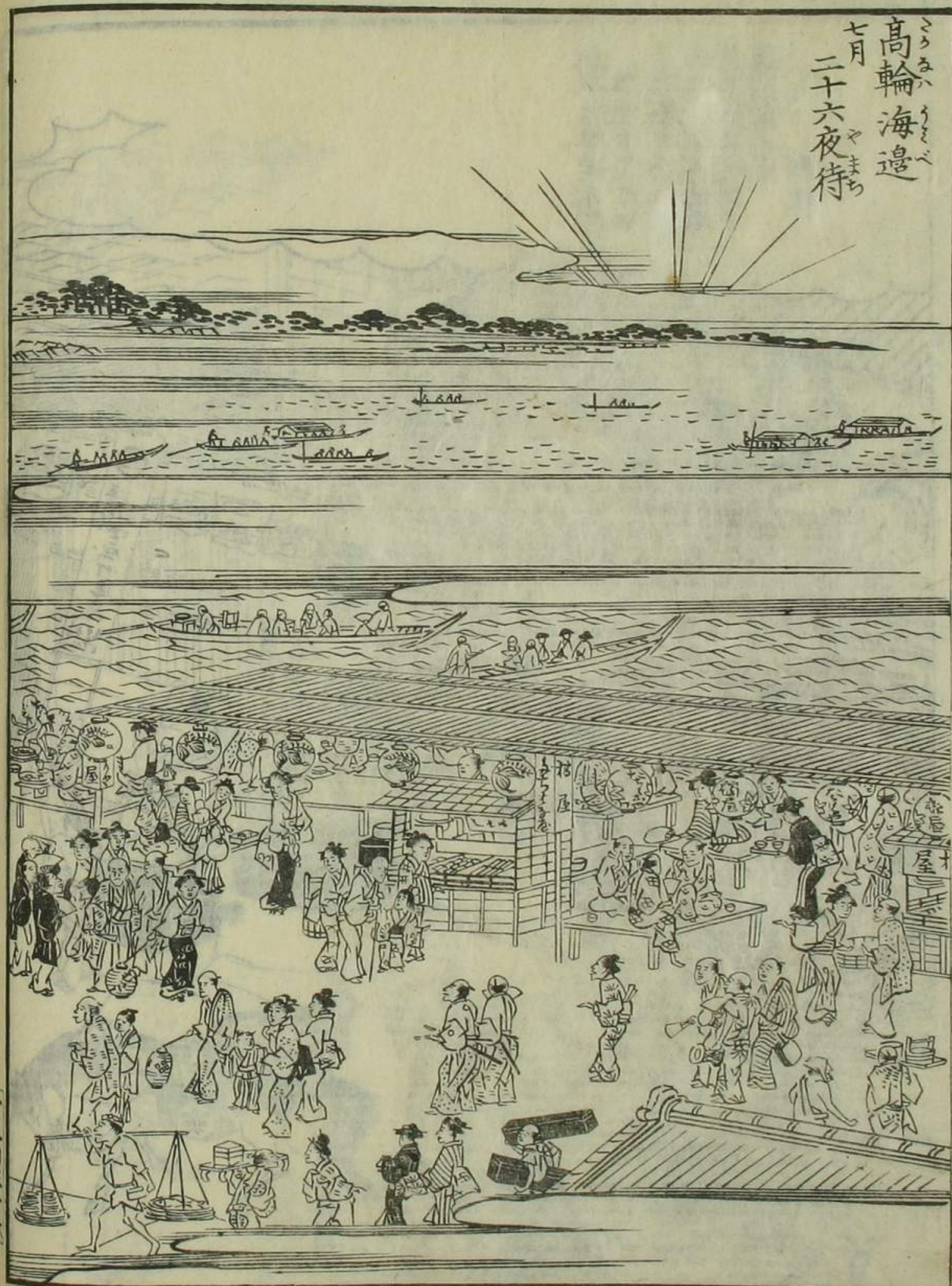


高輪
 大木戸



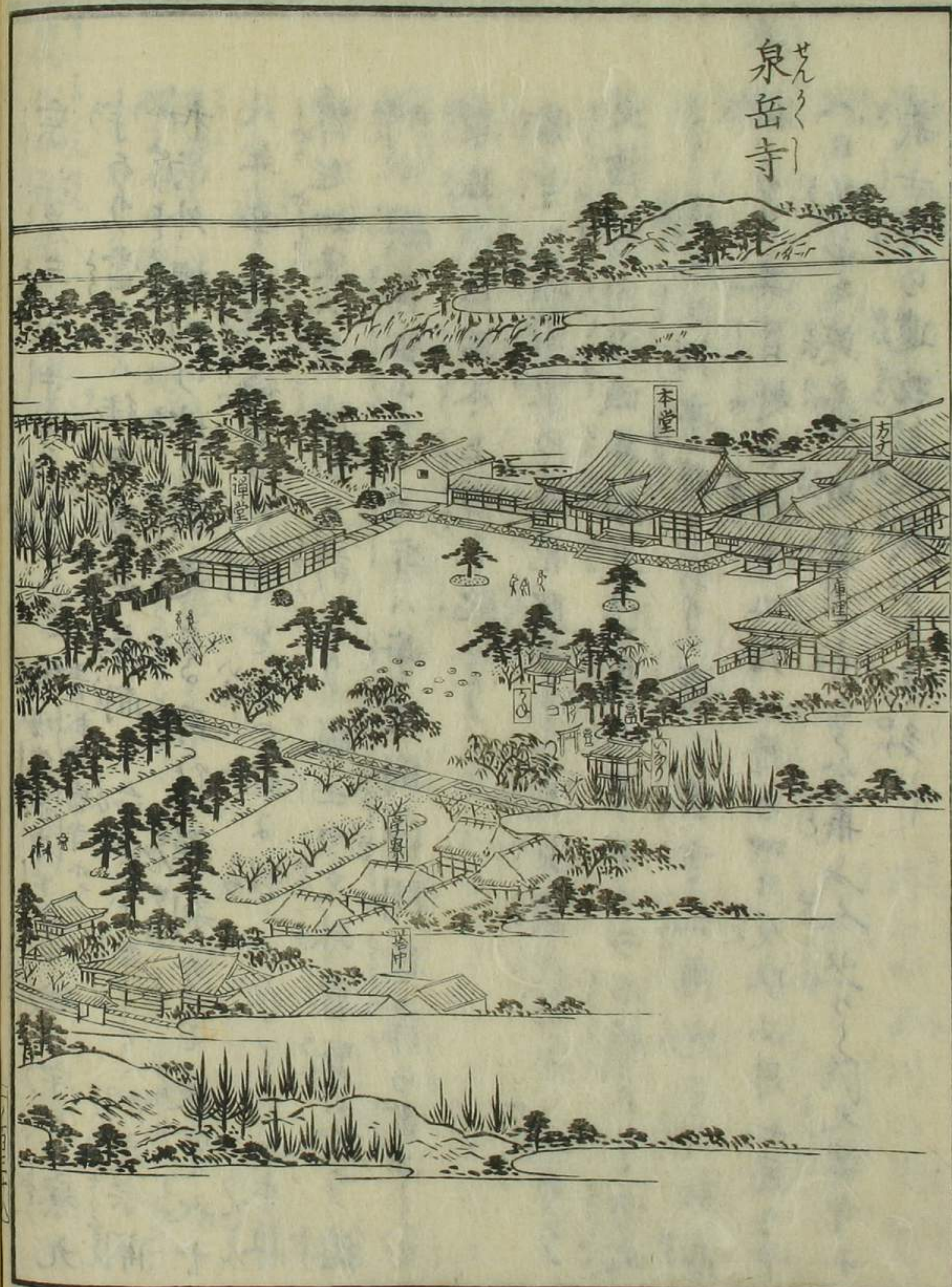
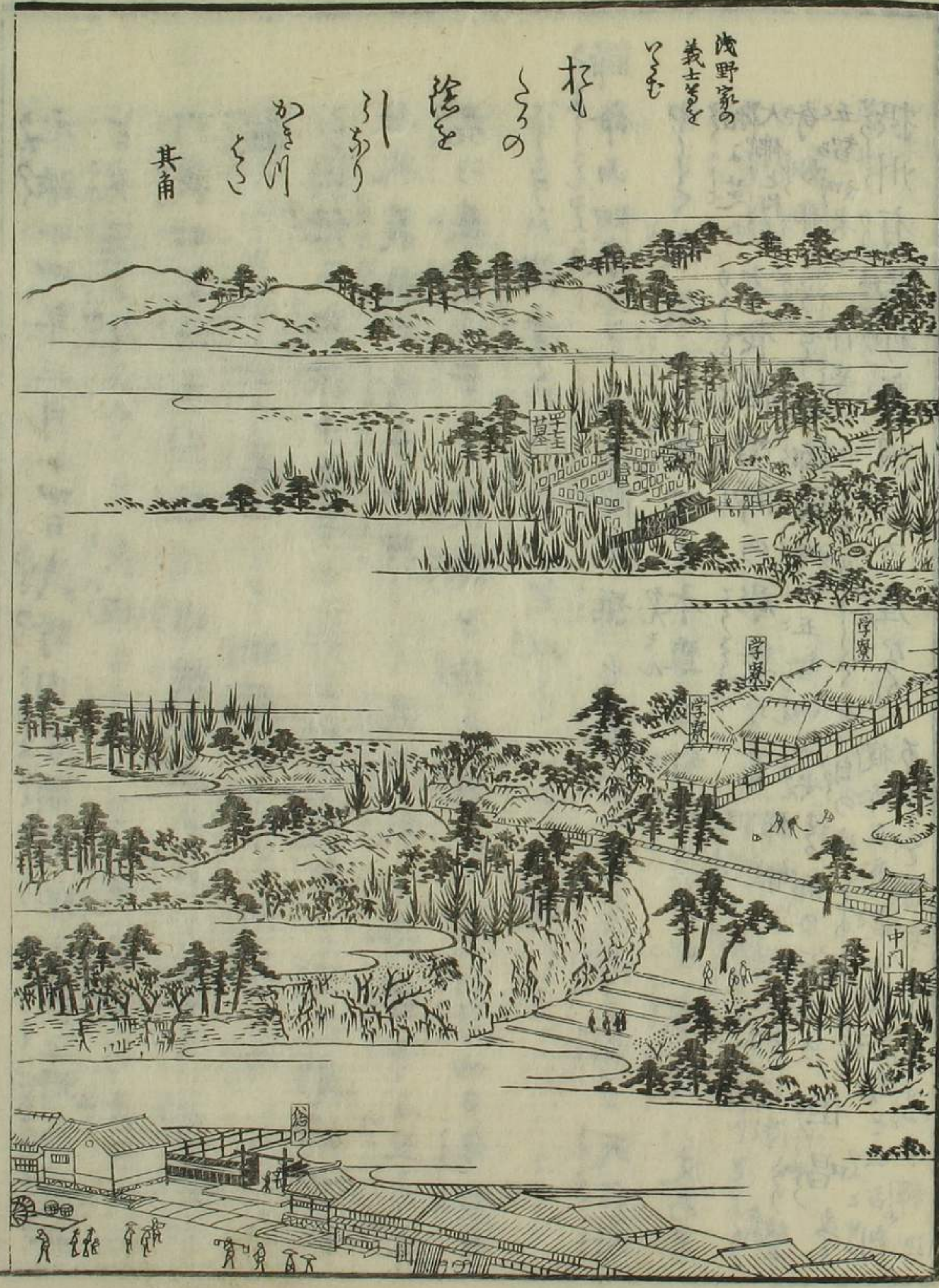


高輪海邊
七月
二十六夜待



昌の地とて後中三田の丘綿とて前中品川の海邊の
開け渚に寄る浦浪の真砂を洗入光景を最良あり
高輪原里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村杯
辺り迄の惣称ありとて異本北條五代記上杉修理大夫朝興
武州江戸の城に居住を大永四年正月十三日小田原北條家
より二万餘騎を引率し朝興と攻んぬ彼地を發向を
依る稻毛六郷の上杉の家人より早馬をとて急を告る
朝興ハ俄の事あり軍評定あり及て中途に出迎ひて勝
負を決せしとて討つ小田原の先陣と品川高輪原
あり渡り合とあり小田原記は永禄信玄川田原を攻むとて茶
追捕あり又江戸咄は高繩手とあり然る時ハ高繩ハ高繩手なり
概々今の海道ハ後世に開けしものあり古ハ丘の上通りと通路せしものあり
萬松山泉岳寺海道の右あり野州富田の大中寺は屬を曹洞

宗江戸三箇寺の一員とて橋場總泉寺坊舎三字学寮九
青松寺當寺ハ宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉し門庵宗開
和尚外櫻田の地を創建する所也後寛永十
八年辛巳再命あり寺を今の地に移したりとて本尊
釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文珠普賢なり總
門の額萬松山の三大字ハ華僧岡沙門道霈の書なりと
康熙辛酉孟冬上浣と記せり當寺ハ浅野家の香花院なり其家累代の兆域あり
又浅野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔あり方丈
より南の丘に半腹あり傍に當寺住僧建る所也石
碑あり其旨趣を注し二月三月の四日及び正月七月の十
六日等ハ英名と追慕しとて集人少く又當寺ハ
義士等の遺物を収蔵する多し



元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英
と刃傷し及ぶよしも長矩は死ともみ後其家の長臣大石
内蔵助良雄本國播州赤穂に在る君の讐は共天と
戴へくはと云の義ふよしも血盟を以て同志の者をかこ
らひ終り元禄十五年十二月十四日讐家に至り義士四十
七人義英の所在を捜し其首級を得當寺に至り亡
君の墓前を祭るの後誅を待り翌十六年二月四日自殺せ
しむハ諸書ハ詳ならずと以てこれを省く

歸命山如来寺 大日院と號を泉岳寺の南に隣る天台宗
の東叡山は屬せし本尊五智如来八座像各一丈あり
浴芝の木食但唱師の彫造なり
大佛と稱し
奇妙佛と稱し
五智如来十三佛等ハ但唱の作なり并自の像も所作の石像の但唱
攝州有馬郡高須村の産なり 彼所は靈龜山與勝寺と云古刹
如來及自の像をも 其母有馬藥師は祈請し是と説く
彫刻し安置せり
三歳ゆゑ魚肉を食せし九歳初る出家す年十五に至り
木食但善の弟子と稱し夫より後信州檀特山は籠り
百日の中念佛三昧を修得し向の峯は三尊の影向を
拜し同國浅間嶽及び南紀の那智山等は籠るる各
百日宛又南海北溟の間を普く回し諸の奇特とるる多
多し終り江戸下り寛永十二年當寺を開創し五智如来
の像を作るとし三時念佛の勸は但善
但唱二代や絶
卧龍岡 境内堂前北の岡と云形状を以て号とを上げ天満
宮の祠ある所天神山と稱し

太子堂 同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺はあり聖徳
太子の像ハ十六歳の容ゆゑ自作
元禄年間開校の江戸鹿子と此所は安置し
陪臣川本八兵衛某故あり

明曆年間越後守光長卿の

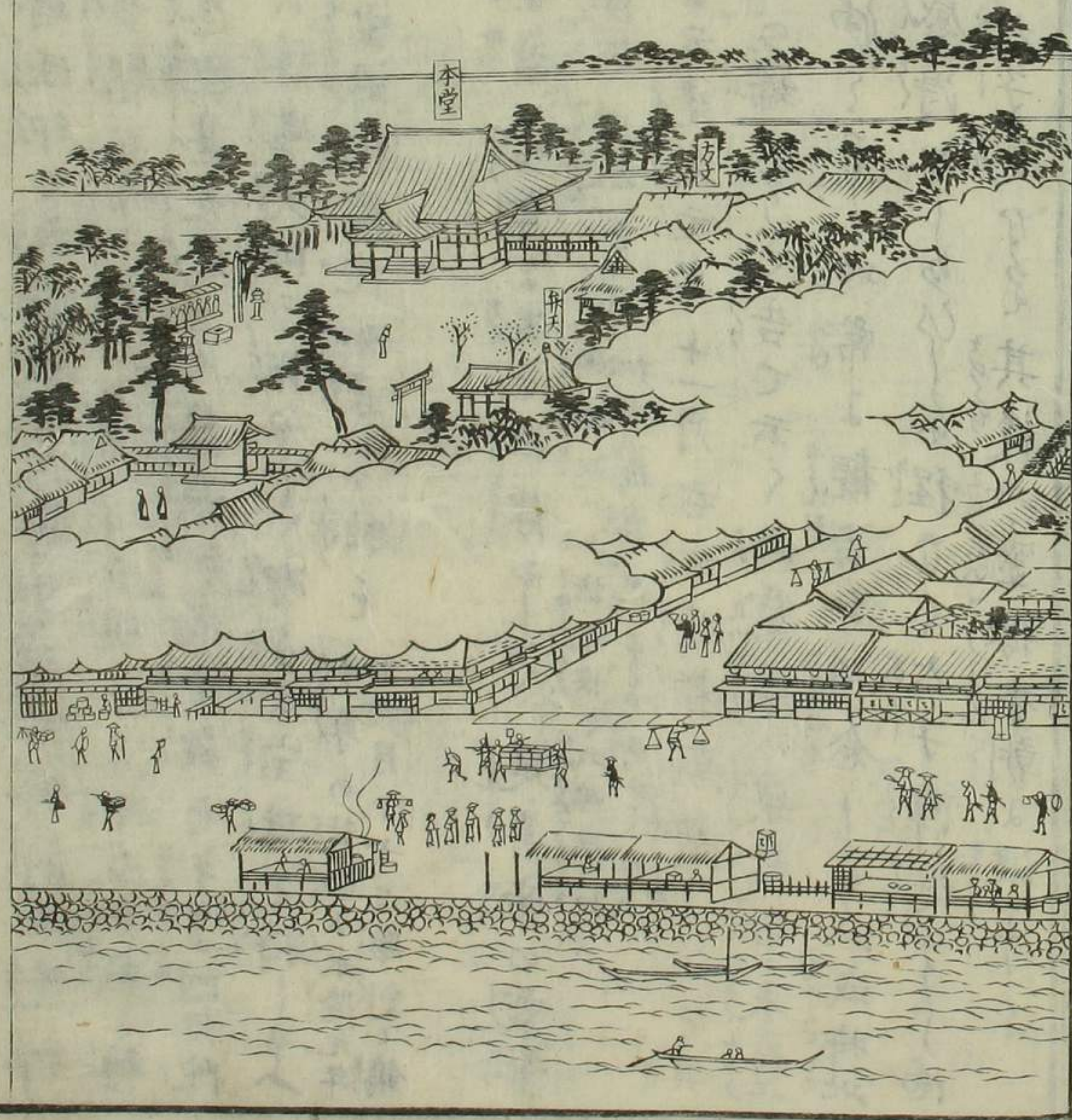
稻荷祠 太子堂 庚申堂の中は並ひ立せり高輪は
産土神なり

庚申堂 同一境内あり本寺青面金剛の木像なり摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作なり縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日一年の間六度ありて八專
の間日中より人間は三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然る庚申と祭る時ハ此蟲退散し身は幸と来りしめ
若不信の輩ある時ハ命根と吸悪業と天帝は訴ふ今帝
釋天王衆生とあわれみ故に汝は此法を附屬を我ハ
則青面金剛なり又十二の誓願を示し僧都信
心肝は命一直は感見しなる所の容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとあり

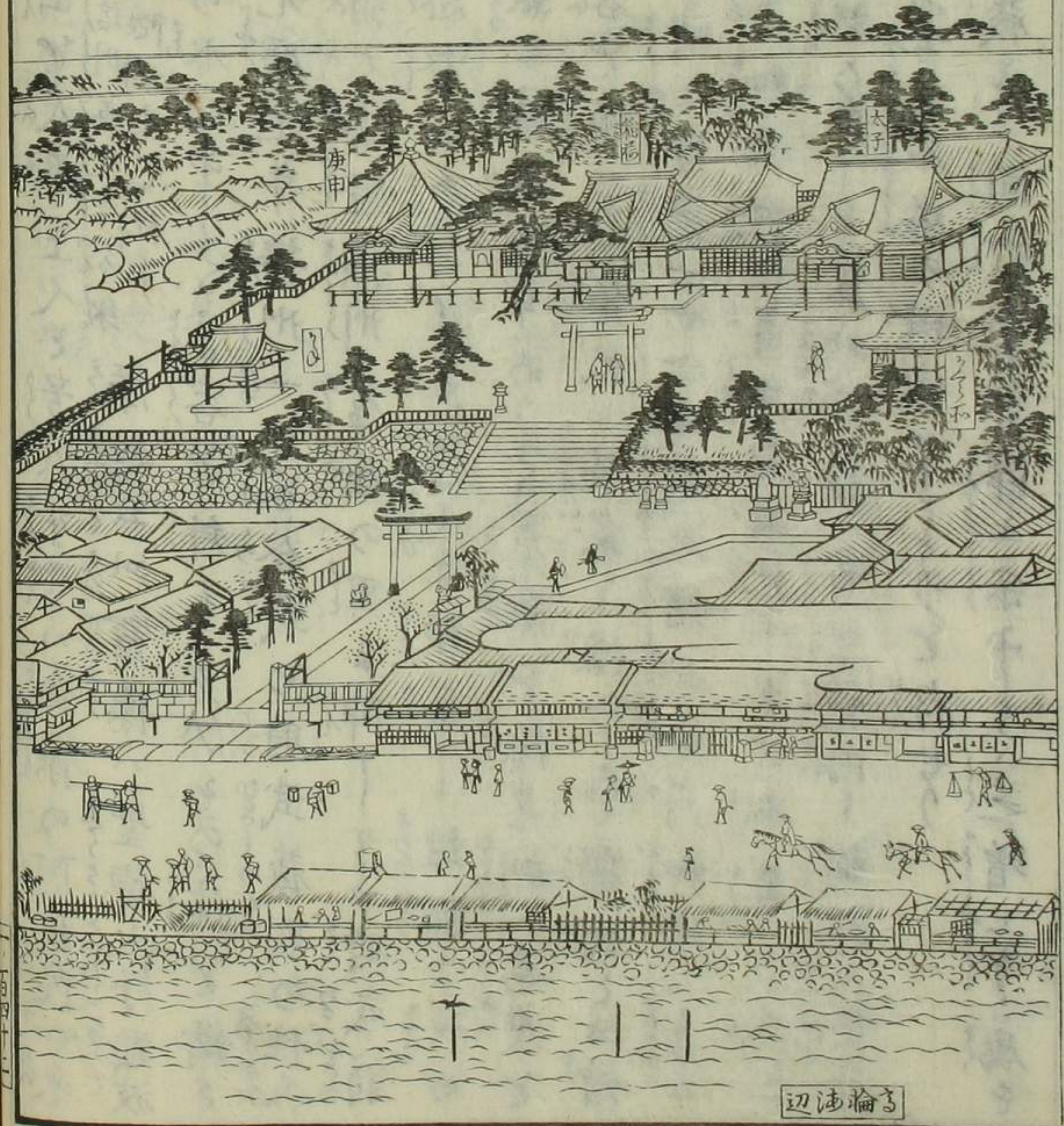
光照山常光寺 同所北町あり浄土宗中へ芝増上寺は

属を開山と大譽上人と号し本寺ハ金像の阿彌陀如来
なり世に信州善光寺分縁起云此靈像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面より客を拜し其の像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄攝州蘆屋の里に陣し其の時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歡喜し鎧櫃に収め
出陣せ然る靈威の有りて危難を除き刺へ忠度を
討く武名を顯せり依代其家傳へしを獨夜と云僧
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へなる
遂に定月和尚件之首趣と自記し本尊と共に
當寺に収られし此故也當寺境内は岡部六弥太
墓と呼ぶ古き石塔の破壊せしものを存せり
珠玉山宝蔵寺 同所あり浄土宗中へ芝増上寺に属す

常光寺



太子堂
稲荷社
庚申堂



輪渚辺



石神社

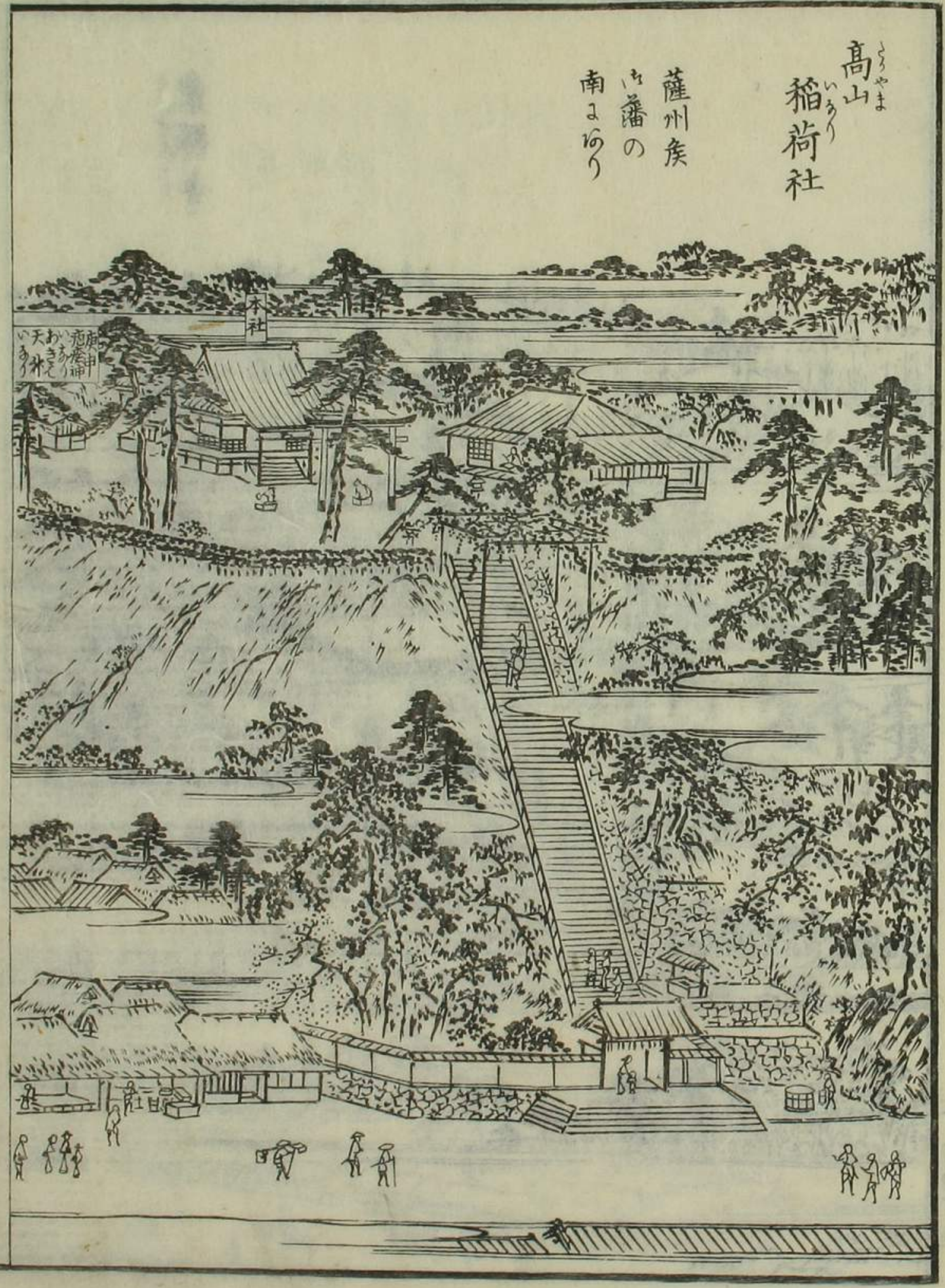
縁遠き人
良縁を祈
れ必張あり
較賽のハ
社地小何
限らそ
樹木を
習俗と
相傳ふ
石の
まの
又

開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覺大師開創の梵刹
 中々天台宗なりしと云ふ所の項より今ノ宗風ハ轉
 して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を奉る阿彌陀
 如来の像ハ善導大師の作なりと云ふ所ハ寶珠と持し
 故に世俗寶珠阿彌陀如来と稱す
 本尊の背面ハ永隆元年
 十一月十七日彫刻と鐫

子安觀世音 當寺ハ安を画像中々々 延喜帝の震筆
 なりと云縁起一卷の事 和画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ
 縁起略ニ云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其
 途中一人の婦ありて告て云く此靈像ハ梁武帝未皇
 太子の御時ニ時常ニ觀音を祈念し或時此
 靈像と感得なりと云ふ程なく太子降誕し
 其後此靈像本朝ニ渡り

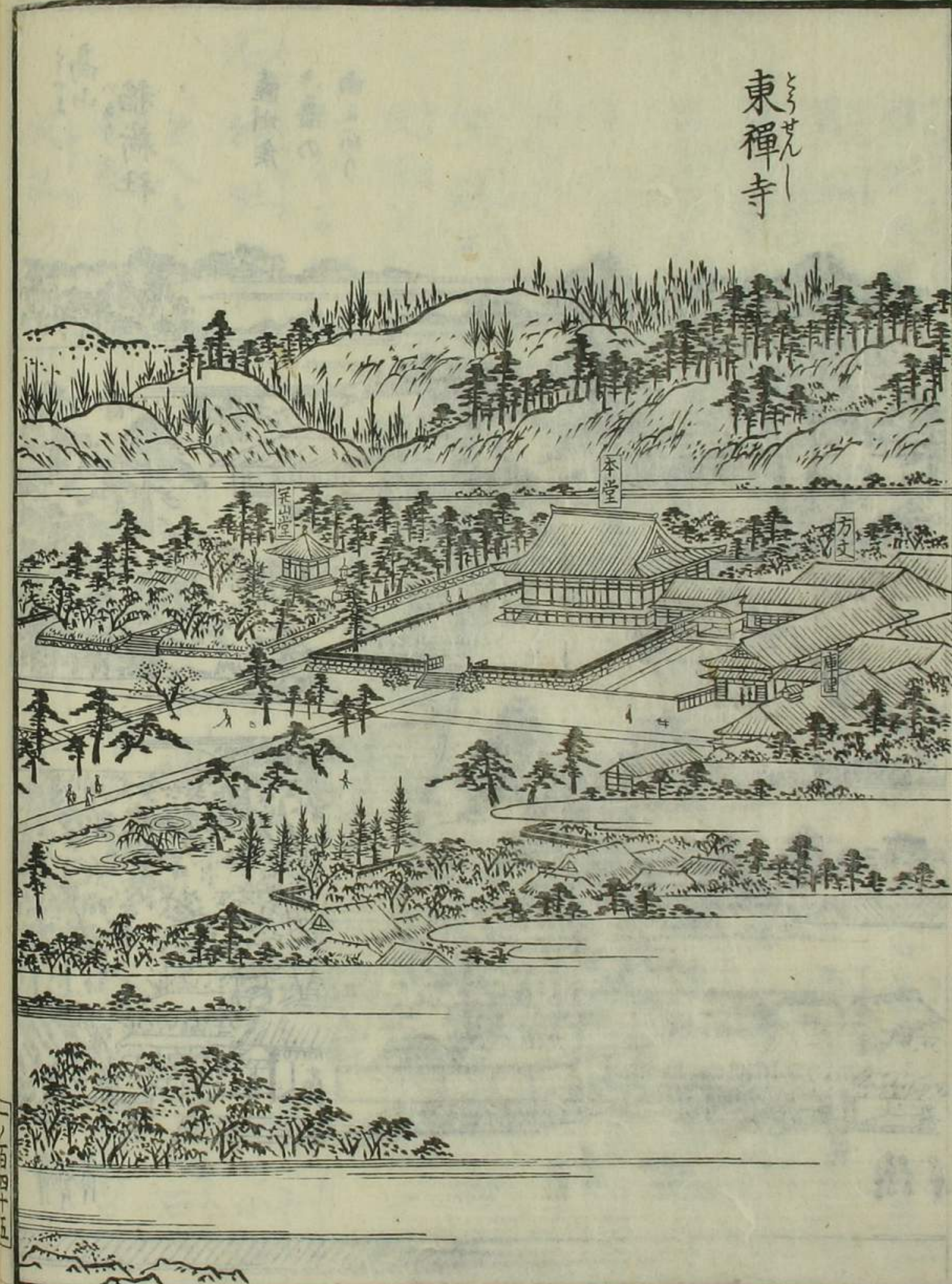
欽明天皇御崇敬あり又 醍醐天皇の尊信なりしに
 震翰を注ぎ縁起を作らせしを將軍よとまふと
 なり頼朝卿を多得し鎌倉に安置し信濃に
 さらし其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添し
 してなり此靈像鎌倉兵乱の後當寺に遷し
 辨財天 慈覺大師江州竹生島に詣て多し頃海中
 波間に影現あり宇賀神形と摸擬し御長七寸
 三分彫刻なりあひを當寺に安置し
 石神社 同所高輪南町鹿兒島久留米両侯の間の小路
 を入る西の方二丁半あり祭神詳ならず同所天台宗
 安泰寺の持たる昔ハ遮軍神を作るとり寄願あり者
 成就の後ハ必何より樹木を携へ來り社地を裁く

高山
 稻荷社
 薩州侯
 藩の
 南より





東禪寺



八百四十五

賽まゐりて此地と石神横町と字なるハ此社このやしろあり

佛あま日山東あま禪寺せん 同所高輪中町あまあり

四箇寺しつかんの一なり本尊ほんそんハ釋迦しやくぢあ如来にがは開山あまハ嶺南れいなん和尚かうと号なは

寶鑑ほうかん國師こくし和尚かうハ日向ひむか國くに鉄肥てつひの人ひと守永しうえい氏うぢ肥前ひぜん守祐しうすけ良よしの五ご

男おとこハ幼こ佛門ぶつもんハ入いる後宗門こうしゅうもんの大徳だいとくと号なは

七日しちにち寂じやくを慶長けいぢやうの頃ころ江戸えどヨ来きる阿左布あさふハ一字いちじをか闢ひらく當寺たうじ

臨のぞむ此門このかどの額ぬか海上かいかう禪林ぜんりんの四し大字だいじハ朝鮮せん國こく雪峯せつぽう比筆ひふで

寶鑑ほうかん録ろく云いふ救きう謚い大だい法ぽう鑑かん禪ぜん師し嶺南れいなん和尚かう大だい心しん中ちゆう興かう主しゆ盟めい東とう禪ぜん

有あ喜き壽じゆ八はち幡ばん宮みやう寺じ外がい右みぎの方かたハあり安泰あんたい寺じ奉ほう記きす

此地このちと有あ喜き壽じゆの森もりと号なは

谷や山さん今いま云いふ所ところハ品川しんがわの入口いりぐちハあり

昔むかしハ大日山だいじつさんと号なはる

諸侯しよこうハ人の弟宅あにやけあり

袖そで崎さき仙臺せんたい侯こう別莊べつしやうの地ちの辺へハかけ

此地このちハ限かぎる

後世こうせい其堂宇そのどうう破壊はくわいせ

寺じハ

或人あるひと云いふ古ふるへ老樹らうじゆの枝えだハ

鶴つるの

都みやこハ

谷山やさん村むらハ

大日山だいじつさんと

又また品川しんがわ北馬場きたうまばの光嚴こうげん

寺じハ

